

箱 崎 遺 跡

福岡市東区箱崎1丁目所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書

第 7 9 集

1987

福岡県教育委員会

箱 崎 遺 跡

福岡市東区箱崎1丁目所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書

第 7 9 集

1 9 8 7

福岡県教育委員会

序

本書は、福岡県粕屋総合庁舎の建設に先立ち実施した発掘調査の記録であります。

調査地は、福岡市東区の宮崎八幡宮の南側に隣接し、同八幡宮に関連する遺構の遺存が予想されました。調査の結果、中世代の井戸・溝・建物地業等が検出され、土師器・瓦・石鍋等のほか、中国から移入された青・白磁等の陶磁器が発見され、往時に於ける生活文化を知ることができます。

本書が、中世博多の研究にお役に立ち、あわせて文化財の保護・普及に活用されることを願ってやみません。

昭和62年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友 野 隆

例 言

1. 本書は、福岡県粕屋総合庁舎建設工事に係る事前の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、県総務部管財課の執行委任を受けて県教育委員会指導第二部文化課が実施した。
3. 本書で示す遺跡の名称は、福岡市教育委員会の分布調査等による名称にあわせた。
4. 本書に掲載する挿図遺物番号は通し番号とし、図版の番号はこれにあわせた。
5. 本書に掲載する遺物の実測は、浜田信也、飛野博文が行い、挿図の作成は整理補助員の豊福弥生および鶴田佳子両女史にお願いした。遺物写真の撮影は九州歴史資料館技術主査石丸洋の指導により須原悦子が行った。また、遺物の整理は同館の岩瀬正信の指導のもとに実施した。
6. 本書の執筆は栗原和彦、浜田が、編集は浜田が担当した。

本 文 目 次

I	調査の経過	1
II	位置と環境	2
III	遺構と遺物	2
	1. 建 物	2
	2. 井 戸	5
	3. 土 塋	22
	4. 粘土塋	30
	5. 溝状遺構	33
	6. 集石遺構	35
	7. 溝	36
	8. その他の遺構と遺物	39
IV	結 び	51

I 調査の経過

粕屋総合庁舎は、前福岡土木事務所跡地と一部隣接する法人用地を買収して建設することが、昭和61年度当初に文化財担当課に合議された。協議では、当該地における文化財の有無について検討なされたと思われるが、福岡市教育委員会が発行した遺跡分布地図では、遺跡地としては記載されてはいなかった。しかしながら、隣接する筥崎八幡宮の宮域では、青・白磁等の陶磁片が表採されており、当該地が古い砂丘地でもあることから、何らかの遺跡地の遺存が予想された。このことから、一部用地買収と建設計画が具体的になった時点で再度協議することとなった。昭和61年9月に2度目の協議を行い買収地において試掘調査を実施し、文化財の有無を確認することとした。試掘は同月中旬に実施した。その結果、地表下1.3m前後の深さで中世代の遺構・遺物が確認された。昭和年代におけるゴミの埋め穴が数ヶ所に認められたが、遺跡はそれほど損壊していないものと考えられた。試掘調査の成果をもとに、建設担当部局と協議を実施し、建設用地全域にわたって遺跡が遺存し、建設計画から建物敷地全域の調査の必要性がある旨協議し、相方了解のうえ調査期間等の調整や予算の打合せに入った。

発掘調査は、買収地部分から始めることとし、土木事務所の敷地については、事務所の移転と建物の解体を待って実施することとなり、昭和61年11月22日より調査を開始し、昭和62年1月20日に現地での調査を終了し、引き続き遺物や図面等の整理作業に入った。

発掘調査の組織は次のとおりである。

総括・庶務

福岡県教育委員会	教 育 長	友 野 隆
〃 指導第二部文化課	課 長	窪 田 康徳
〃 〃	課長補佐	平 聖峯
〃 〃	事務主査	竹 内 洋征
〃 〃	主任主事	沢 田 俊夫

調 査

〃 〃	課長技術補佐	宮小路賀宏
〃	参事補佐兼記念物係長	栗 原 和彦
〃	記念物係技術主査	浜 田 信也

なお、文化課の佐々木隆彦、飛野博文、日高正幸、福岡教育事務所・池辺元明の応援を得た。

また、発掘調査にあたっては、建設担当部局が心よく対応してくれましたことに、ここに記して感謝の意を表します。

Ⅱ 位置と環境

箱崎遺跡は、福岡市東区の筥崎八幡宮を中心に広く展開する箱崎・馬出遺跡群の一角を占めるとされる。今回の発掘調査対象地区は、当宮境内の東南隅に隣接する所で、福岡市東区箱崎1丁目18-32外に所在。

地理的には、福岡市内の東北部に流れる多々良川の支流である須恵川と宇美川のつくる沖積地の西側に博多湾に沿って南北に延びる古砂丘上にある。現況での標高は4m前後で、かつて千代の松原として親しまれたところ。今日では市街化され、九州大学のキャンパス等に松原の思影が残る。この古砂丘は、御笠川河口から多々良川河口間に連らなっていると思われるが、その幅については、宇美川と元寇防塁推定線間にあり、行政区では東区千代・箱崎・馬出・貝塚に広く展開するものと思われる。

今回の調査地区では、筥崎宮の隣接地で、東に宇美川が流れ、西側700m前後の距離に元寇防塁推定線が南北から北東方向へ延びている。遺跡は、標高3m前後の砂丘上にあり、1.2m強の整地層が堆積している。この砂丘上における遺跡については、先に福岡市教育委員会が、地下鉄建設に伴い発掘調査した箱崎・馬出遺跡群が知られるのみである。調査箇所は、本遺跡群の縁辺部であるといわれており、本遺跡群の実態把握は始まったばかりである。

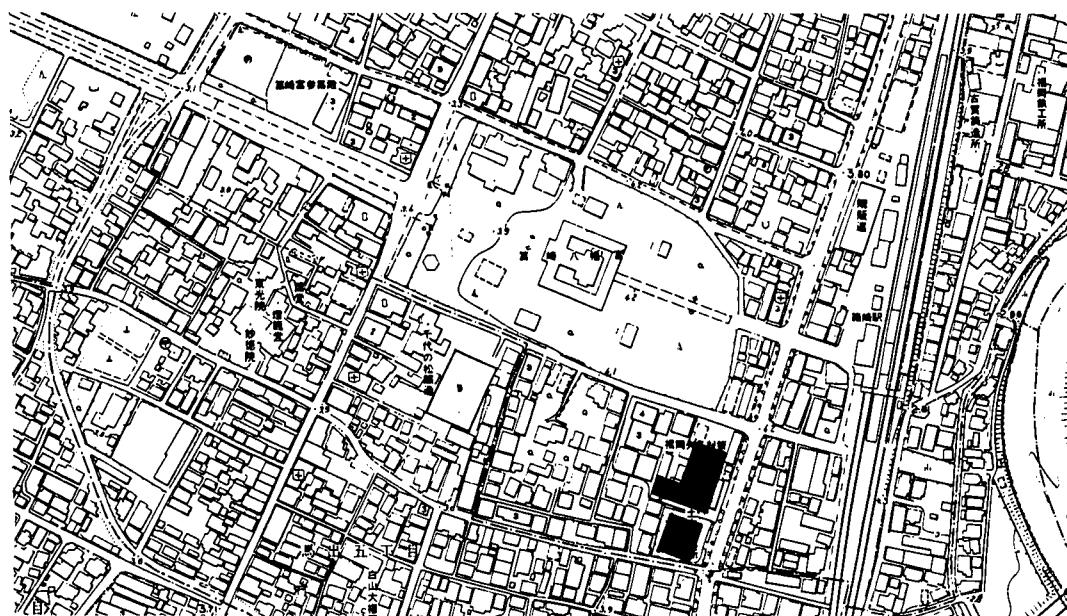
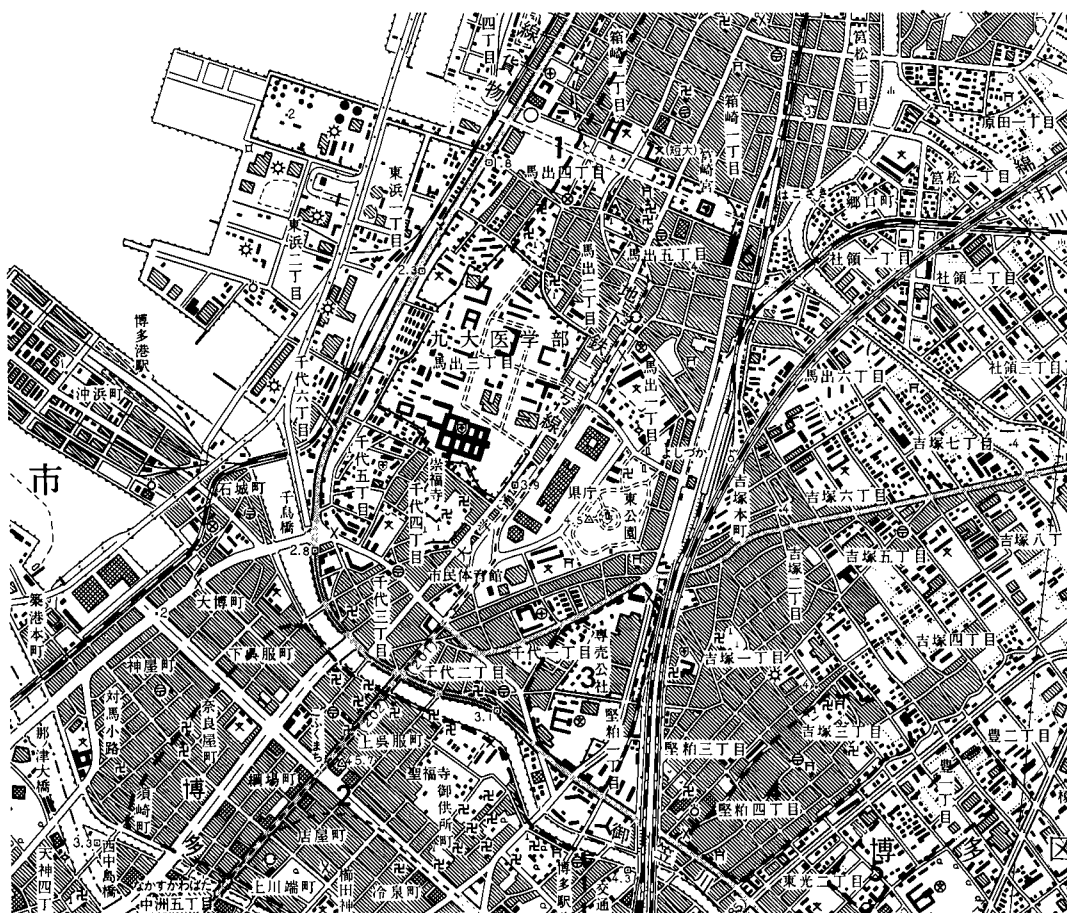
なお、周辺遺跡として、御笠川沿いの砂洲には古代・中世の博多遺跡群があり、博多の町の実態が着々と明らかにされている。また、当川右岸の微高地には、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群、豊遺跡群がある。

Ⅲ 遺構と遺物

調査は2調査区に分けて実施した。遺構は両調査区全域に検出された。生活遺構が主体で、建物跡、井戸、溝のほか、柱穴状小穴や竪穴状の遺構が検出され、多量の遺物が出土した。遺跡地は、旧郡役所の建物のある所で、後の県土木事務所等の使用により、建物が増改築され、その基礎工事や廃棄物処理のため深く掘られた塹がいくつもあり、これらを除去するため、かなり深く掘り下げた。よって、前記の遺構は完全に把握できなかったものもあったことを特記しておく。各遺構や遺物は次のとおりである。

1. 建物

調査区内で数多くの小穴が検出されたが、これらは散在し、ある部分では密集している。中



第 1 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000, 1/8,000)

には、根石かと思われる扁平な石を据えているものもあったが、建物柱穴としてとらえがたい配置で検出されている。小穴以外で建物と関連する遺構として、南北および東西方向で延びる溝状の細長い落ち込みと建物地業と考えられるものがある。

建物布張溝状遺構（付図1）

調査区中央より北半部において大半が検出されている。調査区東側に南北に途切れて延びるものと、これにほぼ直交する東西の3条の同種の遺構がある。いずれも灰黄色の粘質土が埋土であって、布張溝の切れた部分には同種の土が埋まる小穴がある。南北溝は南と北へさらに延びており、これと平行するような布張溝と思われるものが18号井戸の東側にもみられる。これらの溝の底面レベルは大差なく関連するものと思われる。南北方向のものには、扁平な河原石が所々に検出され、これと連なる小穴内にも同様の石を据えているものもある。これらの扁平石と柱はほぼ等間にあり、1.1～1.3mを測るが、1.3mの数値が大半を占める。

南北方向に対して東西方向のものが、西側で4本、東側で1本が検出されている。それらの間隔は北から2.9m、5.1m、4.7mとなっている。南北方向に平行するものが調査区の西側（トレンチでも）で確認されていないので、これが建物布張溝なのか、あるいは築地堀の下部構造になるものかは明確にしたい。

埋土中より若干の遺物を採集したが、いずれも細片で図示できなかった。

建物地業（付図1、2）

調査区の東よりに検出され、一部が調査区外にあるため完掘していない。南北方向とその東にある東西方向の布張溝状遺構や井戸、土壌が重複し、これらより古い時期のものである。遺構は、これらの遺構や近代建物の基礎により崩壊し完存するものではない。

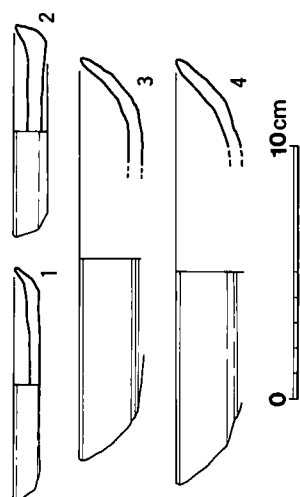
当遺構は、南北11.8m前後、東西12m以上の塙を30cm前後の深さで掘り下げ、これに角礫・河原石および若干の瓦片や埴片を敷きつめた遺構である。これらの礫群は、まず塙を掘り大小様々の礫を地山上に置き、厚さ10cmほどの粘土層と砂を含む粘質土を挟んで礫を置いている。おおむね2段階に分けて敷き込んだ礫群はさらに砂を含む粘質土によって全体を覆われている。この粘質土は、周辺整地層に比べやや硬く色も若干異なったが、その範囲は明確に把握できなかった。上部に敷かれた礫群は、東側が大きな石が多く、その間に小石を置いており、割りあい雑な感があるが、縁辺部は丁寧に並べている。それに比べ西側は小石を利用し、まばらではあるが丁寧に置いた感があり、縁辺部は特に密に丁寧に置いている。

礫群間には礫のない部分があるが、ここには柱穴等の掘り込みがあるものではなく、この下にも下位の礫がある。また、柱の礎石あるいは礎石根石となるような礫やまとまりはない。

恐らくは、この施設の土に地山から30cm以上の高さで盛土を行った可能性があり、たぶん亀腹基壇状につくられた建物基礎の下部構造と考えられる。当遺構の西辺の方向は、N-14°30'-Eである。

なお、当遺構の西側にはほぼ方向を同じくする小列石2がある。いずれも西面する部分の面を合せて4～5個の角礫を並べるものである。これらはレベル的にはほぼ同じ位置にあり、この建物の関連するものかどうかは不明である。

また、北辺の中央やや東よりの位置で、不整形の塙が接して検出されているが、塙内に角礫が南北に並び、角礫が建物地業の下層の礫群から連続しているようにも思え、塙内礫の下位は一段と深くなっており排水を思わせる感がある。関連性については、いますこし判断しかね、東西に延びる布張溝状遺構との関連も考えられる遺構である。



第2図建物地業覆土出土遺物(1/3)

遺物は覆土中より、土師器、青・白磁、陶器、瓦片を採集したが、いずれも細片で図示できたのは土師器(1～4)のみである。小皿は糸切り底で、1は薄手、2は厚手の身である。3・4の坏は身が厚手のもので、器面の調整はいずれもナデによるもの。

2. 井 戸

両調査で24基の井戸を発掘したが、なかには完掘していないものが数基ある。これらの位置は調査区全域に見られ、建物等の関連性はつかみ得ない。各井戸については、個々に詳述するが、出土遺跡については、図示するものを中心に記載するが、各井戸とも土師器、青・白磁を主体に瓦質土器、陶器、瓦等が量的には差異のあるものの出土していることを念の為記載しておく。

1号井戸 調査区の北西隅で検出された。調査区法面が崩壊する恐れがあったので完掘していない。井戸内に埋まる土質から新しい時期のもので、埋土中より江戸期以後の陶片も採集された。土師器には小皿、坏があり、青磁片もある。

2号井戸(第3図2) 掘り方の一部が調査区外に広がるが、ほぼ円形のプランを呈す。掘り方断面は深い摺鉢状をなす。木桶を下部に積み上げたもので、その径は55cmほどである。木桶の板は厚さ1.5cmほどで、他に較べやや幅の狭い板を使用している。

遺物は掘り方埋土中より、土師器、青・白磁、瓦器、陶器がある。いずれも細片であり、図

示できたのは土師器坏（52）のみである。52は径15.2cmを測る身の厚いもの。内外面ともナデによる調整。青・白磁には碗片が多く、小型の白磁合子片や青白磁（スカイブルー）の碗片もある。瓦器は碗片である。

3号井戸（第3図3） 2号井戸の南東側に隣接して検出する。掘り方は円形で、3.2×3.1mを測る。井戸枠は掘り方中心よりやや東に設けられている。木桶を積み上げたもので、掘り方墳底を掘り下げ据えている。木桶の径60～70cmである。厚さ2cm、幅10cm前後の板を用い木桶をつくっている。

遺物は、土師器（16、41）、青・白磁（73・74・87）、瓦質土器（58）、陶器がある。細片が多く、図示できないものに蓮弁文のある青白磁碗や、白磁壺片、内面に緑黄の釉を施す盤等がある。

4号井戸（第4図4） 長方形の掘り方に設けられたもの。掘り方は南北に長く、6.25×2.75mを測る。井戸は中央よりやや北に設けている。掘り方断面は東西軸では急傾斜であるが、南北軸では摺鉢状をなすものと思われる。掘り方墳底に70cmの円形墳を掘って木桶を据えている。木桶の径は約65cmである。厚さ1.5cm、幅10cm前後の板を用いて造っている。

遺物は、土師器坏（53・54）、白磁碗（70、76、78、80）、石器（10）のほか、青磁碗、白磁瓶、片口、陶器の細片が出土している。

5号井戸 4号井戸の北、攪乱墳との間で検出された。掘り方墳はなく、井戸枠を組み込む堅坑のみが遺る。これも1号井戸と同様で新しい時期のものである。かなり深いため完掘していない。

遺物は埋土中より近世陶器片のほか、青・白磁片、陶器片がある。陶器片は甕の下胴部で、墨書がある（331）。

6号井戸（第3図6） ほぼ円形をなす掘り方を持つ井戸である。掘り方の径は3.6×3.7mを測り、断面は鉢形をなす。掘り方の墳底よりさらに深さ70cmほどの円形墳を掘り、木桶を据えている。井戸枠は掘り方中央より北に据える。木桶の径は約65cmである。厚さ2cmほどの板を用いて造っている。

遺物は土師器（17・39）のほか、蓮弁文のある青磁碗片、白磁碗、皿、口禿皿の各細片、陶器片、石鍋片があるが、17は皿で径10cm、高さ1.7cm、39は坏で径13.7cm、高さ2.6cmを測る。いずれも糸切り底で、体部はナデによる調整。

7号井戸（第4図7） 長円形プランを呈す掘り方をもつ。掘り方断面は鉢形をなし、掘り方墳底は平坦となり、さらに深さ約80cmの円形墳を掘り木桶を据えている。円形墳は木桶よりやや大径のもので、木桶の径は約80cmである。厚さ2cm、幅10cm前後の板を用いる。

遺物は土師器、青・白磁、瓦器、陶器、石鍋がある。いずれも細片であるが、青磁は蓮弁文碗、白磁は碗片で口縁部が玉縁のものとそうでないものがある。

8号井戸（第5図8） 円形プランを呈す掘り方をなし、上位に一段を有す。掘り方は径4.4×3.7mを測り、断面が摺鉢状をなす。掘り方墳底にさらに深さ30cmほどの円形墳を掘り木桶けを据えている。木桶の径約65cmで、厚さ2.5cm、幅10cm前後の板を用いて木桶を造っている。

遺物は青・白磁、陶器、鉄器片がある。いずれも細片であり、磁器は碗、皿がある。89は壺の胴下部と思われる。厚みのある底部で、台は削り出しである。体内面にはロクロ引きによるものか掻き取ったようである。胎土は薄茶系の色で、釉は体部下位までかかる。釉色は黄味のある薄緑色をなす。

9号井戸（第5図9） ほぼ円形を呈す掘り方内で、北よりに石組の井戸を設ける。掘り方は完掘していないので断面形状は不詳であるが、図示するように南側はゆるやかな傾斜で墳底に到るものと思われる。井戸は墳底に円形状の墳を掘り、厚さ2cm、幅30～45cm、長さ45cmの板を組合せている。その平面形は八角形状をなす。この木組みの上に石を積み上げている。石は丸石、角石で大小様々なものを用いている。控積みをしっかりしたものであった。この上部構造がどのような形態をとるのか不明である。掘り方内には崩壊した石材もみられず、石組み上部は、木あるいは瓦を積上げたものと思われ、廃棄後に別途使用したため遺存しないものと考えられる。

遺物は土師器、青・白磁等がある。10、42は土師器で、10は径8.1cm、高さ1.5cmの小皿、42は径15.9cm、高さ約2.7cmの坏である。いずれも糸切り底である。63は白磁の口禿皿、81は白磁碗である。このほか外面に蓮弁文のある青磁碗、玉縁口縁の白磁碗、青白磁で高台の高い碗等の細片がある。

10号井戸（第6図10） 長円形プランを呈す掘り方をもつ。径は3.8×約3.0mを測る。掘り方断面は箱形に近く一方に段がある。墳底には約1mの円形墳を掘り木桶を据えている。木桶は径67cmでやや傾いているが、当初からこのように据えたものではないと思われる。木桶は厚さ1.5cm前後で、幅12～15cmのやや広い板を用いている。

遺物は土師器の小皿（22）と坏（34）、白磁の皿（64・67）、白磁碗（75）、青磁碗（84・85）、雑器甕（93）、石製品（5）がある。64は皿底部で平底、67は口禿でやや上げ底気味。75は口縁部が尖り気味に外反する。高台は高く、内底には沈線を施す。84・85は見込みに印花文を施す。93は胎土が灰色で、褐釉（飴色に似る）を内外面に施す。5は石鍋片の再利用品で把手のつくもの。外に蓮弁文のある青磁碗があり、陶器片が多い。

11号井戸 8号井戸の南に隣接して検出された。8号井戸の掘り方により大半が崩壊する。遺存状態も良好でないので完掘していない。8号井戸より古いが、建物地業を崩しており、これより新しい時期のものである。

遺物は細片が多い。青磁（蓮弁文、櫛歯文）、白磁の碗や皿、菊花文のある陶器などが見られる。土師器もあるが細片が多い。18は小皿である。径9.6cm、高さ1.5cmで糸切り底、板目が

ある。

12号井戸（第6図12） 不整形プランを呈す掘り方に井戸を設ける。掘り方は約3.6×2.8mを測る。当初整地面では長方形状なる土壌と思われていたが、整地面除去によって井戸であることを確認した。井戸は掘り方内のやや南よりに設けられている。掘り方断面は摺鉢状をなすものと思われる。井戸は径65cmほどの木桶を据えている。木桶は厚1～2cmで幅10cm前後の板を用いている。

遺物は土師器（20、35、46、51、59、60）、青磁、白磁（72）、大形陶器、鉄刀子（2）がある。20はヘラ切り底の小皿で板目あり。径9.4cmを測る。35は径12.9cmを測る坏。糸切り底で板目あり。46は台付の皿で、径11.3cmを測る。51は低い高台の付く埴底部片である。59・60は大小の埴である。いずれも外面に煤が付着する。72は口径12.9cmの小ぶりの碗で、見込みに円形状に釉を掻き取る。このほかヘラによる片彫の草花文や櫛歯文を施す青磁碗片がある。鉄刀子は遺存状態のよいもので、身の長さ10.9cm、柄部長8.7cmを測り、身の薄いものである。

13号井戸（第6図13） 隅丸の正方形状プランを呈す掘り方で、3.75×3.45cmである。井戸は掘り方内の東側に寄った位置に設ける。井戸は木桶を積んだもので他と変らなく、同じように据えられている。木桶は厚さ2cm前後、幅15cm前後の板を用いている。他に比べやや厚く幅広の板を利用する。

なお、当井戸は東西溝と重複し、この溝より新しい。

遺物は土師器納片が多く坏（40）のほか、青磁、白磁（62・65・66）、青白磁、片口、陶器、石鍋の各片がある。40は14.1cmを測る坏で、糸切り底。62、65、66は口禿の皿で、62はやや小型である。62、65は平底、66は小径の底部で上げ底気味の器形になるものと思われる。青磁は外面に蓮弁文を施すものがあり、外底面に墨書のあるもの（328）がある。

14号井戸（第7図14） 13号井戸と重複し掘り方プランは一部で不明であるが、長円形状をなすものであろう。井戸は掘り方内の北寄りに設けている。整地面でも確認されたが、プランが明確に把握できず、整地層の除去によってプランを検出した。これも木桶を利用した井戸で、その径は約80cmである。厚さ2cm前後、幅15cm前後の板を用い木桶を造っている。

遺物は土師器、青・白磁、陶器、石器、鉄器がある。土師器は小皿の小径のもの（5・6）とやや大きなもの（21）がある。前者は糸切り底、後者はヘラ切り底で板目がある。68は白磁の蓋で壺か瓶に供するものか。外面はヘラケズリ調整で、身受け部より上部に青味のある釉が施される。71の白磁碗は、釉色が薄茶味のあるもので、全面に釉が施され、見込みに4ヶ所の砂目跡がある。全体に厚身のあるずんぐりした器形である。半島製のものであろうか。79は白磁の碗で、青味のある釉が全面に厚く施される。内面にヘラ彫りの草文を施す。図示できない青磁には蓮弁文碗や皿、小碗がある。石器は石鍋の再利品片があり、鉄器には釘、刀の細片がある。

15号井戸（第7図15） 14号と同じく整地面では彫り方プランを明確に把握できなかったものであるが、井戸枠の納まっていた円形坑は確認されており、井戸の所在は明となっていたものである。掘り方は調査区外に広がるが、長方形プランを呈すものであろう。やはり木桶を利用した井戸で、木桶の径75cmで、厚さ2cm前後で厚さ10cm前後の板を用いて造っている。

遺物は、土師器、青磁等の細片がある。36は土師器の坏で、径12.9cmを測る、口縁部は細く外反する。糸切り底で板目がある。青磁は蓮弁文の碗片があり、盤の細片も出土している。

16号井戸 側量杭が遺構のほぼ中央にあり、掘り方プランを確認するに留まり、完掘していない。長方形プランを呈するものであろうか。遺構は調査区外に広がる。

遺物は、土師器、青磁等の細片が出土。

17号井戸（第7図17） 建物地業の西側に接して検出される。近代建物の基礎が重複し、その検出と確認は困難であった。井戸は建物地業より古く、その整地面下に遺構は掘られている。掘り方は卵形に近いプランを呈し、断面は摺鉢状をなす。埋土は他と違って南側より黒色土が深く流れこんでおり、この層中に遺物が多い。井戸は木桶を利用したもので、径50cmで他に比べ小径のものである。井戸内下部に10数個の角礫と瓦片が落ち込んでいた。一部に焼けたものがあり投げ込んだものであろう。

遺物は土師器片が多く、白磁碗片がある。23は小皿で、径7.9cmを測る。ヘラ切り底である。48は鐙のつく高台付埴の底部と思われる。黒色を呈し、内外面ともナデによる調整。

50は低く尖り気味の高台のある埴であろうか。外面はナデ整形で、内面はミガキ状である。57は器高の高い埴で、内外面とも細いヘラミガキ痕が認められる。内面は黒色、外面は暗褐色を呈す。

18号井戸（第8図18） 土壌と重複し、これより古い。円形プランをなす掘り方で、径3.05×2.85mを測る。井戸は掘り方内の北東寄りに設ける。掘り方は段を有し、一方は深い位置になっている。掘り方坑底に径90cmほどの円形坑を掘り木桶を据えている。木桶の径約65cmで、厚さ約1.2cm、幅10cmほどの板材で造っている。

遺物は土師器（7～9, 37, 55）、白磁（61）、雑器（90～92）、鉄刀子（3）がある。7は小皿で径6.5cm、高さ1.7cmを測る。糸切り底。8、9は同形の小皿で、径7.8cm、器高1.4と1.4cmである。いずれも糸切り底。37は坏で、径13cm、器高3.6cm前後で、糸切り底。57は大型の坏で、径16.3cm、器高3.6cmである。ヘラ切り底と思われ、外面はナデ整形、内面はナデ後に丁寧なミガキを施す。内面上部に稜がつく。61は白磁の口禿皿である。外底面の釉は掻き取るが完全でない。内面に沈線を施す。90は壺の口頸部片である。釉は濃小豆色を呈す。91は口唇部が短かく外反する甕の口頸部である。胎土は灰色で茶褐色の釉を内外面に施す。92は盤で、口唇部より下の内面にオリーブ色の釉が施行され、外面は明褐色をなす。鉄刀子（3）は、鋒先の欠失するもので、刃部の非常に短いものである。研磨により短くなったものであろうか。このほ

か青磁で蓮弁文のある碗片や陶器の大甕片がある。

19号井戸（第8図19） 新しい廃棄物処理穴によってからり削平されており、他に比べやや下位のレベルで検出された。掘り方は不正円形をなすプランで、径3.15×3.15mを測る。掘り方内の東よりに井戸を設ける。掘り方は透水レベルまで掘り下げ木桶を据えている。木桶の径約70cmで、厚さ2cm前後、幅10cm前後の板を用い造っている。

なお、当掘り方内に2個の木桶を同レベルで検出しており、井戸の崩壊によるものか、掘り変えて井戸を設けている。

遺物は土師器（38）、白磁（83）、天目（88）がある。38は坏で径13.1cmで、糸切り底、板目がある。83は小形の壺で外面に蓮弁と草花の浮文がある。釉は淡い灰色を呈し、内面まで施すが、下位までは施していない。88は天目碗である。胎土は茶褐色を呈す。体部外面はヘラケズリ整形か。釉は厚く黒色を呈し、釉端は光沢のある茶色を呈す。体部外面下位を除くほかは施釉。

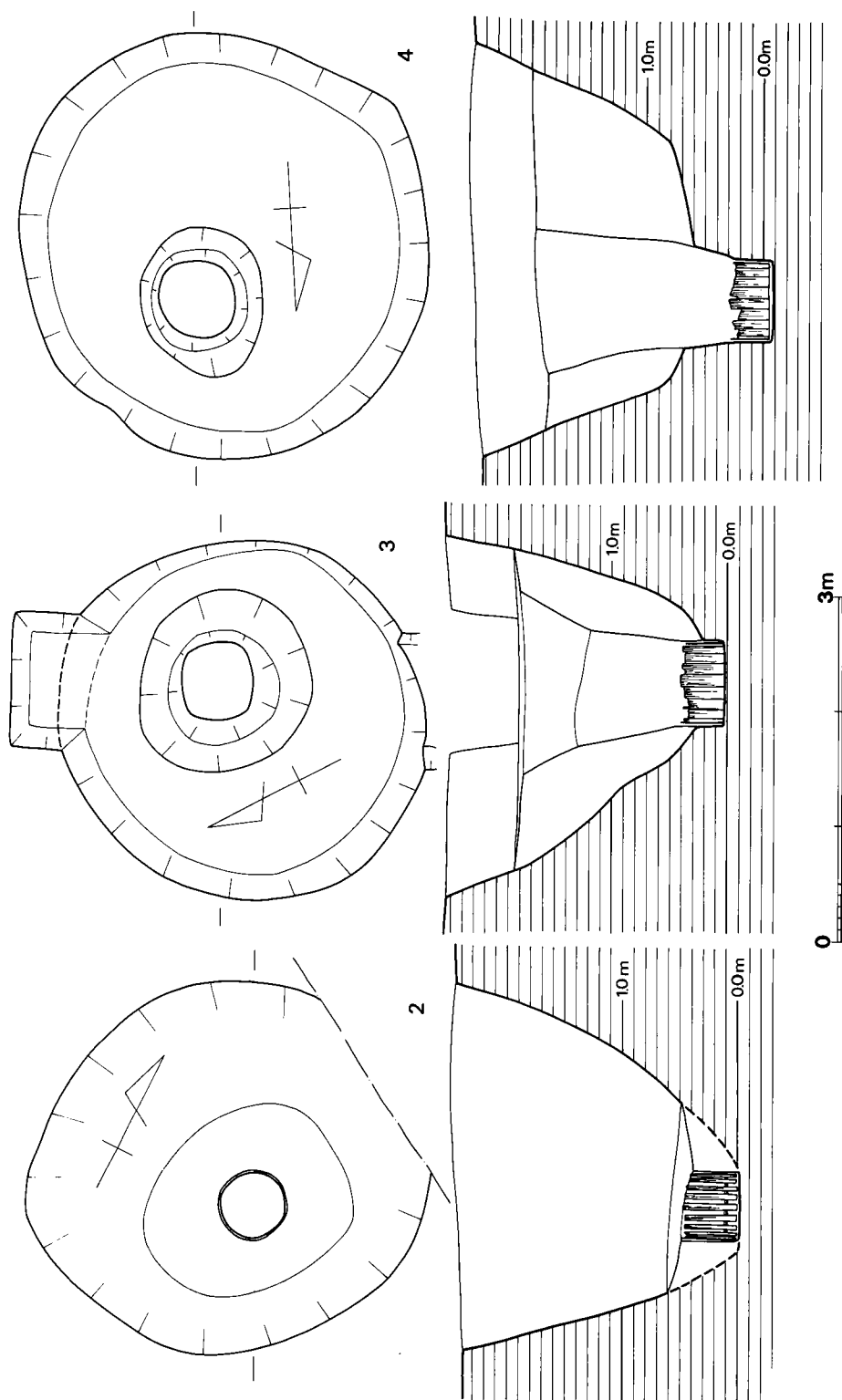
20号井戸（第8図20） 最大規模の掘り方をもつ。長円形状をなし、東側に一段を有す。6.55m×約3.7mを測る。断面は摺鉢状をなし、壙底は狭少な平坦となっている。この壙底に径1.05m、深さ45cmの円形壙を掘り木桶を据えている。最下段の木桶が完存する唯一のものであり、二段目下部が若干残る。木桶は径約75cm、高さ63～68cmとなっている。厚さ2cm前後、幅8～10cmの板を用い造る。2段目は5～10cmの幅で1段目と重複し、1段目の外側に残る。同様の板材を用いる。これによると木桶の底板のないものをふせて据え、数段木桶を積上げる井戸の構造であると察せられる。

遺物は土師器細片のほか、白磁（69、77）、青磁（86）、雑器（96）、土鍾（1）がある。69は身が厚く丸味のある小碗で、釉は内外面に施し、高台先端部は掻き取る。釉は灰白色である。96は平坦な口縁をもつ甕か。胎土は赤茶色をなし、紫褐色を呈す釉は内外面に施し、口縁平坦部は掻き取る。土鍾（1）は、細身のもので一方を欠失する。

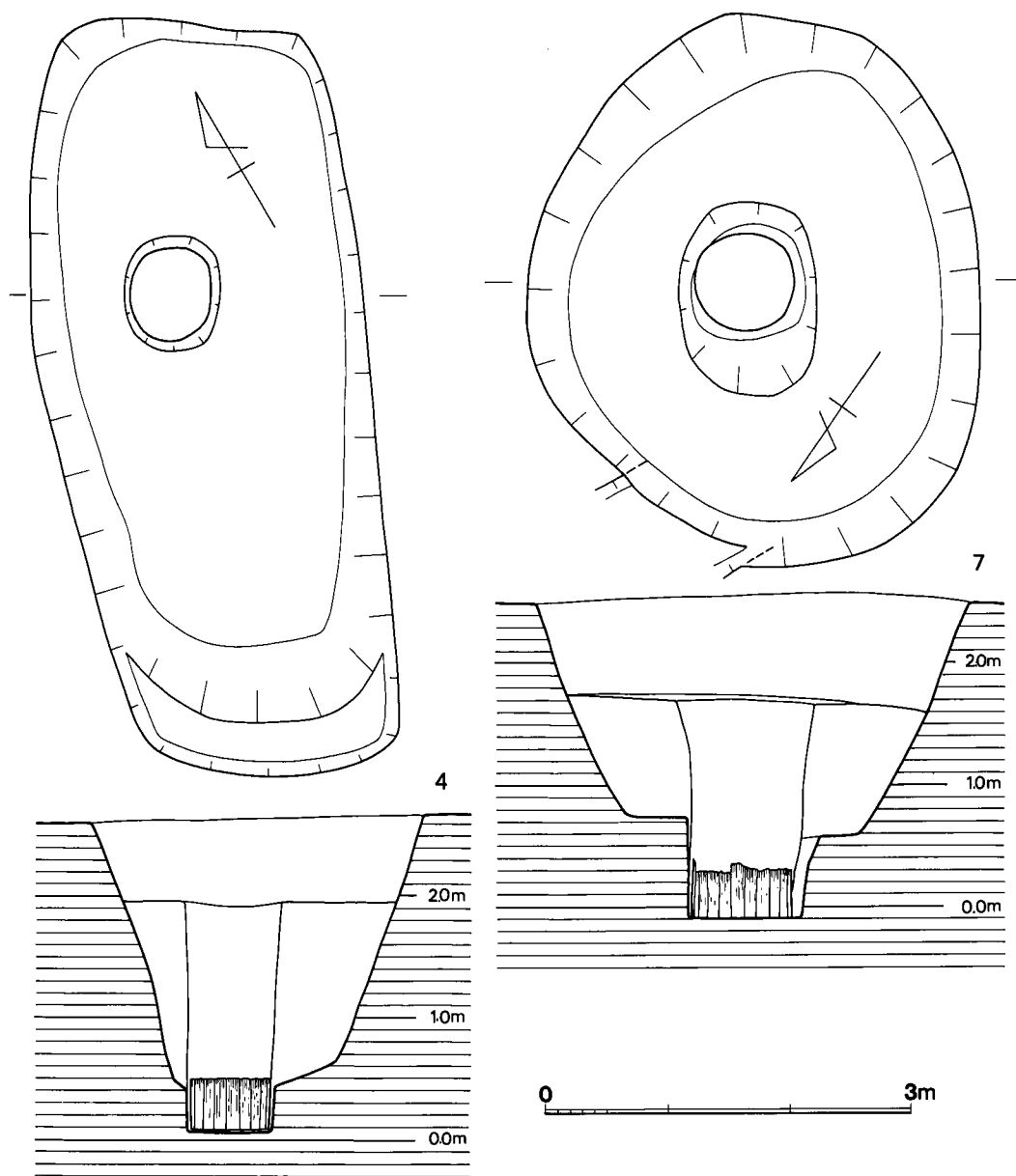
21号井戸（第9図21） 掘り方は廃棄物処理穴で一部が削平されている。円形プランを呈す。掘り方で3.0×2.8mを測る。掘り方中央に井戸を設けている。掘り方壙底に径95cm、深さ約40cmの円形壙を掘り木桶を据えている。木桶は厚さ1.2cmほどで、幅8～15cmの位置を用いて造っている。

遺物は土師器（24・47）、雑器（94・95）がある。24は径10cm、器高1.4cmを測る。ナデによる整形で、外底面に板目がある。47は高台付碗の底部か。高台は細く高い。95は内傾する平坦口縁をもつ甕。口縁平坦部にハケ目を施すほかはナデ整形。94は平坦な口縁をもつ甕か。胎土は赤茶色ないし黒褐色を呈す。釉は内外面とも施し、口縁平坦部は掻き取る。釉色は紫褐色である。

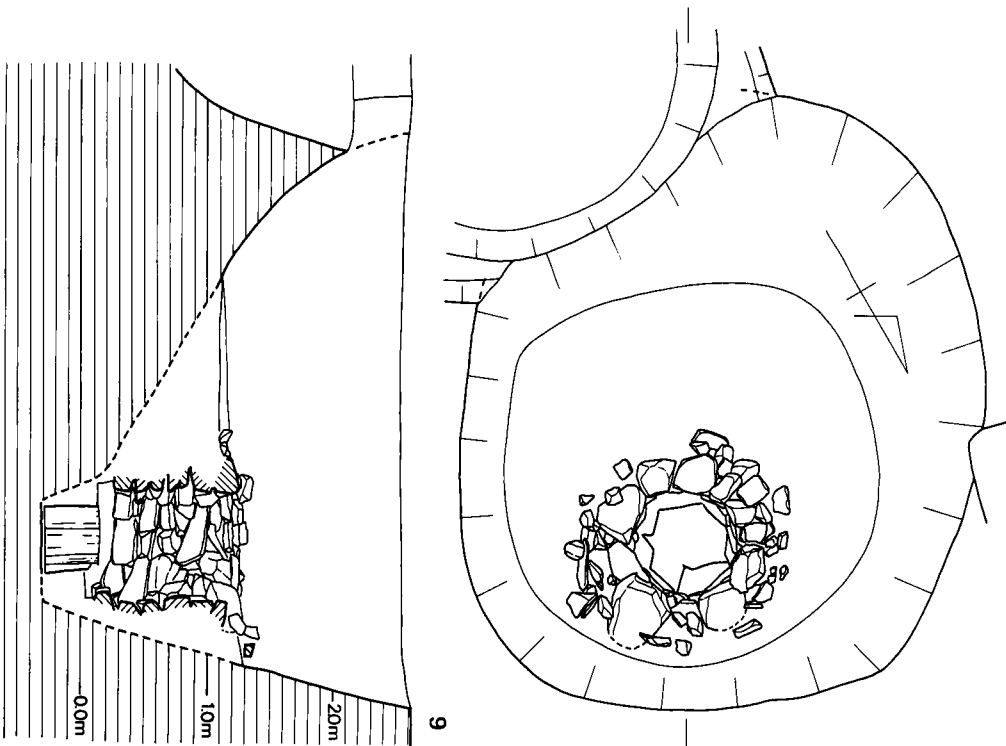
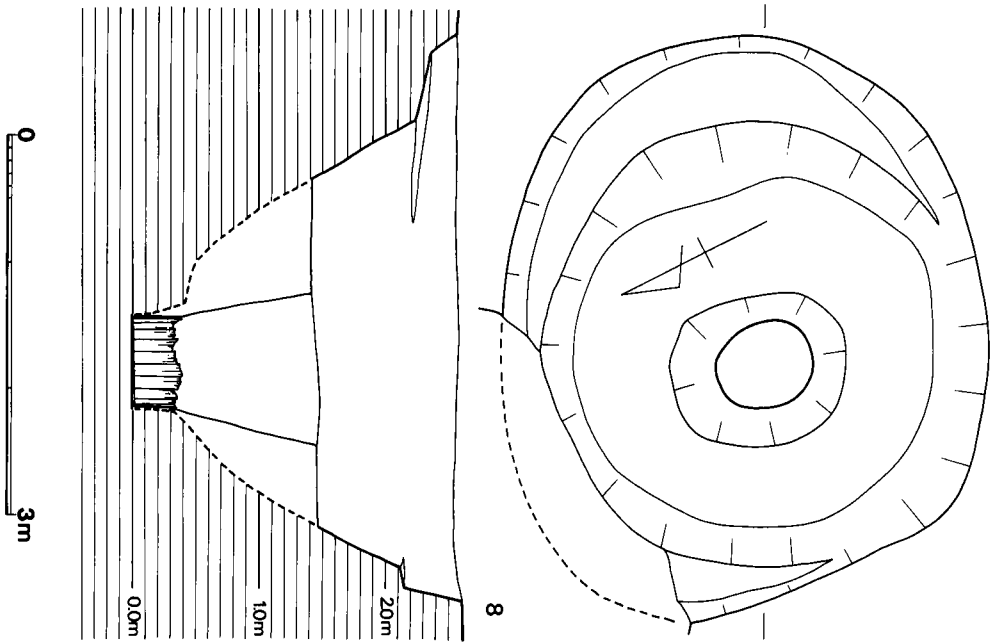
22号井戸（第9図22） 1号溝（東西溝）と重複する。溝より古い時期のものであろう。



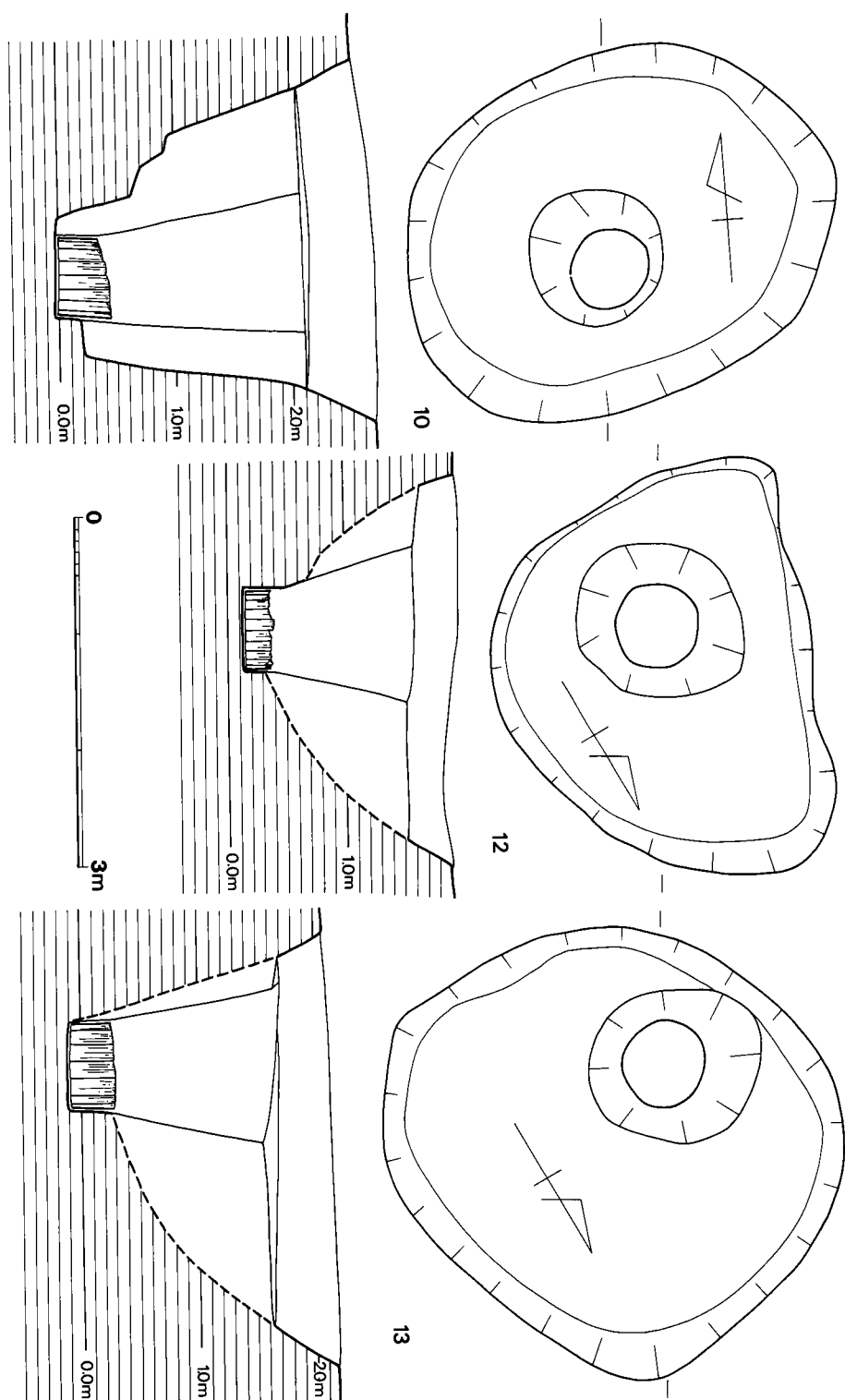
第 3 图 井戸実測図 1 (1/60)



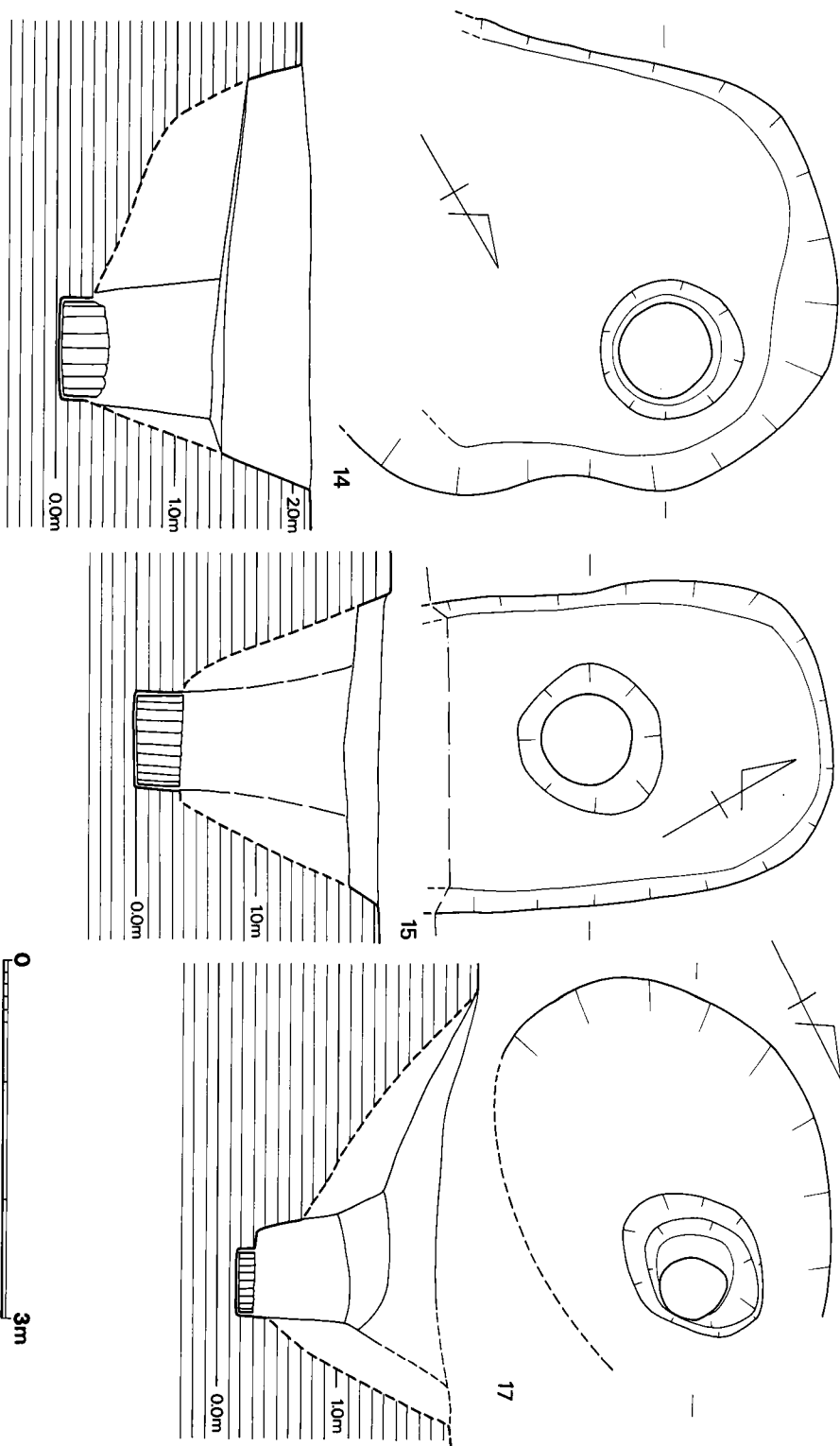
第 4 図 井戸実測図 2 (1/60)



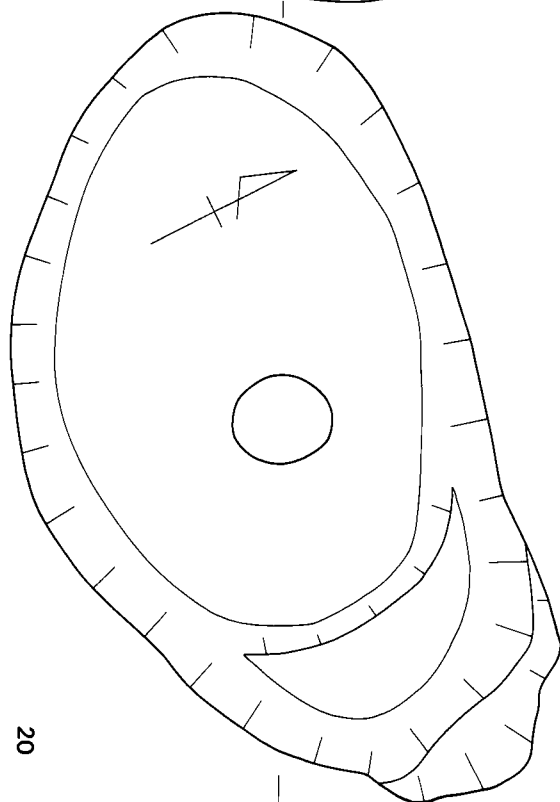
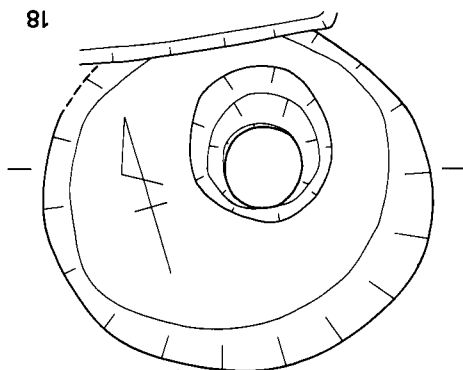
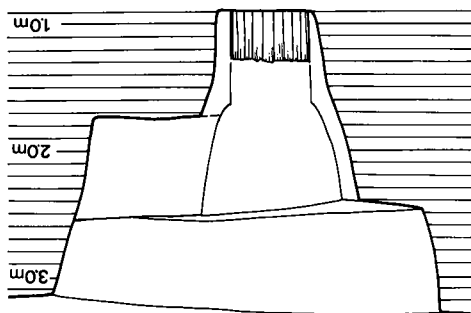
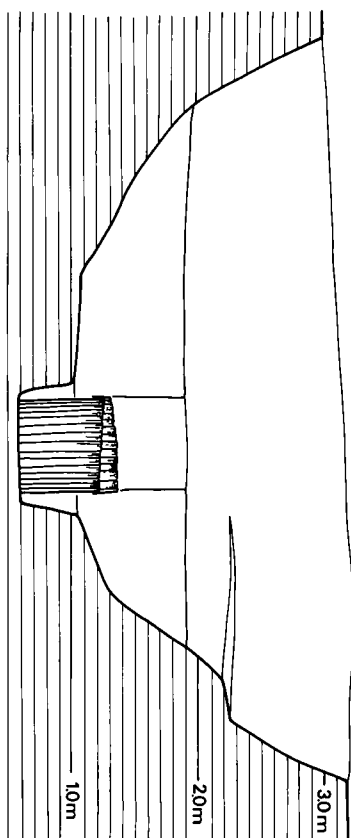
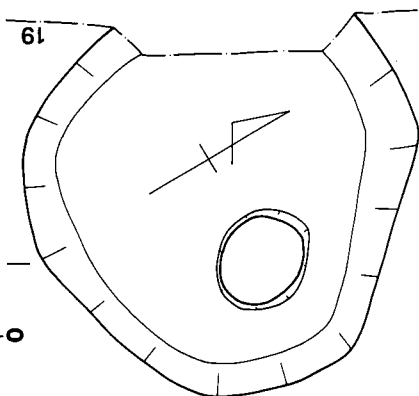
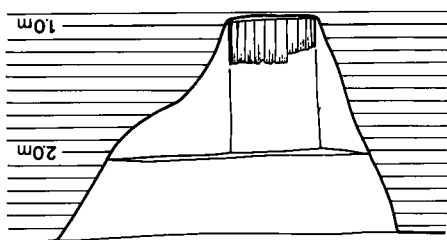
第 5 図 井戸実測図 3 (1/60)



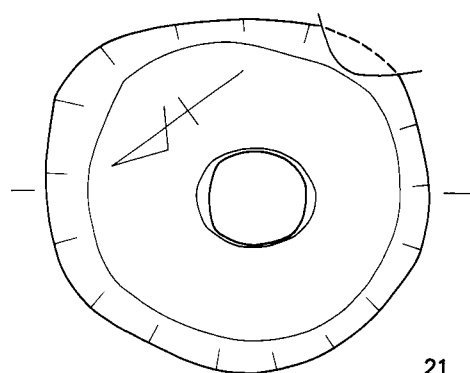
第 6 図 井戸実測図 4 (1/60)



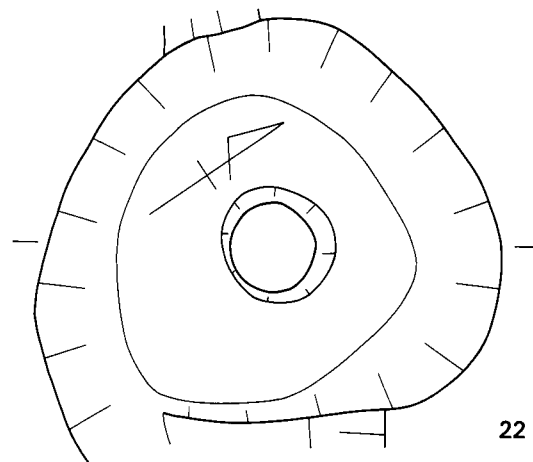
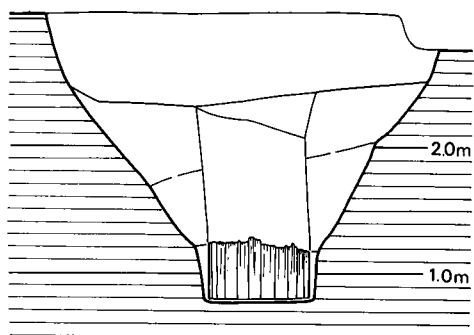
第 7 図 井戸実測図 5 (1/60)



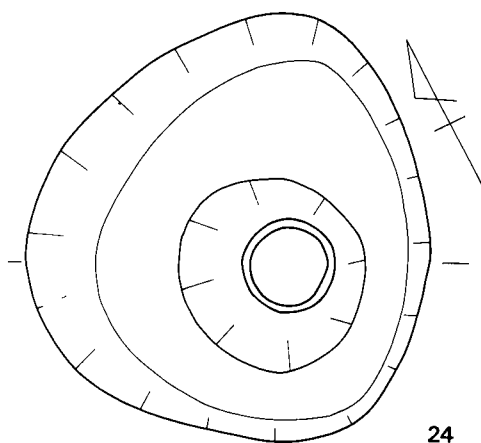
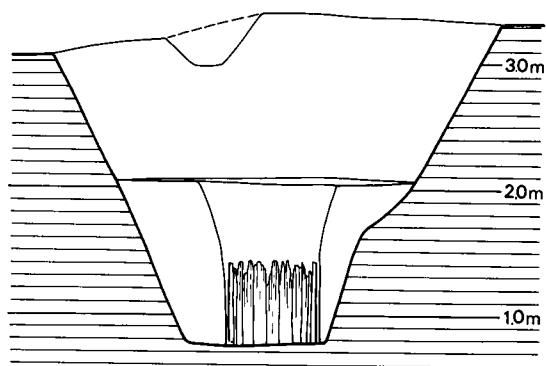
第 8 図 井戸実測図 6 (1/60)



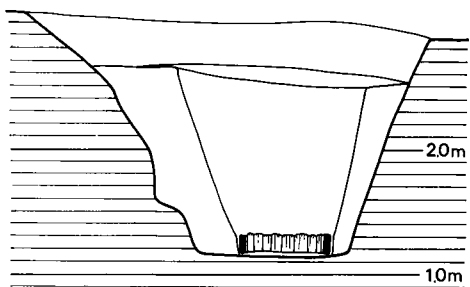
21



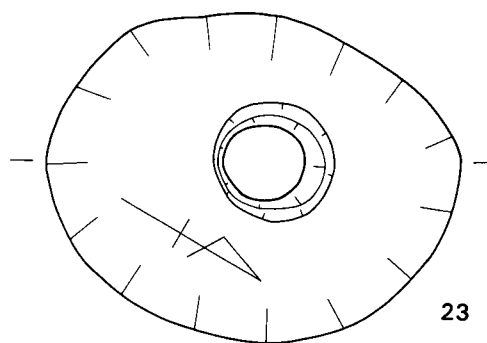
22



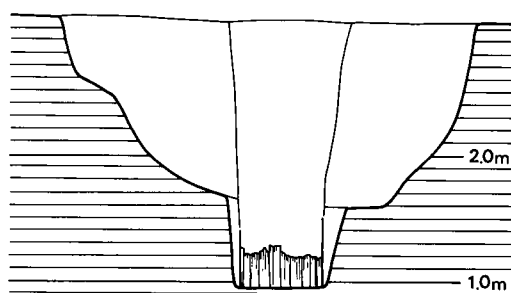
24



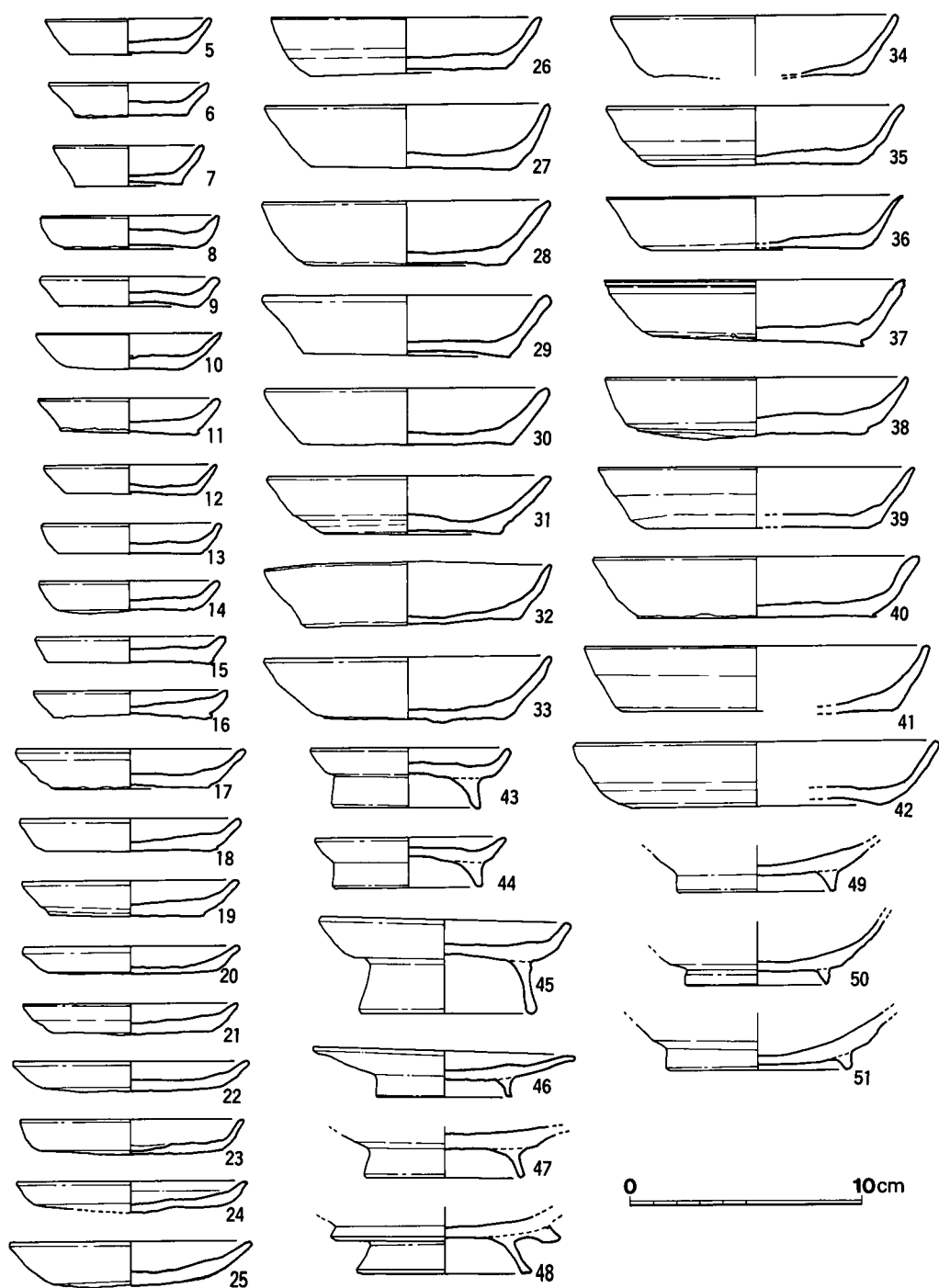
0
2m



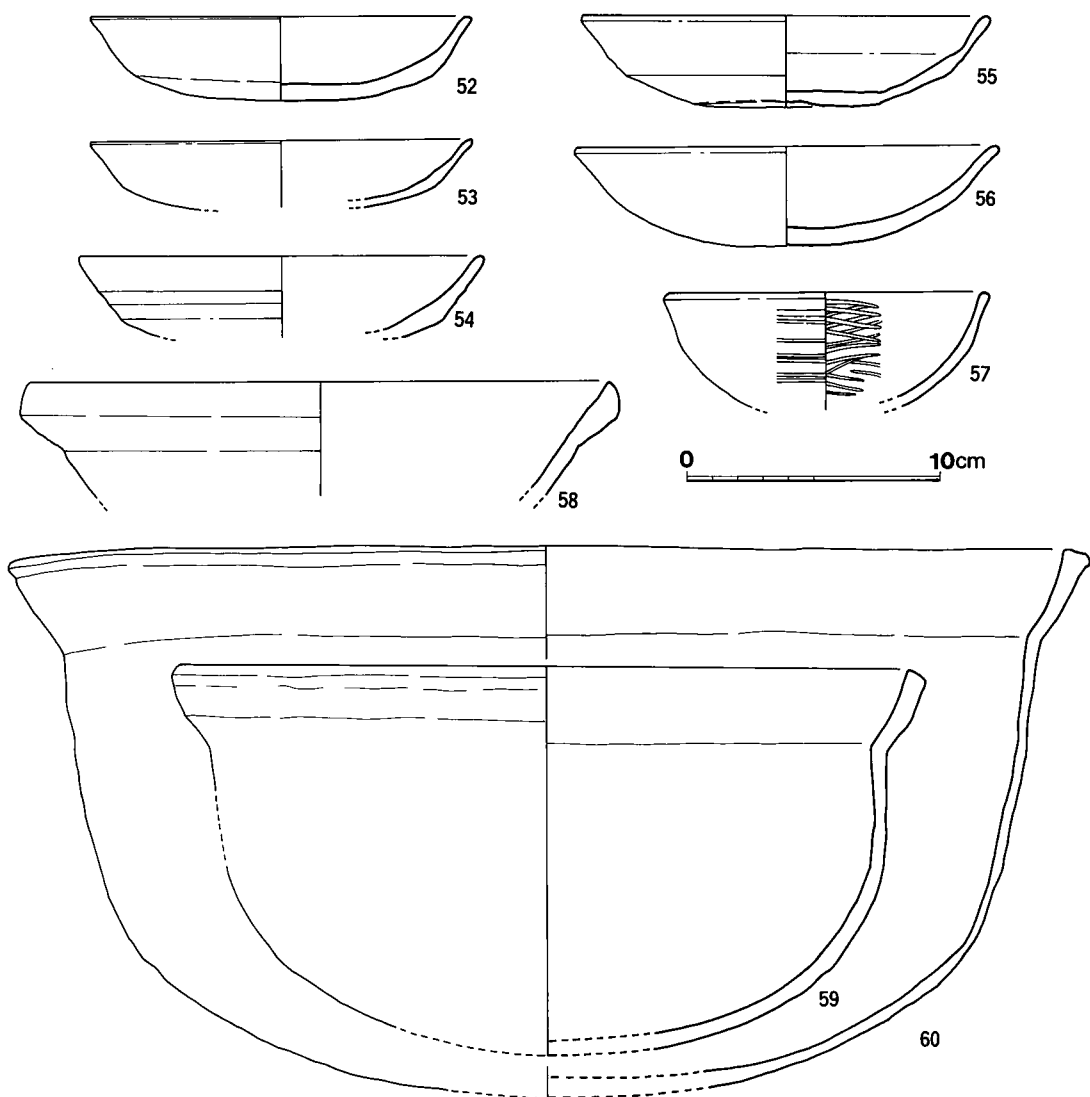
23



第 9 図 井戸実測図 7 (1/60)



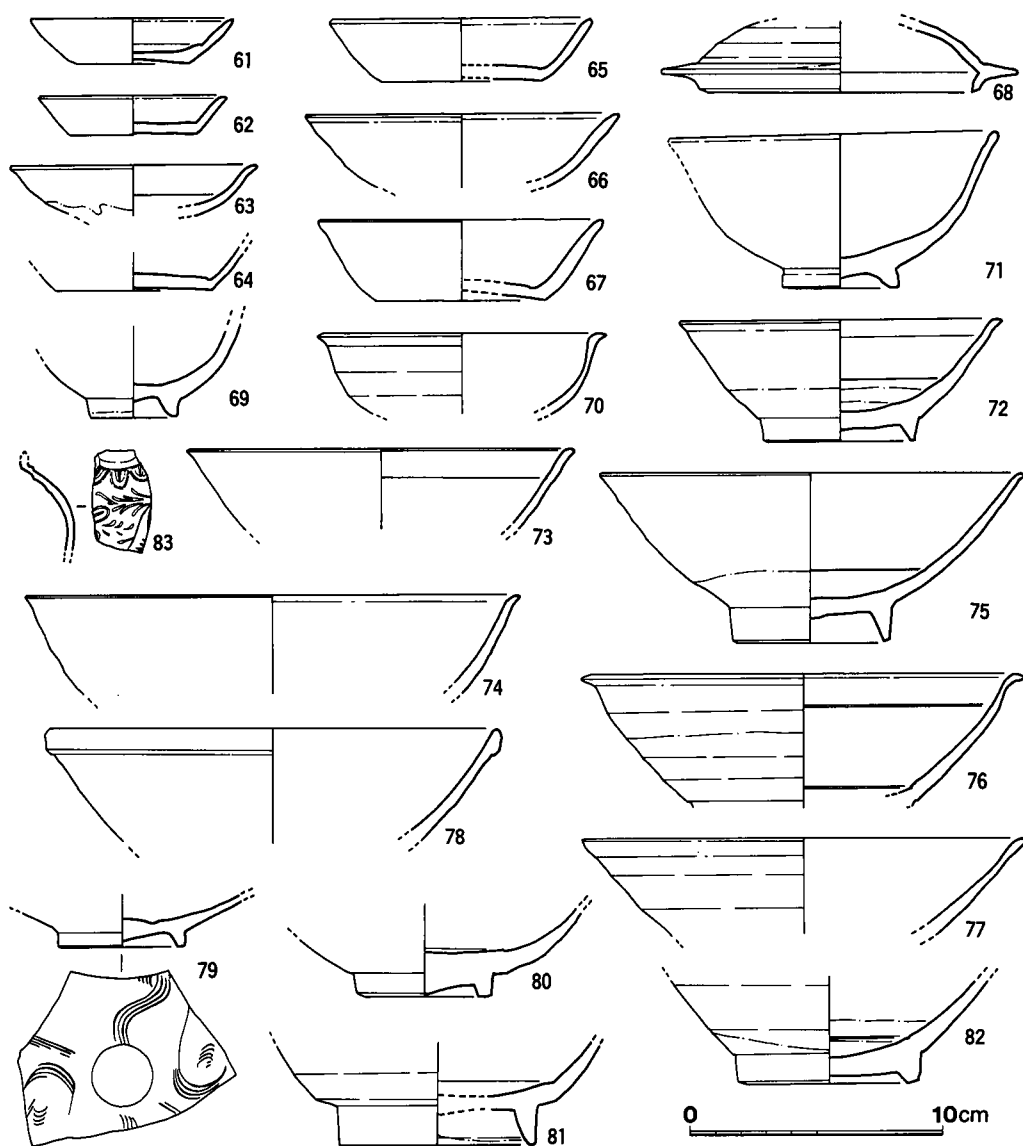
第 10 図 井戸出土遺物 1 (1/3)



第 11 図 井戸出土遺物 2 (1/3)

不整形なプランの掘り方で、 $3.7 \times 3.3\text{m}$ を測る。ほぼ中央に井戸がある。掘り方の塙底に木桶を据えている。木桶は上部が腐朽しているが、おおむね完存するもので、径 70cm 高さ 65cm を測り、使用板材は厚さ 2cm 、幅 10cm 前後である。

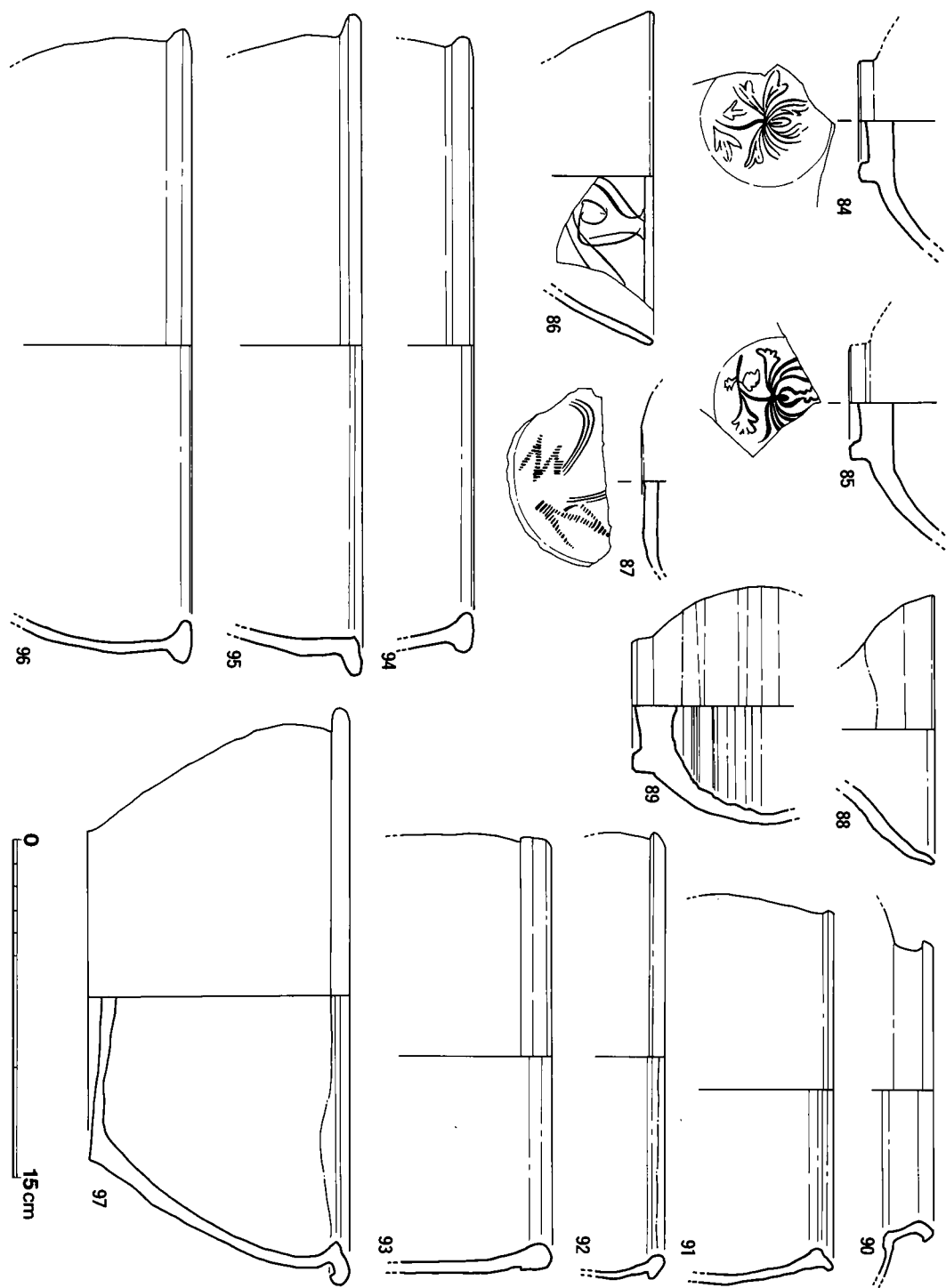
遺物は土師器 (26) と雑器 (97) がある。26は坏で 11.7cm 、器高 2.4cm を測る。糸切り底である。97はほぼ完形のものである。口縁は内側に摘み出し、外端部は垂れる。内面には口縁部の内面に淡いオリーブ色の釉を施す。



第 12 図 井戸出土遺物 3 (1/3)

23号井戸 (第9図23) 長円形の掘り方をもつ。掘り方径3.3×2.6mを測る。ほぼ中央に井戸を設ける。掘り方壙底に径90cm、深さ70cmほどの円形壙を掘り木桶を据えている。木桶の径65cmで、厚さ2cm、幅10cm前後の板を用いている。

遺物は土師器 (12~15、27~33、43~45)、白磁 (82)、石製品 (6・11) のほか、小型で玉縁口縁の碗片、青磁碗片 (片彫草文、蓮弁文)、見込みに櫛歯文のある青磁皿片や瓦器碗片がある。12~15は小皿で、径7.5~8.3cm、器高1.1~1.6cmを測る。いずれも糸きり底で、14には



第 13 図 井戸出土遺物 4 (1/3)

板目がある。27～33は坏で、径12.3～12.5cm、器高2.5～2.7cmを測る。いずれも糸切り底で、33には板目がある。43～45は台付の小皿である。43・44は小型で、径は8.7・8.3cm、器高2.6・2.2cmを測る。45はやや大きく径10.9cm、器高4.1cmで、細く高い脚状の台が付く、82は白磁碗の底部である。低く太い高台を削り出す。見込みに細い沈線を施し、その上下は釉を掻き取る。石製品は石鍋片再利用の把手のあるものと（6）、石鍋（11）がある。6は把手に孔を穿ち、ここに鉄が残る。11は口径29.6cmを測る大きなもので、上部片が残るのみ。外面には煤が付着し、削り痕が残る。なお、破片の下端の割れ口は加工しており、再利用しようとしている。

24号井戸（第9図24） 円形状プランを呈す掘り方のやや東寄りに井戸を設ける。掘り方径3.35×3.2mを測る。掘り方は透水位まで掘り下げ、これに木桶を据えている。木桶の径約70cmである。木桶は厚さ5cm、幅10cm前後の厚板を用いている。厚材使用は当井戸のみである。

遺物は土師器（19・25・49・56）がある。19は糸切り底の小皿で、径9.4cm、器高1.6cmを測る。25も小皿で径10.5cm、器高1.8cmを測る。ヘラ切り底で、両者とも板目がある。49は高台付の埴底部か。端が細くなる高台を付す。56は丸底の坏。径16.9cm、器高3.9cmを測る。内面の口縁部からやや下からがミガキであるほかはナデによる整形である。

3. 土 壙

調査区内で20基強の土壙が検出されているが、いずれも用途不明の遺構である。

1号土壙（第14図1） 長方形プランを呈す。1.82×1.26mで深さ27～37cmを測る。壙底南側が深くなっている。

遺物は土師器（118・119）、白磁（126）がある。118は坏で径16.2cm、器高2.8cmを測る。糸切り底である。119は高台付の坏である。口径14.5cm、器高4.4cmを測る。高台は細く高いもので、外開きのもの。126の白磁碗は、口唇部を摘み出す。内面下位に沈線を施す。体部外面の下位にはハケ目がある。釉は内部と体部外面下位までである。

2号土壙（第14図2） 長方形プランを呈す土壙である。長さ2.11m、幅1.28～1.53m、深さ約25cmを測る。

遺物は青磁碗がある（127）。外面には櫛歯による条文を、内面には櫛歯文とヘラによる片彫文を施す。内面上位と見込みに沈線状の切り込みがある。釉は透明度のあるオリーブ色で、高台部を除く全面に施す。ほかに白磁碗と皿の細片と土師器片がある。

3号土壙（第14図3） 長円形状のプランを呈す。1.65×1.16mで深さ20cmを測る。建物地業の上面に掘られたもので、建物より新しい磁器のものである。

遺物は土師器（113・114）と雑器（132）がある。113・114とも坏で糸切り底。前者は径13.2cm、

器高2.3cm、前者は径13.8cm、器高2.3cmを測る。132は三耳壺の一部である。胎土は褐色で、釉は褐色気味のオリーブ色である。やや光沢あり。

4号土壙（第14図4） 6号井戸の北西に接して検出された。遺構は調査区外にも延びており全容はつかみえない。幅約1.5mで長さは2.4mほどの規模と推定される。深さは30cm前後となっている。

遺物は土師器の細片が出土している。

5号土壙（第14図5） 南辺小口が丸味のある長方形プランを呈す土壙である。約3.1×1.77mで、深さは中央部で22cmを測る。壙底は全体に東側が浅く西へ深くなっている。壙内埋土中には焼土、灰が混入していた。

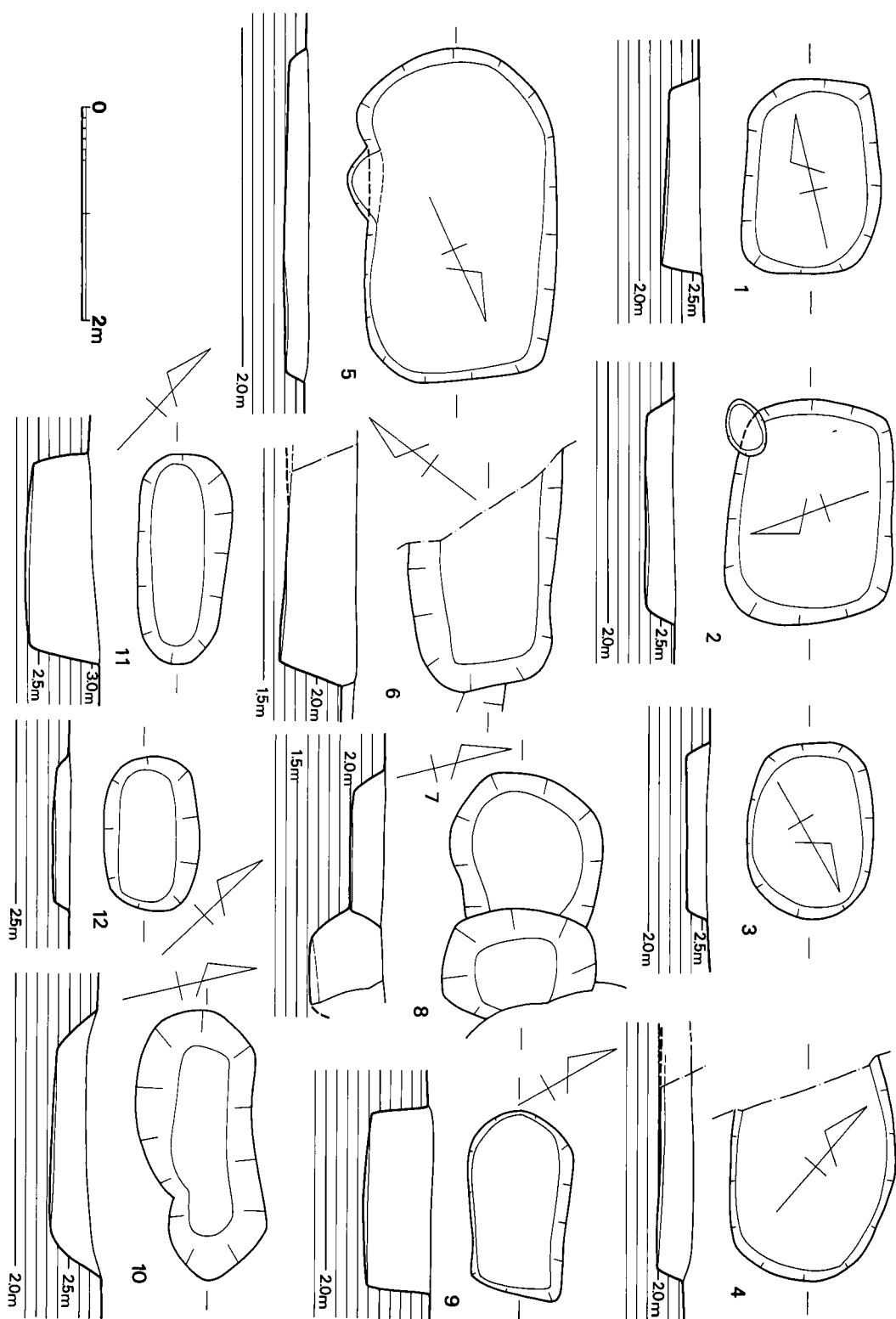
遺物は他の土壙に比べ多い。土師器（98～102、115～117、124）、白磁（128～130）、雑器（131・132）、石製品（8）、鉄器（1）がある。98～102は小皿で、径8.2～9.4cm、器高1.0～1.5cmを測る。いずれも糸切り底であるが、100～102には板目がある。115～117は坏で、それぞれ径14.0、15.8、13.3cm、器高2.9、2.6、3.2cmを測る。いずれも糸切底で、117には板目がある。116の外面にヘラで切り込んだ状態で沈線がめぐる。ヘラケズリ調整によるものか、最終的にはナデによる整形である。124は口縁下外面に鐳のある土塼である。口径22.8cmを測る。内面はハケ目を部分的にナデ消す。外面はナデ整形で、煤が付着する。128は白磁碗の上部片である。内面上位に沈線が走る。129は口禿口縁の皿片である。口縁部は外反する。130は平底の皿である。見込みの外周に切り込み状の沈線がある。外底面まで釉がかかるが、掻き取るも完全ではない。131は内傾する口縁をもつ甕である。口縁下外面には沈線があり、胴部の内外面にはロクロ引きによる器面の凹凸が著しい。釉は紫褐色を呈す。132は雑器の壺口頸部片である。肩の張る器形をなすものか。釉は内外面とも施すが、口縁平坦部では掻き取っている。釉色は黒色である。このほか耳付青磁瓶片、蓮弁文青磁碗片、青白磁皿片、褐釉文盤片がある。

6号土壙（第14図6） 調査区を西に延ばした地区の西端にて検出された。遺構は調査区外に延びており全容はつかめない。長方形プランを呈すものであろう。幅1.35m、深さ60～70cmを測る。

遺物は土師器（103～105、108～111）のほか、片口や陶器の細片がある。103、104はほぼ同形の皿で、径7.6cmを測る。105はやや大きく、径10.5cmを測る。108は台付の皿で、径9.2cm、器高2.9cmを測る。外開きする台は非常に高い。109～111は坏でいずれも糸切り底で、110以外は板目がある。

7号土壙（第14図7） 不整形プランを呈す小型の土壙である。8号土壙と重複している。発掘当初は8号土壙をも含め一つの落ち込みと思われた。幅1.42m、深さ約30cmの規模のものである。埋土は他と異なり、黒褐色土である。

遺物は土師器の細片がある。



第 14 图 土坑实测图 1 (1/60)

8号土壌（第14図8）廃棄物処理穴より遺構の東側が削平される。長方形プランを呈す小型の土壌である。長さ1.42m、幅1.1m前後、深さ0.7m前後の規模である。埋土は黒褐色土である。

遺物は土師器（106・107・120・125）がある。106・107は小皿である。いずれも外底面に板目がある。120は坏で丸味のある底部をなす。内外面ともナデ整形で、外底面に板目がある。口径15cm、器高3.3cmである。125は厚手の土鍋か。外面に煤が付着。

9号土壌（第14図9） 東側小口辺に丸味を呈す長方形プランを呈す土壌。長さ1.72m、幅0.85～1m、深さ0.65mを測る。墳底のやや深いもので、埋土は黒褐色土である。

遺物は土師器（121～123）、白磁の玉縁口縁碗片、櫛歯文のある青磁碗片がある。121～123は底部に丸味のある坏である。122の口径がやや大きく、12.8～14.8cmである。いずれも内面下位はミガキ、他はナデによる整形である。

10号土壌（第14図10） 不整形プランを呈す土壌である。砂地であるため掘削後に一部崩壊したことも考えられる。長さ約2.5m、幅0.9～1.1m、深さ0.4m前後を測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器の細片が採集される。

11号土壌（第14図11） 小口部に丸味のある長方形プランを呈す。長さ1.95m、幅0.75～0.85m、深さ0.5～0.6mを測る。埋土は黒褐色土である。

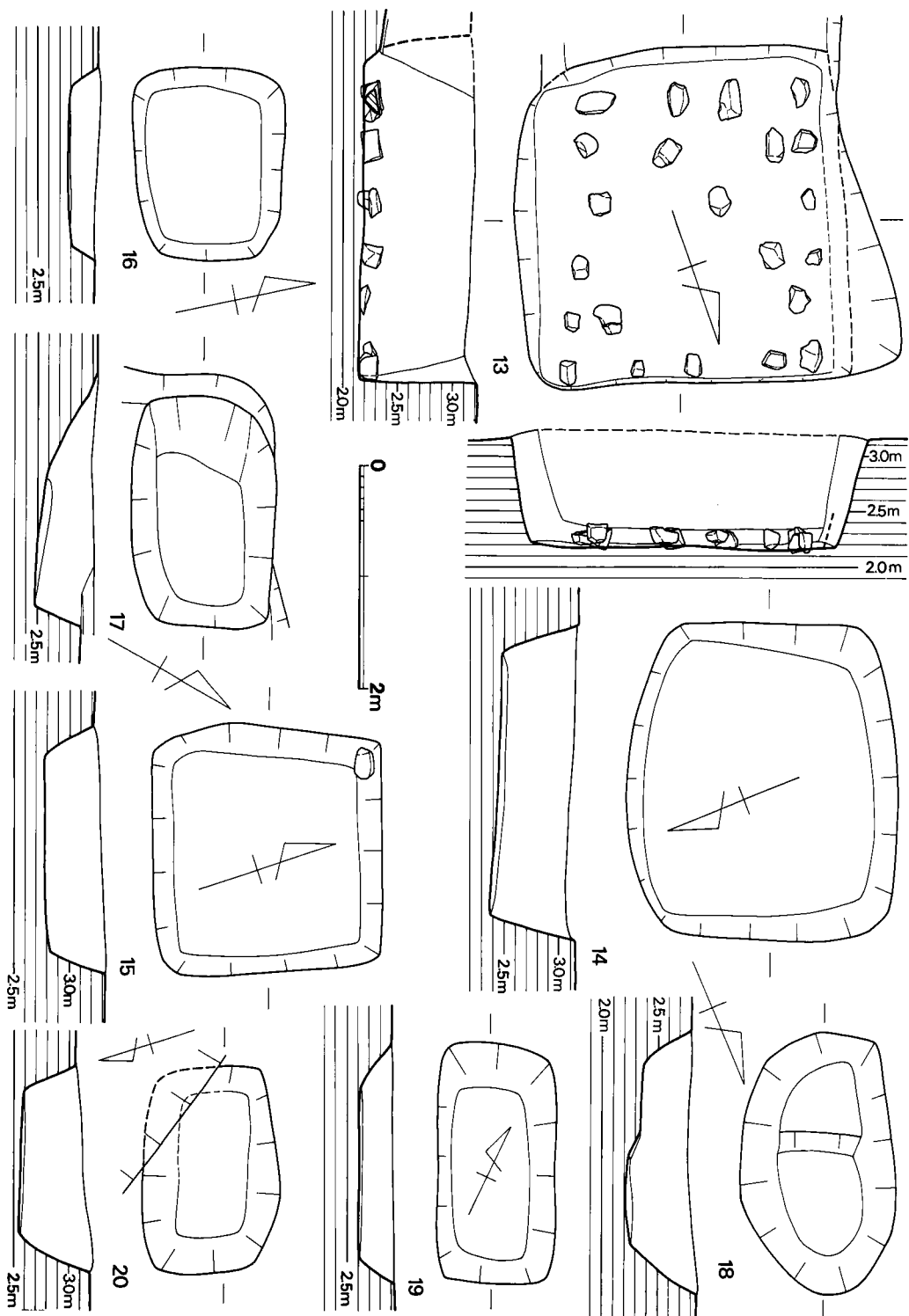
遺物は土師器の皿や坏の細片のほか、甕片があり、青・白磁の碗片も出土。

12号土壌（第14図12） 長方形プランを呈す小型の土壌である。長さ1.45m、幅約0.9m、深さ約0.15mを測る。埋土は黒褐色土である。

遺物は土師器の細片のほか、白磁の玉縁口縁碗片、櫛歯文のある青磁碗片および石鍋片がある。

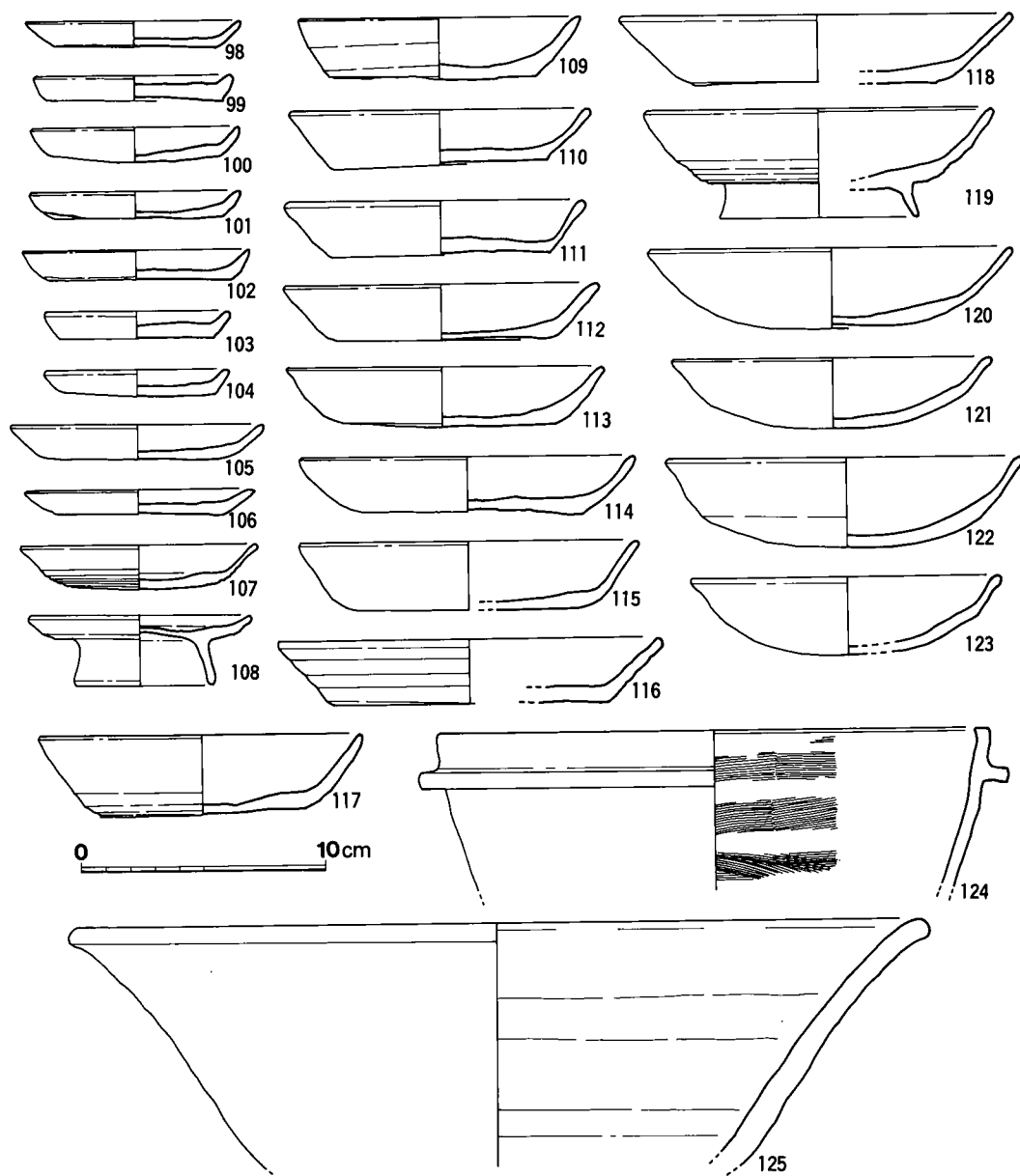
13号土壌（第15図13） ほぼ正方形のプランを呈す。14号土壌および10号粘土壌と重複し、この両遺構より震い。土壌は3.0m×3.0m、深さ1.05mを測る。墳底には角礫があり、これらは意識的に置かれたものである。角礫は一部発掘の際にあやまって取り除かれたものが2～3個あったが、土壌周壁に沿って並べ、その内側に適当に配置している。また、角礫上面のレベルにはばらつきがなく、ほぼ一定した高さとなっている。土壌の壁の立ち上りも垂直に近い部分もあることも考慮すると、角礫の上面には板を敷き、壁ぎわは板で囲った遺構ではないかと察せられるが、板等のこれを裏づける物が依存せず、かつ用途を判別し得る遺物も発見されず、前述の想定も確定し難い。

遺物は土師器細片のほか、白磁（138・139・144）、青磁（140・141・142）、雑器（143・145～147）がある。138は口禿の皿である。見込み外周に沈線状の切り込みがある。139も口禿の皿でやや大きく、同じく見込みに切り込みをめぐらす。144は瓶の口縁部で、垂下する口縁端部である。内面に釉が垂れており、外面にのみ施釉している。140は青磁の皿で底部を欠失

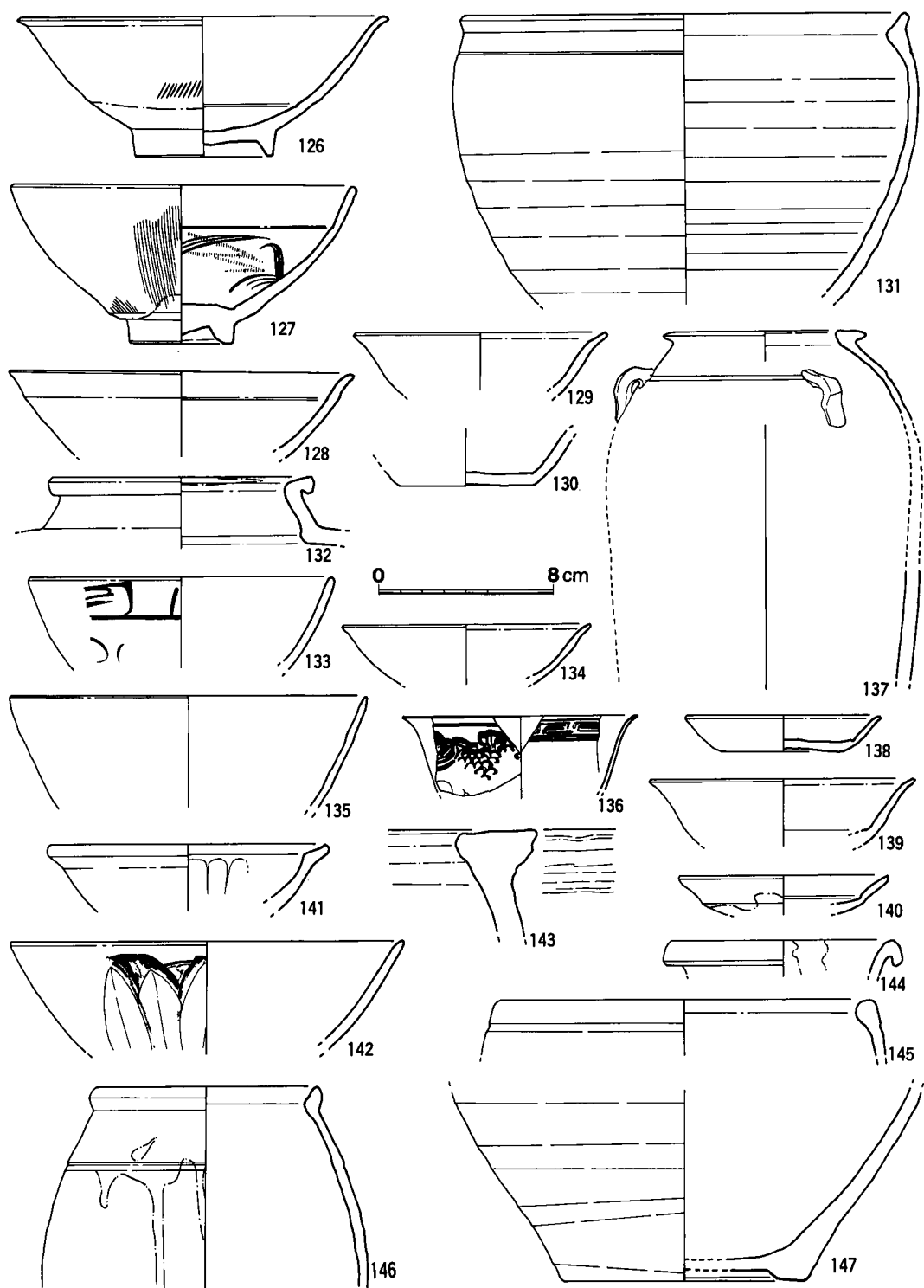


第 15 図 土坑実測図 2 (1/60)

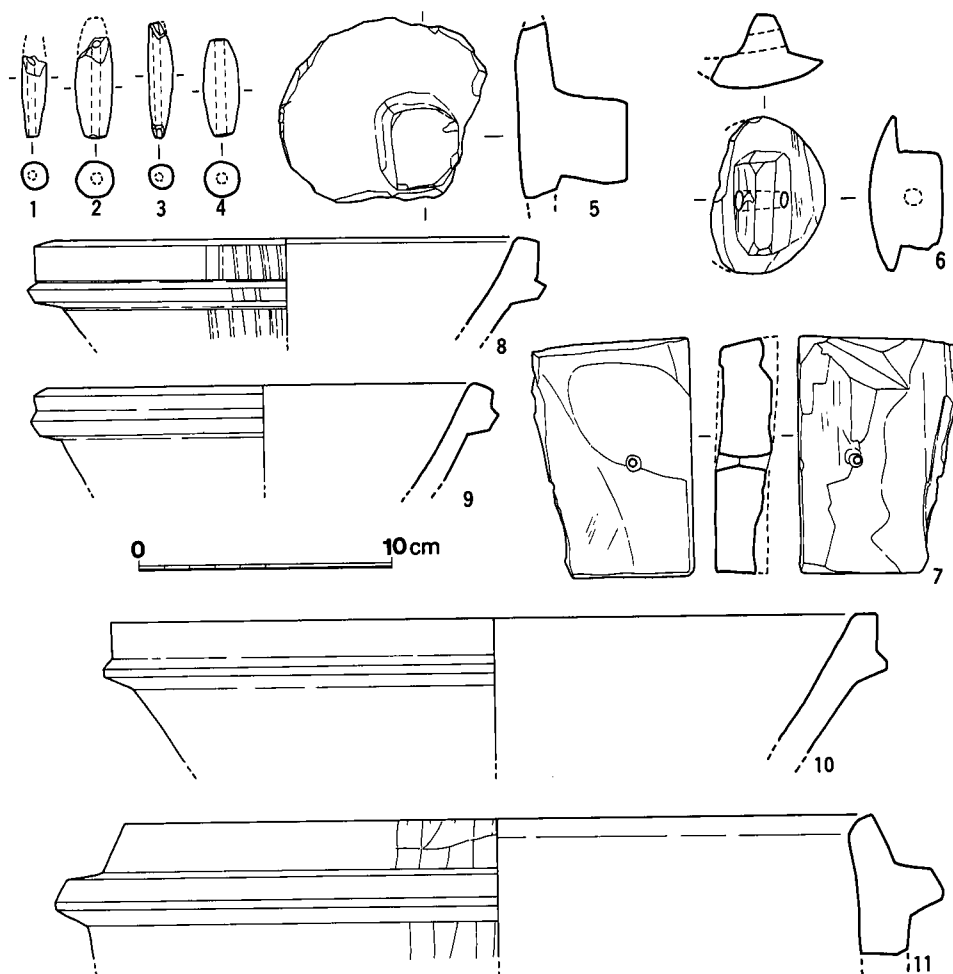
する。141は青磁碗で、口唇部は跳ねげている。全体に釉は厚く青緑色を呈す。142は鎬蓮弁文を施す碗である。143は陶器甕の口縁部片である。内面に叩きが残る。褐色系の釉を施す。145は無頸の甕か。内外面とも褐色釉。146は内傾する口縁をなす長胴の壺。耳がつくどうか不明。暗褐色系の釉を施す。147は甕の底部か。このほか方形板状で、ほぼ中央に1孔を穿つ石製品(7)がある。



第 16 図 土壙出土遺物 1 (1/3)



第 17 図 土壙出土遺物 2 (1/3)



第 18 図 井戸，土壙出土の土製品，石製品 (1/3)

14号土壙 (第15図14) 13号土壙と重複し、これより新しい。長方形プランを呈す。長さ2.85m、幅2.45m、深さ0.68～0.76mを測る。壙底は東側が深くなっている。

土師器、青・白磁の細片のほか、石鍋片が出土。

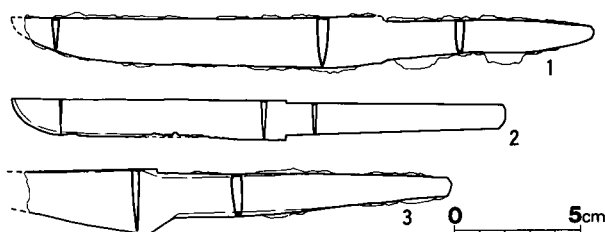
15号土壙 (第15図15) ほぼ正方形のプランを呈す。2.05m×2.05～2.25mで深さ0.55mを測る。壙底は平坦である。

遺物は土師器 (112)、青・白磁等 (133～136) がある。112は糸切り底の坏で、器壁は体部が厚く、底部は薄い。口径13cmである。133は青磁碗である。外面に雷文帯があり、緑釉である。134は白磁の口禿の皿、135は白磁碗で、胎土は白色で、釉はややクリーム色を呈す。136は薄手の染付碗である。内面に雷文帯があり、外面には蔓とブドウ文と思われる文様を描く。染付

は藍色で、下地はクリーム色様である。

16号土壙 (第15図16) 長方形形状プランを呈す土壙。長さ1.75 m、幅1.2~1.35 m、深さ約0.25 mを測る。埋土は黒褐色土である。

土師器、磁器の細片が出土。



第 19 図 井戸，土壙出土の鉄製品

17号土壙 (第15図17) 長方形形状プランを呈す土壙である。長さ2.05 m、幅1.3 m、深さ約0.5 mを測る。西側小口壁は緩傾斜となる。埋土は黒褐色土である。

遺物は土師器、磁器の細片が出土。

18号土壙 (第15図18) 不整形プランを呈す土壙。壙底は2段となる。長さ2.35 m、最大幅1.4 m、深さ0.65 mを測る。埋土は黒褐色土である。

遺物は土師器の細片が出土。

19号土壙 (第15図19) 長方形プランを呈す土壙である。長さ2.17 m、幅1.05 m、深さ0.3 mを測る。整った形状をなす。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器の細片が出土。

20号土壙 (第15図20) 23号井戸に切られるが、長方形プランを呈す土壙である。長さ1.65 m、幅1.25 m、深さ0.65 mを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器、磁器の細片が出土。

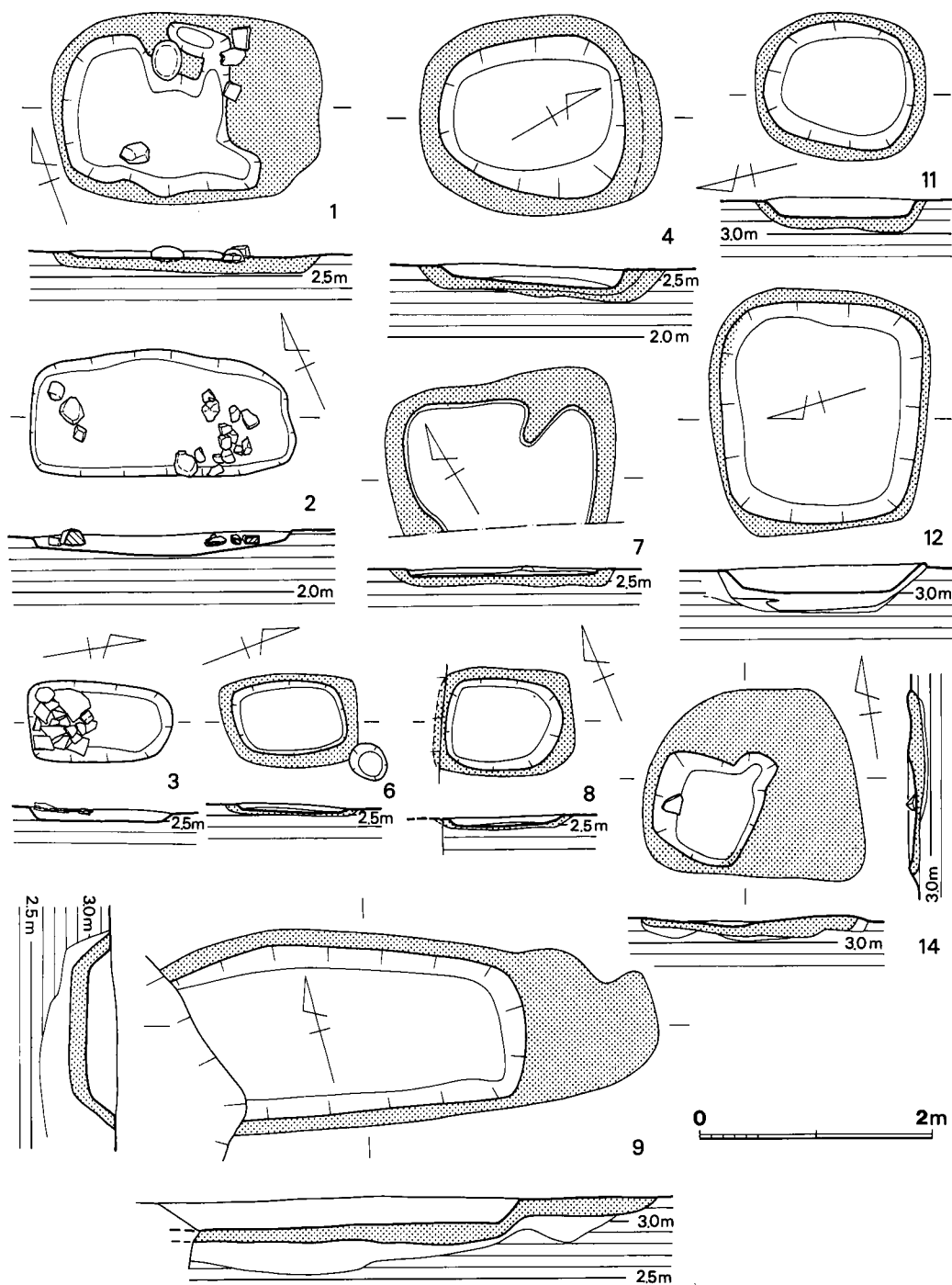
4. 粘 土 壙

通常の土壙のように、やや雑ではあるが壙を掘り、これに粘土を周壁や壙底に貼り敷きつめたものである。通常の土壙とは用途の異なるものと考えられる。また、地山が砂地あるいは砂を多く含む土質であるため、土壙の崩壊を防ぐために一つの方法として粘土を貼りめぐらしたものと考えられる。粘土には異物は混入していない。24基が検出されたが、遺構検出時にかなり掘り下げたので、壙底部分の粘土のみの遺構もある。

1号粘土壙 (第20図1) 2号井戸の西側に所在。ほとんど壙底のみである。2.3×1.65 mの隅丸長形状に粘土が遺る。壙底と思われる浅い落ちが西側に認められる。壙底には角礫、河原石および茶臼片があった。粘土の厚さ10 cm前後である。

遺物は土師器細片のほか、白磁口禿皿片、同玉縁口縁碗片、瓦片、茶臼片がある。

2号粘土壙 (第20図2) やや不整な長形状に薄く粘土を貼った土壙である。長さ1.25 m、最大幅0.57 mを測る。深さは0.18 mで、壙内には炭や少量の焼土が混入し、小さな角礫が



第 20 図 粘土坑実測図 (1/60)

両小口側にある。これらはやや墳底より浮いている。

遺物は土師器の皿・坏の細片のほか、148の高麗青磁碗片と149・150の土埴がある。148は碗底部片で、白・黒の象嵌文様がある。外面は圈線状の象嵌のみである。149・150の土埴には外面に煤が厚く付着し、150の内面下位にはヘラ状工具による6条の条痕を所々に施すものである。

3号粘土墳（第20図3） 小型の粘土墳である。長さ1.23m、幅0.57mの長方形墳を掘り、墳底より浮いた高さで陶片を敷きつめ、さらにこの上に粘土を敷いたものである。

遺物は敷きつめた陶片のみで、復元は不可能である。厚手の破片で備前系の甕であろう。

4号粘土墳（第20図4） 丸味のある正方形状プランを呈す。墳は長さ1.65m、幅1.4m、深さ0.1～0.15mを測る。粘土の厚さは15cm前後で、東北側ではさらに黄色の粘土をその下に敷いている。

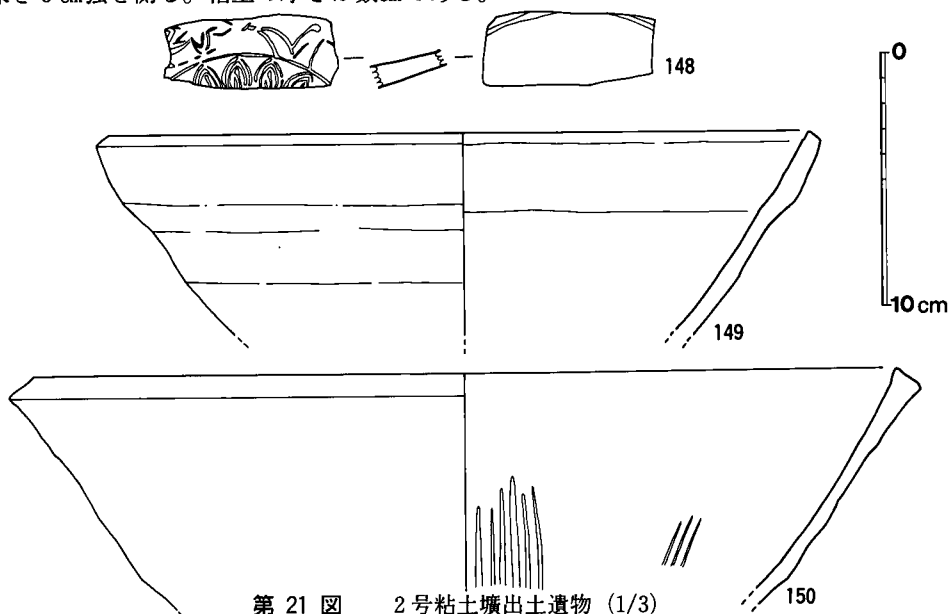
5号粘土墳 14号井戸の北側にある小型のもの。長さ0.85m、幅0.6m、深さ3～7cmを測る。墳底に近い部分を検出したものであろう。粘土は非常に薄く数cmのものである。

遺物は糸切り底の土師器坏片、高台付埴片や片口、陶器の細片がある。

6号粘土墳（第20図6） 長方形状プランを呈す墳である。長さ0.95m、幅0.65m、深さ5cm前後を測る。粘土の厚さは2～10cmを測る。

7号粘土墳（第20図7） 遺構の大半は調査区外にあるもので全容は不詳。恐らく長方形状プランをなすものである。幅約1.9mで深さ5cm前後である。粘土の厚さ10cm前後である。

8号粘土墳（第20図8） 小型の長方形状プランを呈す墳である。長さ約1.0m、幅0.75m、深さ5cm強を測る。粘土の厚さは数cmである。



土師器坏、小皿、土埴の細片がある。

9号粘土墳（第20図9） 長方形プランを呈す大型の墳である。西側は20号井戸で削られる。最大幅1.5m、長さ3m以上で、深さ20cm前後を測る。粘土は10～15cmの厚さを測る。東側小口は1.2mほど外側に粘土を敷いている。

遺物は土師器坏、小皿のほか磁器の細片がある。

10号粘土墳 21号井戸および13号土墳と重複し、これらより新しい。墳底に敷かれる粘土のみが遺る。1.9×1.9mの正方形に厚さ10cm前後の粘土を敷いている。

11号粘土墳（第20図11） 長方形プランを呈す墳である。長さ約1.3m、幅約1.1m、深さ約0.2mを測る。粘土の厚さは10cm前後である。

12号粘土墳（第20図12） 長方形プランを呈す墳である。長さ1.9m、幅1.55～1.75m、深さ約0.2mを測る。粘土は墳底は厚く15cmほどあり、壁まわりは5～10cm弱の厚さである。

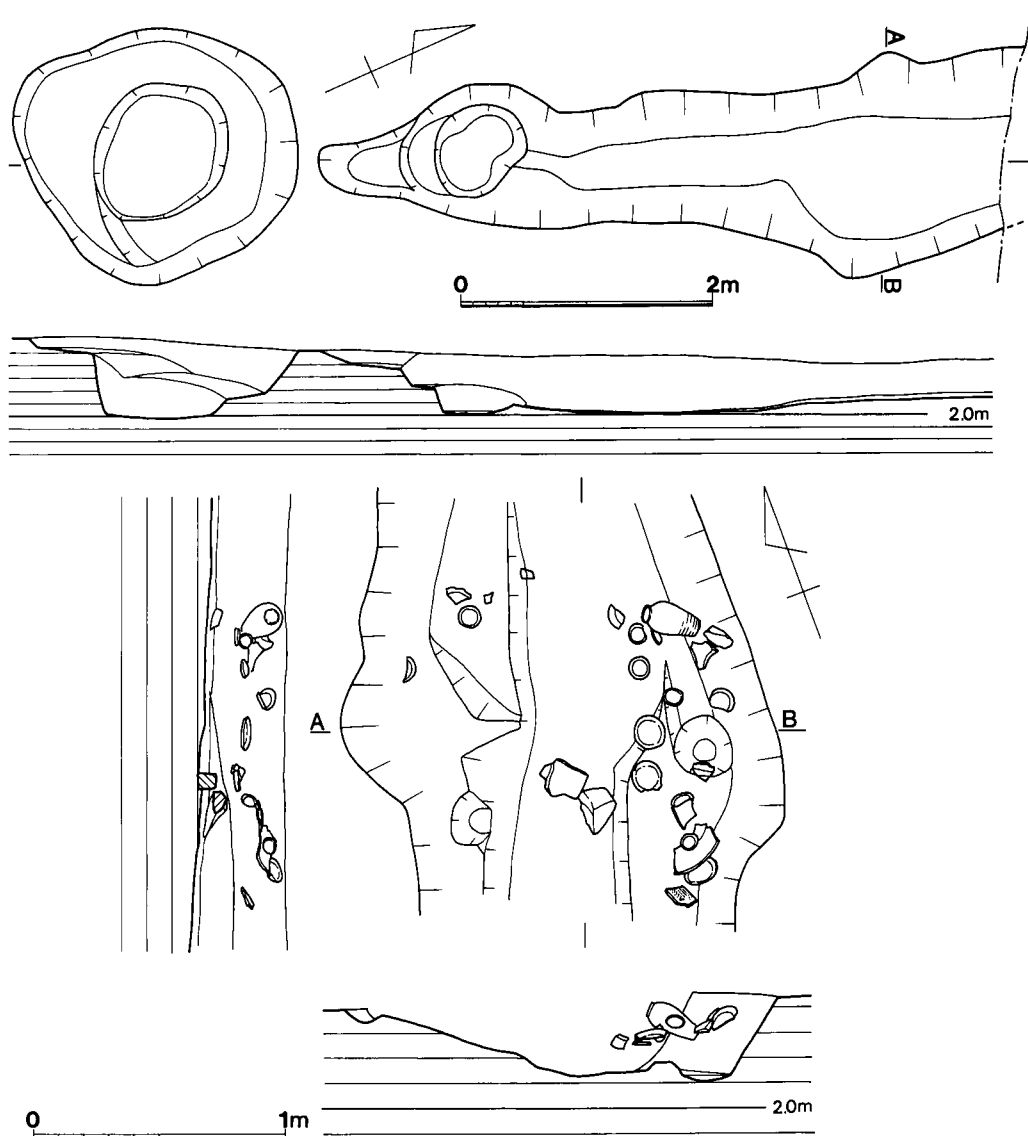
13号粘土墳 14号土墳の南にあり、2号溝と重複するが、廃棄物処理穴により大半を破壊されており、溝との前後関係は判断し難い。長方形プランをなしていたと思われる。粘土の厚さは10cm前後である。

遺物は白磁の皿および小碗片と陶器片がある。

14号粘土墳（第20図14） 墳底部の粘土のみが遺る。台形状プランで粘土が検出された。西側に浅く落ち込む部分があるが、これが墳底の広さではないものと考えられる。墳の規模は不詳。粘土の厚さは5～15cmである。

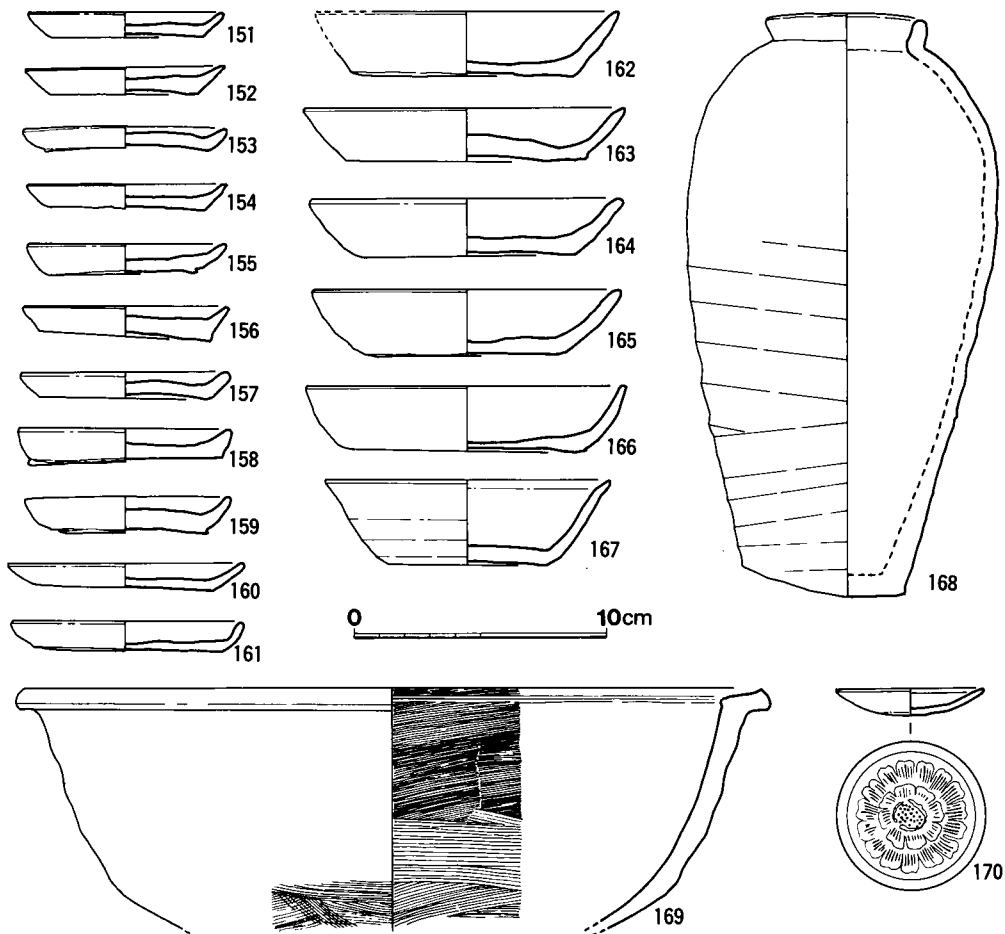
5. 溝状遺構

調査区の北端で検出された。遺構は調査区外に延びる（第22図）。この遺構は整地層中に造られたものであるが、遺構周辺は黄灰色を呈す粘質土に砂を混ぜた特殊な土であり、非常に硬くしまっており、単なる整地ではなく、このような土を敷いたという感がある。このことは、当遺構はこの粘質土を掘り下げたというより、この粘質土でもって造ったという感がある。このことは遺構内床面では、一部の土師器片が食い込んだり、強く貼りついた状態であったり、遺構は法面や床面はなめらかでなく、凹凸が著しいことからもうかがわれる。この硬質の粘質土の範囲は幅広く認められるが、その範囲を明示できない。南に隣接する円形墳はこの土の範囲内にあって同様に造られたものであり、両者は関連する遺構であろう。溝状部は南端が浅く、幅の狭いものとなっており、溝底よりやや深い円形状の墳を掘る。溝底は北へ浅くなっている。両遺構とも水が溜ったり、流れたような埋土の状態ではなかった。用途不明の遺構である。



第 22 図 溝状遺構 (1/60, 1/30)

遺物は土師器 (151～166・169) と白磁 (167・170)、雑器 (168) がある (第23図)。151～161は小皿である。160・161の径が9.3cmであるほかは8.0cm前後の径のもので、二種に分けられる。いずれも糸切り底で、154・156・159・161に板目がある。162～166は坏でいずれも糸切り底で、162・163に板目がある。径は12～12.8cmである。169は土埴である。内傾する平坦な口縁部である。内・外面ともハケ目を施すが、外面は体部上位はナデ消している。167は白磁口禿の皿である。半損品。青味のある釉がかかる。170は内面に菊花文を浮彫りする小皿である。

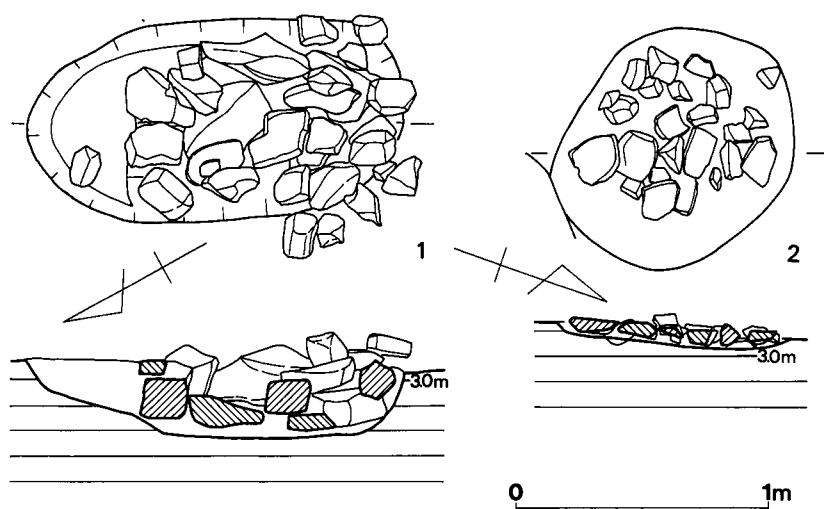


第 23 図 溝状遺構出土遺物 (1/3)

やや青味のある釉である。168は紫褐色釉のかかる長胴瓶である。やや焼成が悪く底部は歪つである。

6. 集石遺構

この遺構は、2ヶ所で検出された。発見当初は、建物礎石の根石かと思われたが、他にはなく、単なる集石を伴う塋と判断した(第24図)。いずれも集石下には特徴はなく、1号は楕円形状の塋底が、集石下で一段深くなっている。石は大小の角礫が乱雑に配されており、投げ込んだという状態であった。2号は不整円形の浅い塋の塋底に置いたという状態で検出された。



第 24 図 集石遺構 (1/30)

小角礫で、丸瓦片も同じように使用している。両者とも用途目的不明の遺構である。

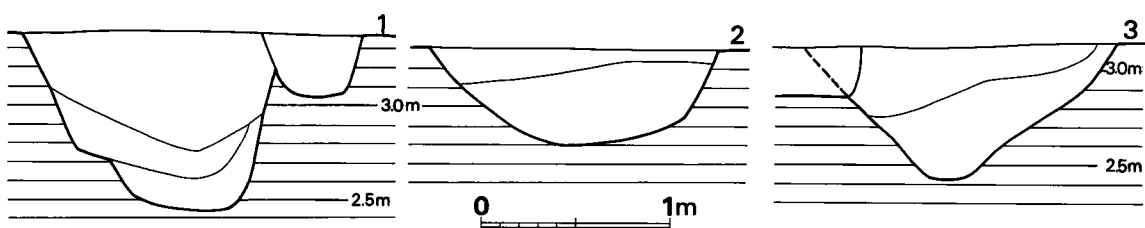
7. 溝

溝は調査区の南半部において6条が検出された。東西溝4条、南北溝2条である。このうち4条の溝は関連するものと考える。溝番号は検出順に付けた(付図1. 第25・26図)。

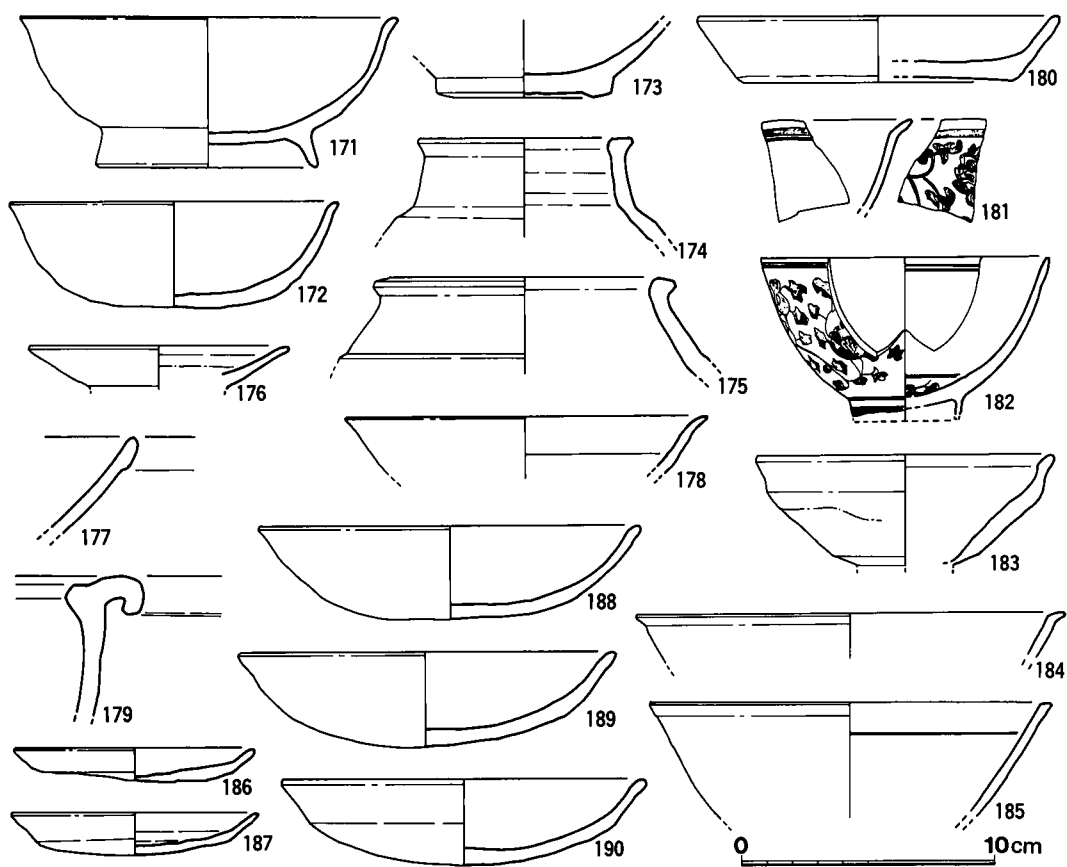
1号溝 東西に延びる溝である。南北溝から西に走るもので、最大幅1.45m、深さ0.95mを測る断面U字状のものである。溝の西半部は細くなり消失しているが、これは遺構検出時に廃棄物処理穴があり、これを除去するにあたり掘り下げたので当溝も若干削平した。しかしながら、調査区法面に溝断面が確認でき、当溝の方向や幅は把握できる。溝底レベルは、南北溝の接点では同レベルであり、西へ高くなっている。溝の主軸方位は溝底でN-67°20'-Wである。

遺物は171~175がある。171は土師器の高台付埴である。身は深く口縁部は外反する。身の内面はミガキ状の整形で、口縁部内外面と身外面はナデ整形である。172は土師器埴である。身の器面整形は171と同じである。173は白磁碗の底部である。低い高台を削り出す。釉は身の下位までとなっている。174・175は褐釉の壺である。耳が付くかは不明。

2号溝 1号溝と同様に南北溝から西へ延びる溝である。検出状態は1号溝と同状況であり、西半部の遺存状態は悪い。溝の最大幅は1.4m、深さ約0.5mとなっている。溝底レベルは西に高くなっており、南北溝に流入する仕組みになっている。両溝の接点では南北溝が深く、



第 25 図 1～3号溝断面図 (1/40)



第 26 図 1～4号溝出土遺物 (1/3)

30cmほどの落差がある。溝の主軸方位はN-72°10'-Wである。

遺物は176～179がある。176は高台付の白磁皿である。釉は内外面に施すが、内面下位は掻き取っている。177は玉縁口縁の白磁碗である。178は白磁碗である。口縁部は軽く外反する。内面上位に細い沈線をめぐらす。179は盤の口縁部片と思われる。口縁下内面にはオリーブ色の釉を施す。

3号溝 南北に延びる溝で、調査区外の南へさらに延びる。北端から鉤手状に4号溝が西へ延びる。溝は幅1.1～1.7m、深さ0.7m前後ではほぼ直線的に走る。溝底は北へ低くなっており、2号溝付近と4号溝の接点では20cmほどの差があり、北に高くなっている。溝の主軸方向はN-18°-Eである。

遺物は180～185が出土。180は土師器坏である。糸切り底で板目がある。器壁の厚いもので口径14.4cm、器高2.6cmである。181・182は染付である。いずれも碗形で、181は口縁部が外反する。口縁部の内・外面に淡いオリーブ色の線を2条と1条めぐらす。外面には条線下に藍色の草花文を描く。釉はクリーム色気味の色である。182は内面の口縁部下と見込みに幅広の線をめぐらし、見込みに花文を描く。外面には口縁部下に1条、高台部に2条の条線を描き、この間に草花を描く。いずれも藍色であり、釉は白色釉をかけるが、口唇部が白色であるほかは、青味がかった。釉は全面に施す。183は天目の碗である。器壁は厚く、身の下位の高台の削り出し部は非常に薄くなっている。釉は黒色を呈し、体部外面下部まで釉がけしていない。184・185は白磁の碗である。184の口縁は強く外反し、185は同部端を尖らせている。185は内面上位に浅く細い沈線をめぐらす。

4号溝 3号溝の北端から鉤手状に西に延びる溝である。当溝は約7m西に延び、約8mの間隔をあけて、さらに西へ延びているがその間の一部は廃棄物処理穴により消失している。溝の幅1～1.3mを測る。溝底のレベルは、西へ高くなっている。溝の主軸方向は、N-70°10'-Wである。

遺物は186～190の土師器がある。186・187は小皿で径は9.6と9.9cm、器高は1.3、1.7cmを測る。いずれもナデによる整形をほどこす。188～190は丸味の底部である坏である。188は径15.2cm、器高3.7cm、189は径15.0cm、器高3.7cm、190は径14.5cm、器高3.5cmを測る。ほぼ同形の坏で、器面整形は内面はミガキ状であり、口縁部内外面と身外面はナデである。

5号溝 4号溝と交差し、弯曲して南へ延びる溝である。調査区外に延び、その全容はつかめない。4号溝との関連については、つかみ得ない検出状態であった。溝底レベルは4号溝より深い。幅0.8～1mを測る。

6号溝 4号溝の北に平行して走る溝である。廃棄物処理穴で東側を消失し、西側は調査区外に延びる。東へはそれほど延びるものではないと思われる。溝底の深さは30cm前後で、西側溝底はさらに20cm深くなっている部分がある。検出区間が短いため主軸方向は明示しがたい。

これら溝のうち、1～4号溝は一連の遺構であり、ある地域を区画する施設であろう。3条の東西溝は、それぞれの主軸方向が異なり、南北溝とも直交しない。東西溝の間隔は、それぞれ南北溝の接点付近で、1・2号間が9.5m、1・4号間が20.2mを測る。この間隔からすると1・4号間にも1条の東西溝があってもよいと考えるが、この間は末掘部分であって、現地では確認していない。これらの溝で囲まれる地区には、各種の遺構があり、重複するものもあり、柱穴らしき小穴が散在し、根石をもつものもあるが、建物の掘立柱穴としてはつかめない。また、特に溝と関連し、東西溝間における区域を特定するような遺構は見当たらない。4号溝の途切れた部分は入口かと思われるが、全体として溝で区画される部分がどのような意味があるのか判断しがたい。

8. その他の遺構と遺物

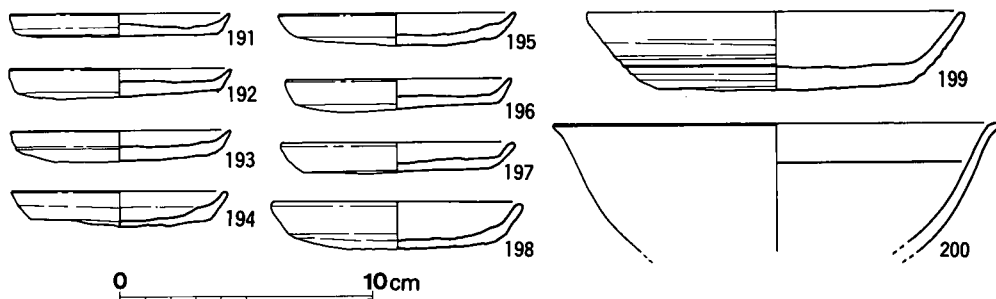
ここでは特に遺物の豊富な遺構について記述する。

竪穴墳出土遺物（第27図）

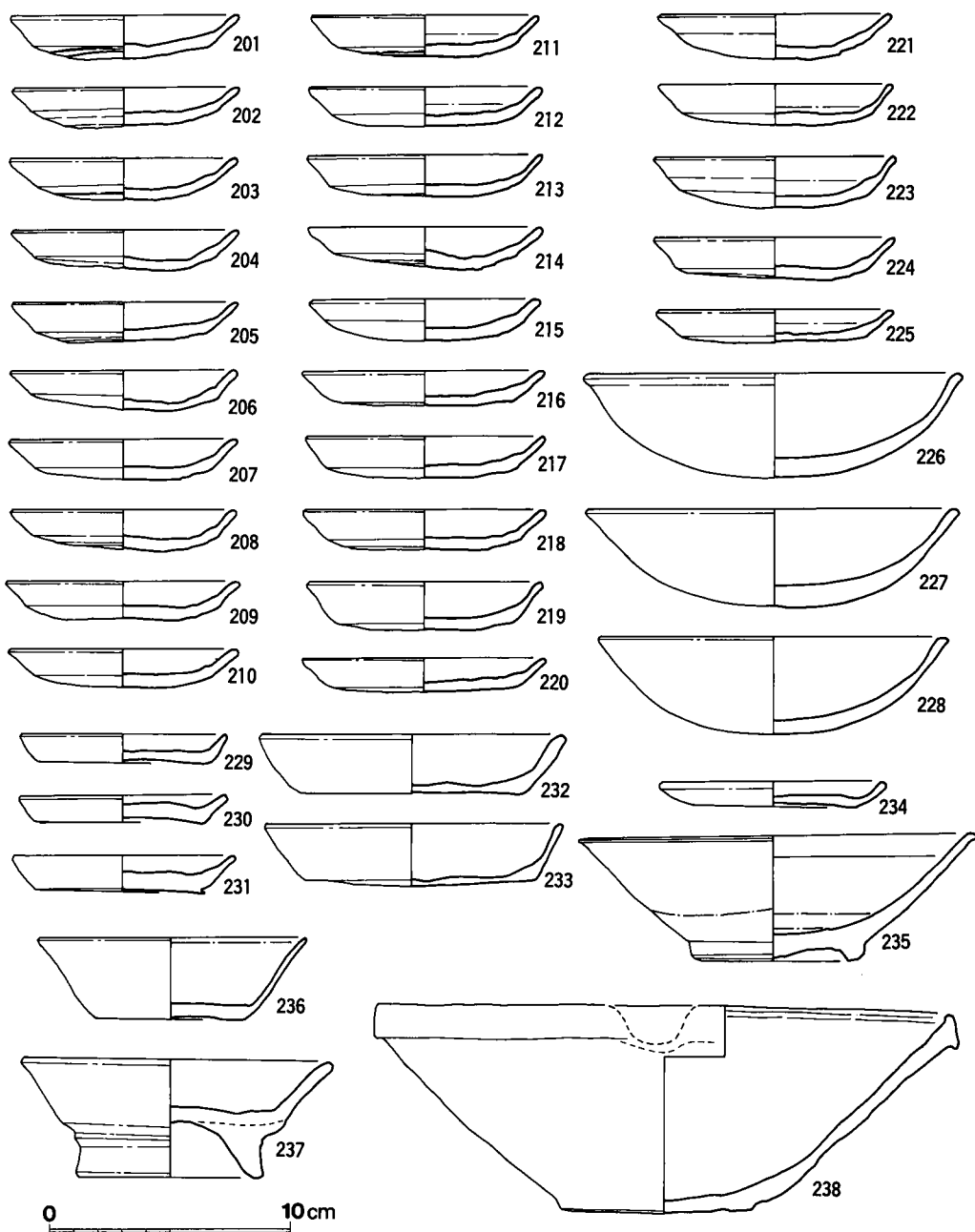
20号井戸の北側に隣接し、当井戸より古い方形プランを呈す深い墳がある。前項で掲げた土壙とはやや趣きを異にする遺構である。多量の完形土師器と白磁が出土している。191～198は小皿である。198が径10cm、器高1.9cmでやや大きく、他は径9.0cm前後、器高1.2cm前後を測る。199は土師器坏で器壁の厚いもので径15cm、器高3.2cmを測る。ナデ整形を施し、外底面に板目がある。200は白磁碗で体部にやや丸味がある。内面上位に浅い沈線をめぐらす。異形の土師器が混入せず一括遺物である。

柱穴状小穴出土遺物（第28図）

201～228はP119の小穴から出土。小穴径30×50cm、深さ30cmほどの規模で、小穴内に多量の土師器を検出した。201～225は小皿で、口径的にみて、9.5cm前後のものと、10cm前後のものに分けられる。いずれもナデによる整形をなし、内外面にロクロによる渦文の残るものが多い



第 27 図 竪穴墳出土遺物 (1/3)



第 28 図 柱穴状小穴出土遺物 (1/3)

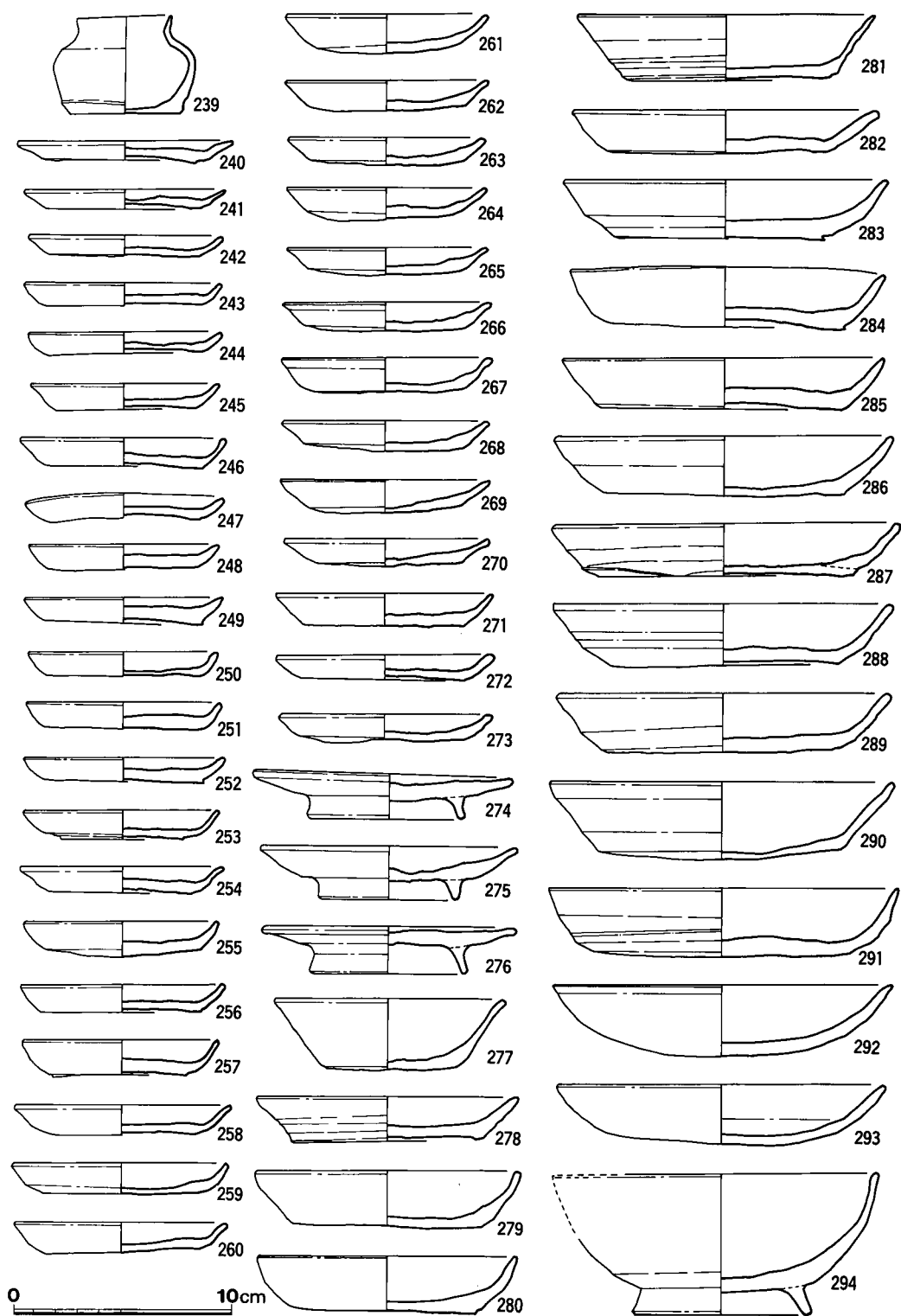
くつかある。226～228は坏である。口径は15.7cm前後、器高4.2cm前後を測り、ほぼ同形大のものである。いずれも内面下位がミガキ状の整形をなし、他はナデによる整形である。小皿、

坏はつくりがよく類似し、同じ工人の作になるものと考えられる。229～233はP 57出土。229～231は糸切り底の小皿である。229は口径8.8cm、230の径8.7cm、231の径9.3cmを測る。232は径12.8cm、233の径は12.5cmを測る。234、235はP 37出土。234は径9.5cmの小皿で糸切り底であり、外底面に板目がある。235は白磁碗で太く短い高台を削り出す。内面上位に細い沈線をめぐらす。釉は体部下位までで、見込みは幅2cm前後で円状に掻き取る。236はP 106出土。白磁の口禿皿である。身の器壁は薄手のもの。釉は外底面までかかるが、掻き取るも完全ではない。237・238はP 62出土。237は高台付の坏か。高台は厚く高いもので、坏部も厚味がある。全面ナデによる整形。238は片口である。瓦質で口縁の外面部が黒色であるほかは灰色を呈す。

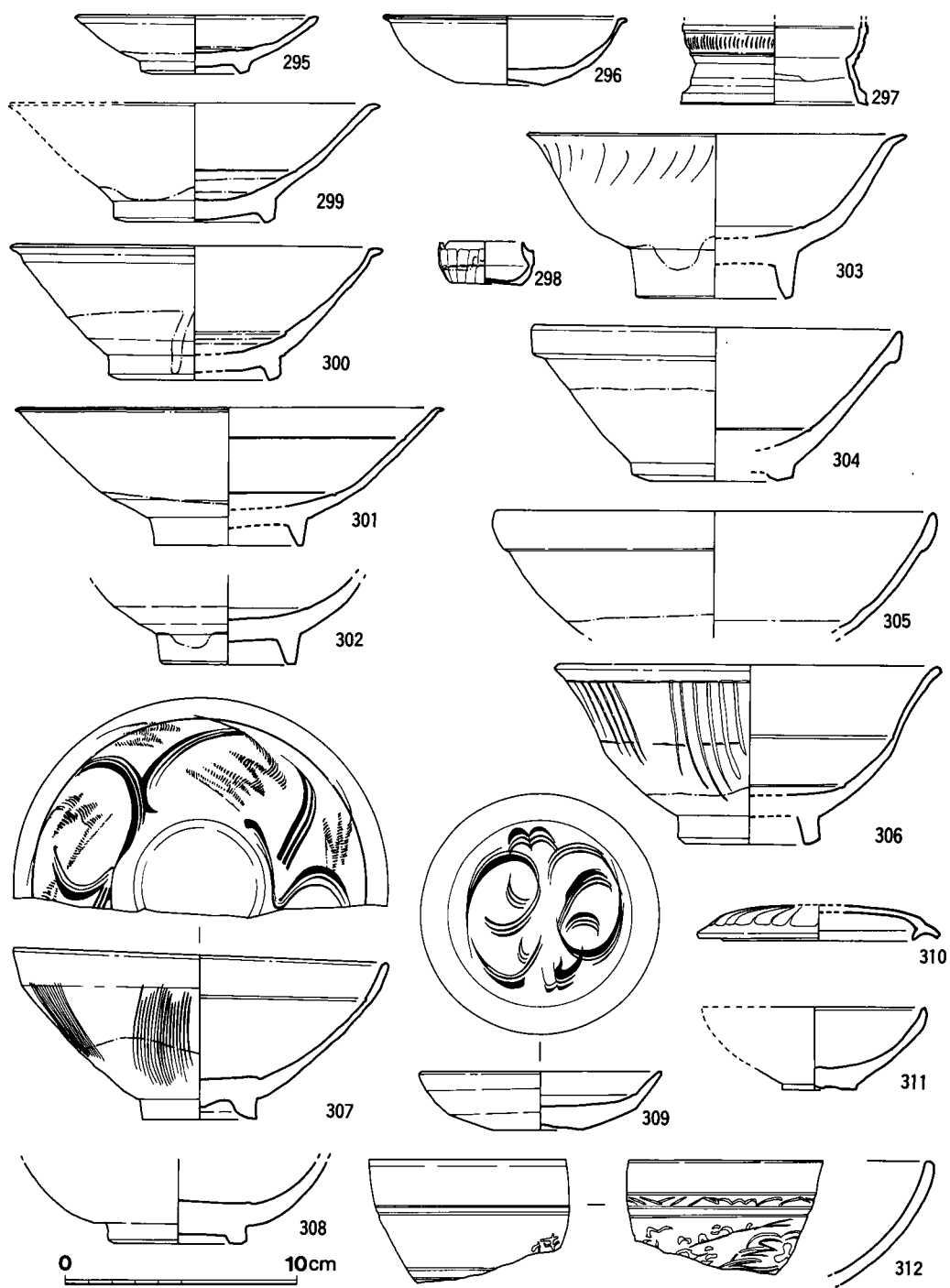
整地層出土遺物（第29～31図）

土師器（第29～31図239～294） 器種は小皿と坏が多い。239は小壺である。器壁は薄く丁寧な作りである。底部は糸切り底で、体部の整形は内外面ともナデによるもの。小皿は糸切り底のもの（240～260）とヘラ切り底でナデ整形と思われるもの（261～273）に分けられる。いずれにも底部に板目のつくものが多い。前者は口径が9cm、9.5cm、10cmの各大きさに分類でき、9cm大のものは底部に厚味がある。後者は口径が9.5cm前後のものと10cm前後に分類できる。274～276は台付の小皿である。274・276は皿部が平坦に近い作りである。いずれも器壁の厚い皿部に台を取り付ける。口径は11.8cm前後を測る。いずれも外底面に板目が残る。277は口径に比べ器高の高い坏で、当遺跡では稀な器形である。口径10.7cm、器高3.4cmを測る。体部整形はナデによるが、外底面はヘラ状工具によって掻き取った状態である。胎土は他に比べやや異なる。278～293は坏で、292・293以外は糸切り底である。糸切り底のものは口径が12～15.5cmあり、大きく12～13cm大、14cm大、15cm以上の三つに分けられる。板目のつくものが多い。292・293は口径が15.6と15.1cmを測り大径のものである。内外面ともナデによる整形である。291は糸切り底かどうか不明のもので、口径16cmと大きい。ナデによる器面整形をなす。294は高台付の碗である。口径約15cm、器高6.4cmを測る。器面整形はナデによる。これらの土師器のうち、小皿や坏の中に、口唇部や内面に煤状の物が付着しており、灯明皿に使用された可能性がある。

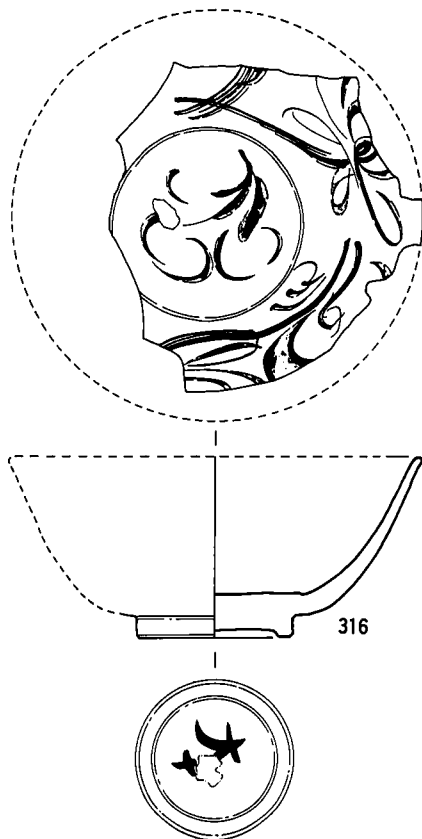
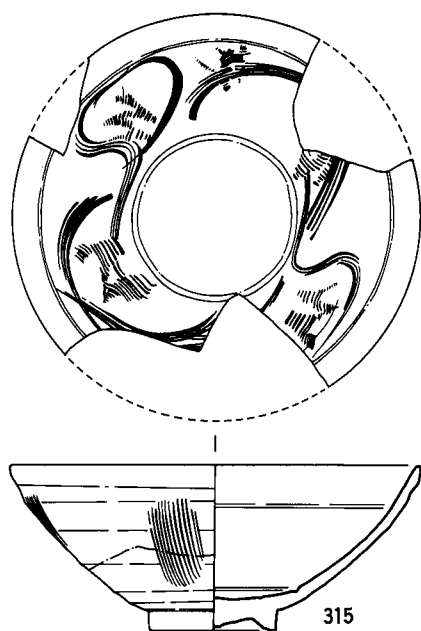
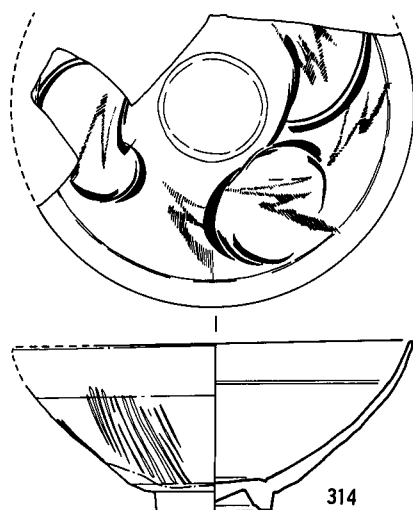
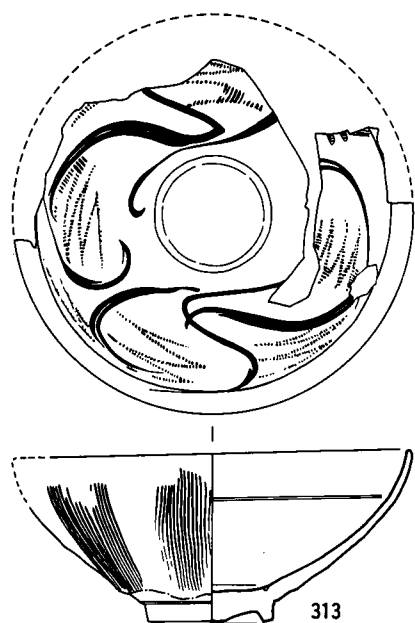
整地層では以上の土師器にはかに青・白磁等や陶器片なども多数出土しているが、青・白磁に遺存のよいものがある。295～305は白磁である。295は高台付の口禿皿である。釉は体部の下位までで、内面下位には低い稜がめぐり、その下で釉を掻き取っている。高台は低く削り出している。296も皿であろうか。体部に丸味があり、口縁部の作りは碗形に近似する。外底面はヘラケズリで、外底面を除き施釉する。297は香炉の下体部であろうか、上部が欠損し不詳。器壁は薄い。突帯間に羽状の浮文をめぐらす。内外面とも淡いオリーブ色味のある白色釉を施す。298は青白磁の合子。体部には菊弁を表す浮文がある。蓋の口唇部の一部が受け部に窯着する。受け部から内面は施釉しない。淡青色の釉である。白磁碗は体部が直線的に延びるもで



第 29 图 整地层出土遗物 1 (1/3)



第 30 図 整地層出土遺物 2 (1/3)



0 10cm

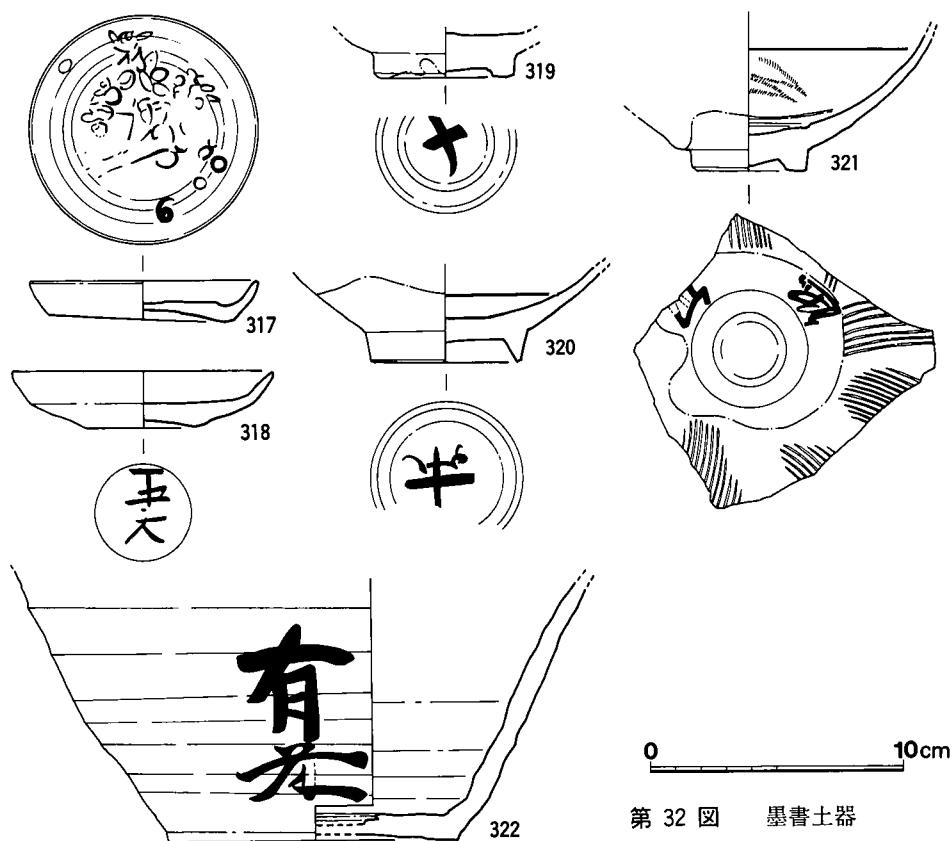
第 31 図 整地層出土遺物 3 (1/3)

口唇部を外に摘み出し尖り気味にするものと（299～301）と体部にやや丸味のあるもの（303）および玉縁の口縁をなすもの（304・305）のに分けられる。299～301は内面に沈線および低い稜がつき、299・300には見込みに掻き取りがある。303は器壁の厚いもので、体部外面に線彫りの菊弁状の文様を施す。釉は黄色がかったものである。302は丸味のある碗の底部片であろうか。釉は淡青色系のものである。玉縁口縁碗は、305のように形骸化した形状のものがある。

青磁は306～310、313～316がある。306は体部口縁下に沈線をめぐらし、その下に6条単位の条痕を施す。オリーブ色系の釉が施されるが、所々が白く発色している。306は内外面にヘラと櫛歯による文様を施す。釉色は灰色味のあるオリーブ色である。308は青磁碗で316系統の青磁か。緑色の釉である。309は皿で、見込みにヘラによる草文がある。釉はオリーブ色である。外底面のみ施釉しない。310は青白磁で淡青色の釉である。合子の蓋で内面には施釉しない。外面に菊花文を表わす。313～315は内面にヘラと櫛歯による文様を、外面に櫛歯による条文を施す。313は濃いオリーブ色、314は淡いオリーブ色、315は淡いオリーブ色の釉である。

311は褐色系釉の小碗である。外底面はヘラ削りにより作っている。胎土は茶褐色を呈す。

312は高麗青磁で、径20cmほどの碗であろうか。内外面に白・黒色の象嵌文を施す。釉は灰色系の緑色である。



第 32 図 墨書土器

317は土師器皿の内面に草花様の文様を描く。整地層出土。318は青磁皿の外底面に墨書。「王天」であろうか。西側の拡張部の攪乱層より出土。319は青磁碗の外底部に墨書。「十」の字か。釉はオリーブ色を呈す。13号井戸出土。320は白磁碗の外底部に墨書。やや特異な筆使いで、字体は不明。整地層出土。321は青磁碗の体部下位で露胎部に墨書。くずした字体で判読しがたい。整地層出土。釉は淡いオリーブ色。322は陶器甕の下胴部に墨書。2字を記すが一方は薄れており、判読しがたい。整地層出土。

瓦埴 (第33・34図)

今回、得られた瓦埴類は、2ヶ所の瓦溜りと建物地業、井戸等から出土。軒丸瓦3類11種16点・軒平7類8種17点・道具瓦1点・埴1点と丸瓦・平瓦片がある。丸瓦・平瓦については、整理の都合上、特徴的なものだけを掲げた。

1). 軒丸瓦 I～Ⅲ類に分け得る。I類は、1+8の中房に、単弁8弁の蓮花文のもの2種。Ⅱ類は、内区に枝葉を含む花文を配置したもの5種。Ⅲ類は、巴文4種である。

I類は、8分割を基本とした文様構成で、今回出土の軒丸瓦の中では最も形の整ったものである。

I類の2種は、外区が高い素文のものをA・外区に32個の珠文を配置するものをBとする。

Aは、外区を除けばBと同范ではないかと思われ、高い素文縁は後から付されたものとも考えられる。1点だけB区瓦溜出土。茶褐色で熟成した粘土を使用しているが、Bに比較しやや焼きが悪い。Bは、B区瓦溜からAと伴出した2点である。茶褐色で熟成した粘土を用い、焼き上りも良い。

Ⅱ類は、内区に菊花状の花文と複葉の枝葉を表現するものをA・花文に複葉の枝葉の葉脈まで表現するものをBとする。Aは、3種類あって外区と内区の間に界線をめぐらし、内区菊花の弁端が珠文状となるものA-1・A-1と同様の文様構成でありながら、珠文状とならず菊花文の弁端が脹らむものA-2・内区と外区の間に界線のないものA-3とがある。A-1と思われる個体は、3点あるが良質の胎土で須恵器のように青灰色に焼き上っている共通点はあるが、3点とも瓦当面の残存部分を異にしているうえに、出土地点も20号井戸掘方、23号井戸掘方、北半部整地層と別々であり同一個体ではない。A-2は、6号溝および整地層からの出土である。いずれも瓦当右側の破片で、良質の粘土を使用している。黒色ないしは茶灰色で焼きが悪い。A-3は、建物地業東側の包含層からの出土1点である。A-1に次いで文様はシャープである。黄灰色で焼きも良い。

B-1は、瓦溜りから1点出土している。複弁とも言えそうな長さの異なる花弁を5弁もつ花に右に傾いた幹枝から複葉が配置され、さらに外側につる草状の文様が認められる。黒灰色で焼成は悪い。

B-2は、B-1に類似の複葉が幹枝から出る。幹枝が左に傾いているので、B-1と別の範であるが、瓦当面の下半4分の1程の破片である。焼成、胎土も良い。1号土壙出土。

Ⅲ類巴文の瓦当は5点出した。うち1点は、破片が小さく瓦当文の全様を知り得ない。4点は、それぞれ範を異にする。Aは、3つ巴の頭が尖るもので、A-1は、巴の尾が長く円となり珠文11をその外側に配置するもの。A-2は巴の尾が、円にならないもので、その外側に珠文11が配置されている。Bは、3つ巴の頭が丸いもの。B-1は大きな巴文で、その外側に9個の珠文を配置している。B-2は、B-1に比較して、やや小さな巴文で、珠文11を配置するものである。5点とも西南トレンチの攪乱層からの出土である。共通して、灰白色に焼き上がり、雲母が粘土中に認められる。

2). 軒平瓦、ⅠからⅦ類に分け得る。

Ⅰ類は、上外区に珠文、内区には右から左へ流れる扁行唐草文、下外区の線鋸齒文は、他の出土例では、脇区まで連続する。格子状の叩打文のある平瓦に粘土を厚くつけ瓦当を接合している。砂粒を含む胎土で焼き上がりも悪い。1点が、建物地業の中から出土している。

Ⅱ類は、上外区に珠文を、内区に唐草文を配置する瓦当で、中心飾を含む小破片1点が17号井戸の掘方から出土している。他の出土例から見ると上外区から脇区まで珠文は配置されていて、唐草文も中心飾の右では下から上へ唐草が巻き込み、左側では上から下へ巻き込む左右不均衡の唐草文である。顎は、段顎に近いもののようだ。胎土に砂粒を多く含み、Ⅰ類と同様焼成も悪い。

Ⅲ類は、上下区分とも珠文帯で、内区には上下互い違いに花文を配置している。瓦溜りから2点出土。短い段顎持つ瓦で、2点ともレンガ色に硬く焼き上がっている。

Ⅳ類は、内区は均整唐草文と思われる破片1点で下外区に珠文を配置している。上外区は、出土例では存在しないが、範自体には珠文帯あたりがあったのではないかとと思われる瓦である。Ⅲ類と同様の短い段顎で、焼成色調ともに類似している。

Ⅴ類は、やゝ小型の軒平瓦で平瓦を製作する桶に粘土を巻きつけた状況で回転台を利用し瓦当まで造ったものである。この状況で瓦を桶からはずし自然乾燥の後、4枚に切り離す特殊なものである。瓦当面は、三重の突線状の弧文の中央線を、右斜上から刺突し左から右へ流れる波文とするものAと、中央線を左斜上から刺突し、右から左へ流れる波文を構成するものBとがある。両者とも顎部を指に布をまいて連続しておしつけ、波状の文様としている。出土点数もAで4点、Bで5点と軒瓦の中では最も多い。2・4・6・10号井戸の掘方や整地層等からの出土である。9点すべてが灰色ないし青灰色で須恵器に近い、硬い焼上がりである。

Ⅵ類は、中心飾に宝珠を置く均整唐草文の瓦である。西南トレンチ攪乱土中からの出土で胎土に砂粒を含み、黄灰色で焼上がりは悪い。

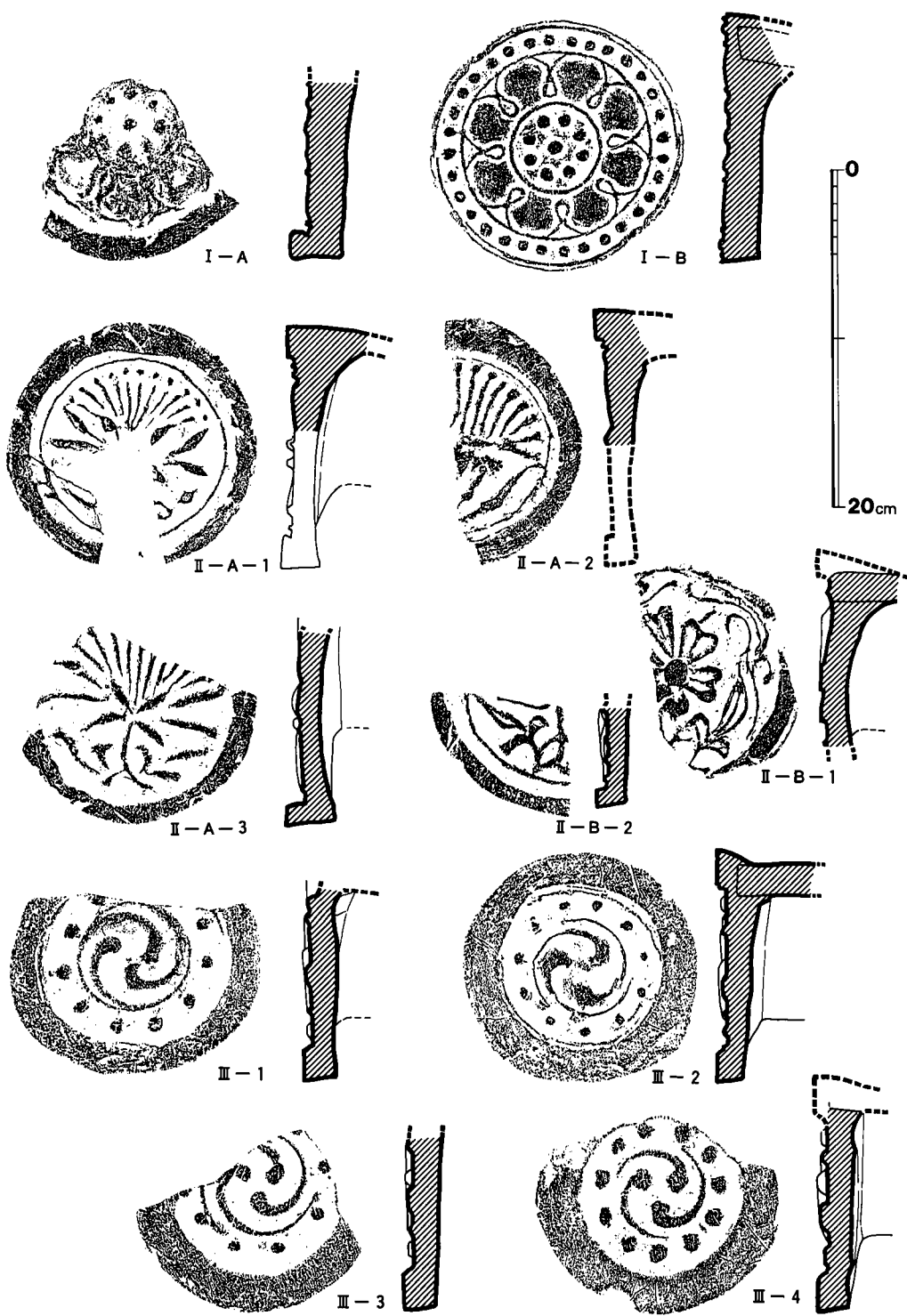
Ⅶ類は、脇区を広くあけた均整唐草文の瓦である。瓦当面の幅、高さも小さい。灰白色で砂粒を含み焼上りも悪い。

3) .丸瓦・平瓦 全容を知り得るようなものはない。わずかに第33図に示した丸瓦の破片2点が最大級の破片である。いずれも、外面には布痕を、内面には格子目ないしは縄目の叩打痕がある。叩打痕は、丸瓦・平瓦ともに同種のものが認め得る。叩打文は、格子目・二重の斜格子目と縄目の3種で、軒平瓦Ⅰ類の平瓦部分に残る斜格子状の叩打痕が例外的存在であるが図示出来るほどの破片ではない。焼成・胎土とも良いもの悪いもの様々である。

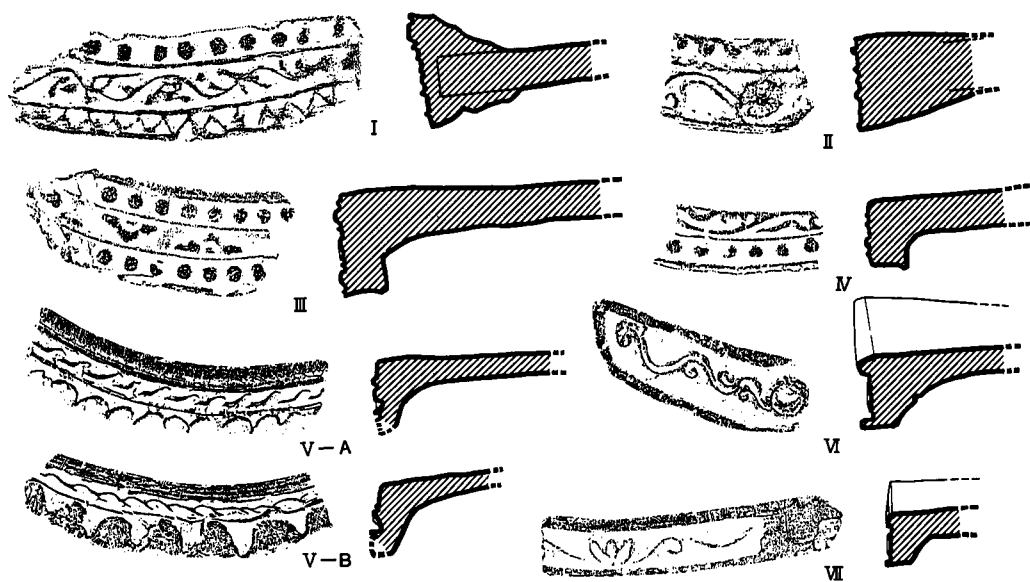
4) .道具瓦 長さ27cm、巾23.5cm、厚さ3cmを計り、やゝ反りがある。他の平瓦に比較し弧の開きが大きいことから雁振瓦ではないかと考えた。灰黒色で胎土に砂粒を含み、焼成も良くない。5号井戸から出土している。

5) .埴 建物地業から出土している。長さ30cm、巾17cm、厚さ8cmほどである。表面は、二次的な熱を受けたもののようで、赤変した部分がある。また、なにかの目的でつけた番付と思われる「十」の字がヘラで刻まれている。胎土に砂粒を含み、灰白色で焼も悪い。

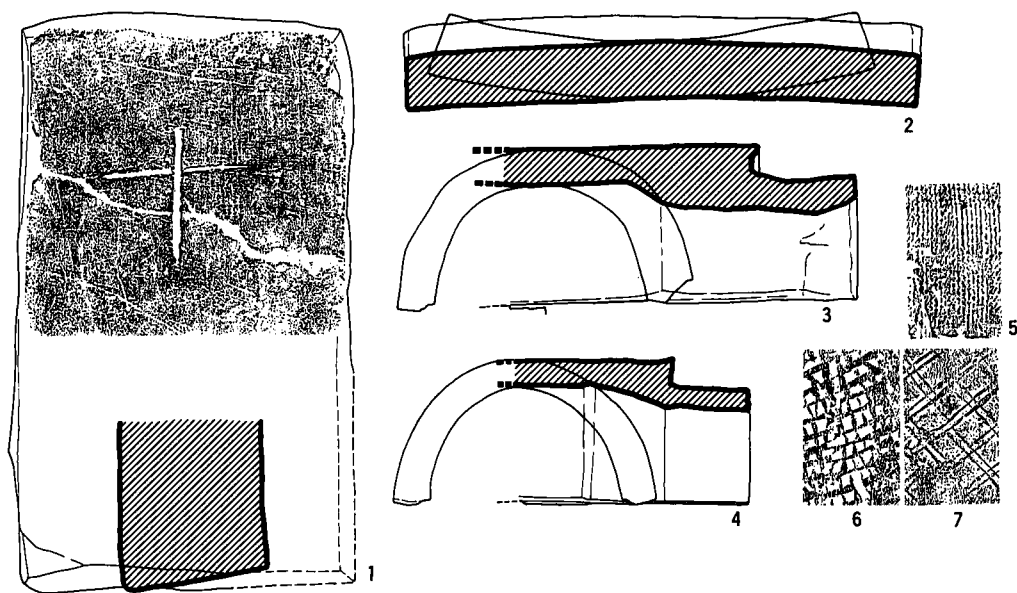
以上が瓦埴類についての概要である。これに他遺跡の出土例等から若干の年代観等を補足する。軒丸瓦Ⅰ類Bは、大宰府史跡の第70次調査（観世音寺の小子房跡）・第74次（学校院東辺部）・第77次（学校院東辺部第74次調査区の北）でやゝ大型ではあるが同じ文様構成のものが出土している（註1）。時期決定の根拠はないがA類・B類との間には差はないものと思われる。平安時代と考えている。軒丸瓦Ⅱ類の瓦については今日まで他の遺跡からの出土例がなく瓦そのものからの時期の決定は今後にまたざるを得ないが、文様からは鎌倉～室町時代頃に考えたい資料である。なお、軒丸瓦Ⅱ-A-1は、軒平瓦Ⅴ-A、Bに焼成や胎土の点で類似しているので、同一工房で製作された可能性がある。軒丸瓦Ⅲ類は文様からも、出土状況からも近世のものである。軒平瓦Ⅰ類は、大宰府史跡の発掘調査で出土している（註2）。平安時代。軒平瓦Ⅱ類は、筑前国分寺の発掘調査で出土している（註3）。唐草文等のくずれはあるが平安時代。軒平瓦Ⅲ・Ⅳ類は、ともに短い顎と、胎土、色調などの点が共通しているので同じ時期に考えて良いと思われる。軒丸瓦Ⅰ類と同じ瓦溜から伴出しているので平安末～鎌倉時代の中で考えたい。軒平瓦Ⅴ類は、軒丸瓦Ⅱ類の時期に考えて置く。軒平瓦Ⅵ類は、大宰府観世音寺の子院金光寺に類似の出土例があり（註4）、室町時代頃に置けよう。なお、軒平瓦Ⅶ類は、近世の瓦である。箱崎宮は、923年（延長2年）に、穂波郡の大分八幡宮から移設された。移転の背後には、新羅に苦慮した大宰府の政治的配慮があったとも言われ、その後も、有力武士団との関係を持ちつづけて来た。今回の調査で出土した瓦埴の様相も最も古いものが平安時代



第 33 图 瓦拓影 1 (1/4)



0 20 cm



第 34 图 瓦拓影 2 (1/4)

にあり、以後近世にいたる資料が得られている。なお、今後の調査によってより多くの資料が補填される必要がある。

註1 大宰府史跡―昭和56年度発掘調査概報―昭和57年3月 九州歴史資料館、なお、この瓦は観世音寺を中心とした発掘調査で出土しており観世音寺の瓦と考えても良いようだ。

註2 大宰府史跡―昭和43年度調査概報―昭和43年3月 福岡県教育委員会ほか

註3 筑前国分寺―昭和52年度発掘調査概要―昭和53年3月 福岡県教育委員会

註4 大宰府史跡―昭和55年度発掘調査概要―昭和56年3月 九州歴史資料館

Ⅳ 結 び

博多の名所筥崎八幡宮は、1月の玉取祭（玉せせり）と9月の放生会が有名で、福博の人々に親しまれているところである。そもそも、当宮は筑前穂波郡（現筑穂町）の大分八幡宮から923（延長元）年に移設されたのが始まりである。その理由は、宗教的祭事を催すに不都合な地に大分宮があることや、あるいは、博多湾に侵入する新羅に苦慮し、大宰府の政治的配慮があったといわれる。1051（永承6）年には石清水八幡宮の別宮となる。この箱崎は博多湾に面し、対外交易の要地で、宋人などの交易従事者が居留していたといわれ、当宮の神主がこれら交易従事者と交渉をもち、それなりの利を得ていたことであろう。1274（文永11）年に蒙古軍の襲来で焼失したが、直ちに再建される。以後6度の火災で焼失したが、その度ごとに建築様式を継承し、今日の建物として遺っている。祭神は応神天皇、神功皇后、玉依姫の3座である。足利尊氏、大内政弘、大内義隆、豊臣秀吉などの武将も詣で、社運は極めて隆盛であったと伝えられる。

箱崎遺跡は、以上のような歴史のある筥崎宮に隣接する所で、当然関連ある遺構・遺物の出土することが予想された。調査の概要は前章で記述したところであるが、その成果をまとめてみたい。

遺構で注目されるものは、建物地業と溝であろうか。

建物地業は、その上面部を削平されているため、その上部遺構すなわち建築物の概要はつかめない。筥崎宮に残る江戸期の当宮の絵図をみると、当宮境内の南側に道路を挟んで、坊等の建物が描かれており、東南隅の境内外あたりに「赤幡坊」と読まれる建物がある（註1）。この建物に該当するか否かは、今後の課題とするが、恐らくこの建物地業がこのような建築物の基礎構築物と考えられる。なお、柱穴状小穴群は、礎板となる板石のある柱穴もあるが、これらの位置は建物柱穴としては不等間の距離、方向であって、結果的に掘立柱建物として把握できなかった。

溝は、南側の調査区内で主に検出された遺構である。東西・南北方向に延びる溝は、区域を限定する施設であると思われる。4号溝（東西溝のうち最北にあるもの）は、途中で切れ、ここが入口になるものと思われるが、溝内における遺構は、井戸、土壇、柱穴群であって、これらが溝内区域の用途を限定する配置ではなく、周辺地域での調査成果を含めて検討する必要がある。なお、南北溝の主軸は真北で磁北でもない。現在の宮崎宮周辺道路の方向は、当宮参道を軸にしているようで、海岸線に向け真すぐに東西道路があり、これに直交する南北道路が走るが、今回発見の溝は、この道路とも方向を異にしている。

溝の時期は、1号溝が10世紀後半、3号溝が13世紀中～後半および15世紀代の遺物が出土しており、4号溝は11世紀後半の小皿、坏が出土している。

遺物は、土師器、青・白磁、中国や日本の陶器、半島製の青・白磁等がある。

土師器でみると、13世紀中頃から後半が大半を占め、52～56、120～123の11世紀後半から12世紀初頭頃のものがある。同時期のものに8号・9号土壇や2号・4号・8号・18号・24号井戸やP119がある。特小皿といわれる5・6・7の土師器は14～15世紀のもので、15号土壇はこの時期と思われる。

青磁は、同安窯、龍泉窯などがみられるが、外面に蓮弁文を浮彫りする碗は量的にみて比較的少ない。133の雷文を描く碗は、伴出した136の染付碗と共に「元」のものである。15号土壇出土で15世紀代の遺構であろう。青磁は、ほかに高麗の象嵌青磁碗片が出土している。同青磁は12世紀中頃～13世紀中頃に最もよく生産されており、大宰府跡でも発見されている。

白磁は、71の高麗白磁碗と思われるもので、遺跡発見では稀少例ではなかろうか。また、浮文のある小壺片83は、釉色が灰色で類例の少ないもので、宗像市野坂中山遺跡出土の青磁双耳小壺が類似する。13～14世紀の遺跡である（註2）。

染付陶磁は、その出土例は少なく、福岡市教育委員会調査の博多遺跡群でも、多量の中国陶磁に混じって、若干の染付陶磁が出土しているのみである。当遺跡でも採集されたが、「元」代のもので数片という数量である。

陶器は、中国物に混じって常滑、備前、信楽という国産陶器も採集された。

瓦は、遺物の説明で詳しく記載しているところで、11～15世紀に属するものがあり、出土する陶磁器群と時期を同じくする。

以上、遺構と遺物について簡単にまとめてみたが、前述した宮崎宮の歴史を裏づけるように、創建時頃の遺物や遺構もあり、遺物の中国陶磁の多量出土は、宮崎宮が対外交易と深くかかわっていたことも判明し、また、厚い整地層中には焼土や灰が多く混入し、13世紀中～後半の時期を主体とする多量の遺物の出土は、この整地層が13世紀後半（鎌倉時代中期）の蒙古襲来による火災を原因とする整地に成るものと推定され、整地事業も短期間のうちになされたものと思われる。

短期間のうちに整理・報告書作成というあわただしい作業と、担当者の不勉強により調査報告は十分なものではなく、諸学兄の御批判を受けるものと考えられるところで、当調査の成果を十分検討され、御活用されることを願ってやみません。

註 1 中山平次郎「古代及博多」九州大学出版会 1984年

これに箱崎八幡宮所蔵の「筑前国続風土記附録」所載の同宮図がある。

註 2 宗像市教育委員会「埋蔵文化財発掘調査概報—1983年度—」 宗像市文化財調査報告書 第7集 1984年

図 版



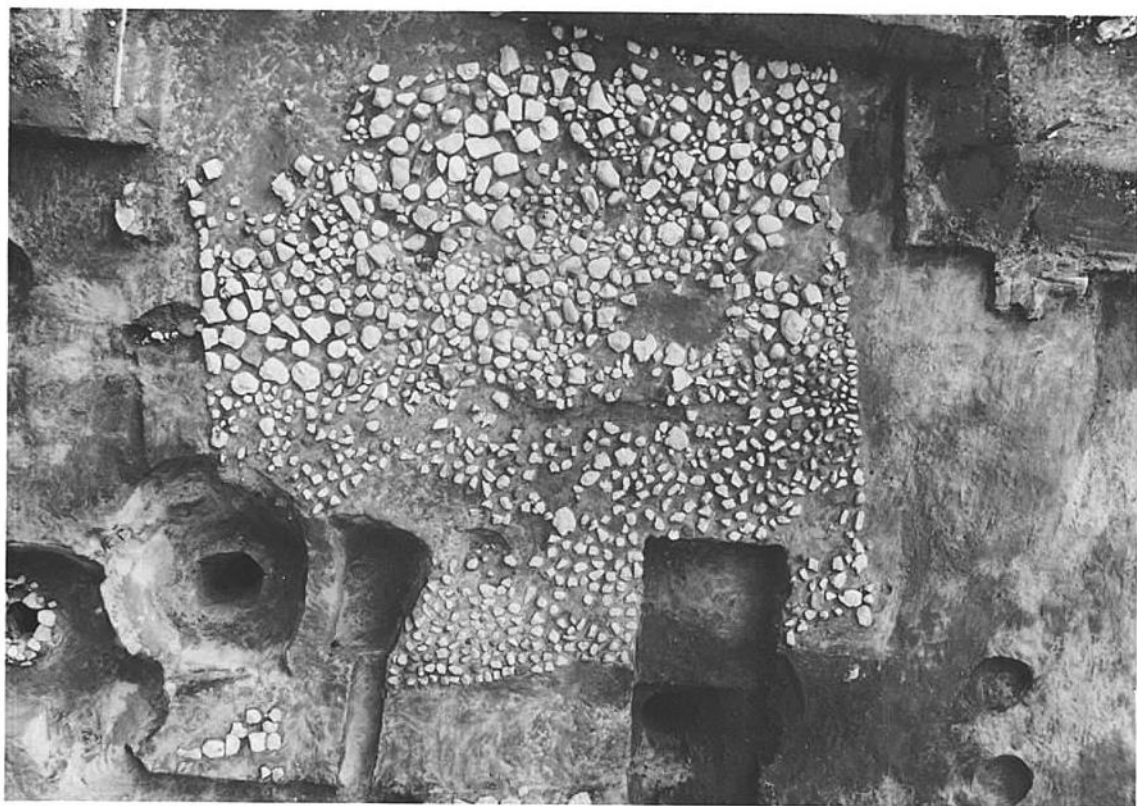
(1) 調査区付近、左上の森は管崎宮（南から）



(2) 調査区北半部全景 1



(1) 調査区北半部全景 2



(2) 建物地業全景



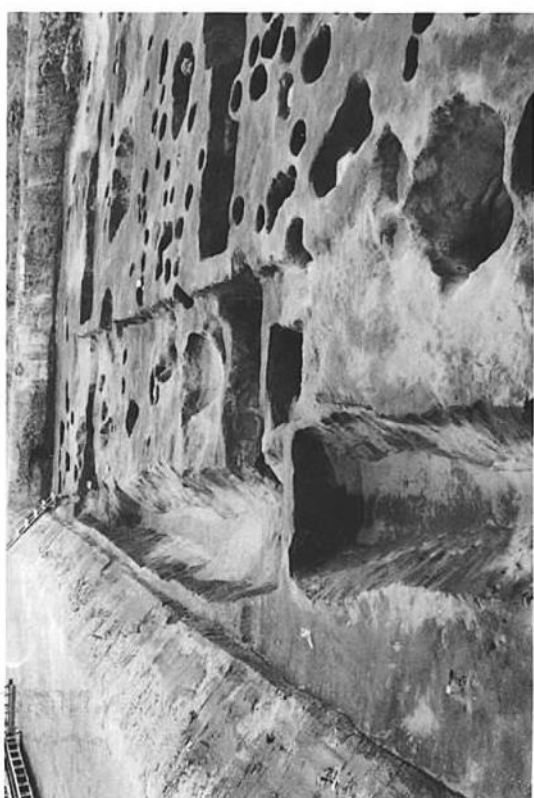
(1) 調査区南側（北から）



(2) 1号溝（東から）



(3) 2号溝（東から）



(4) 3号溝（北から）



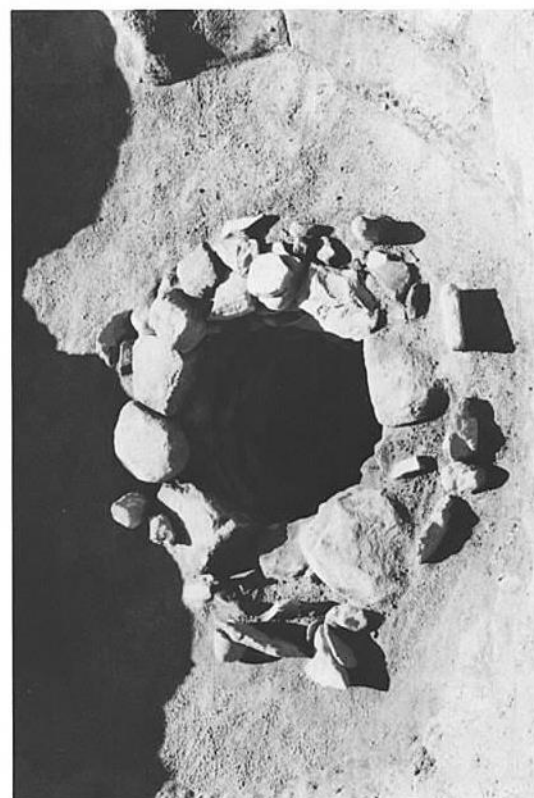
(1) 3号井戸 (西から)



(2) 4号井戸 (東から)



(3) 9号井戸 (西から)



(4) 9号井戸 (西から)



(1) 13号井戸 (北から)



(2) 19号井戸 (南から)



(3) 20号井戸 (南から)



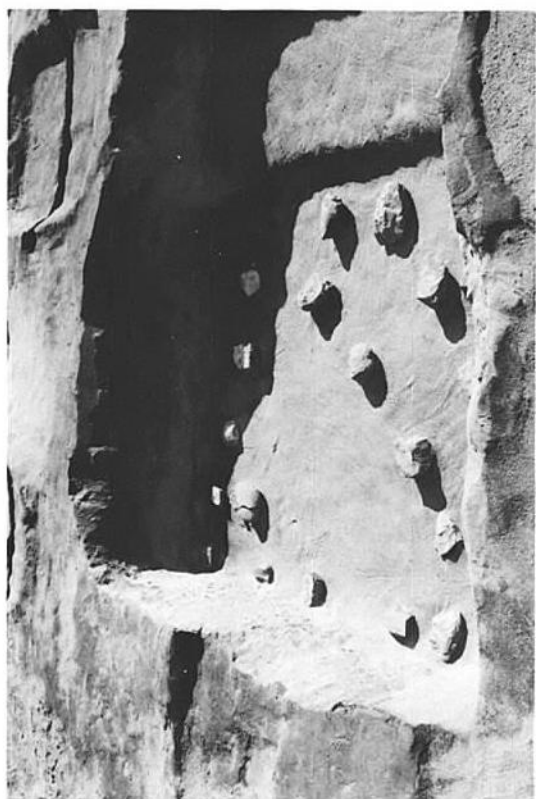
(4) 21号井戸 (東から)



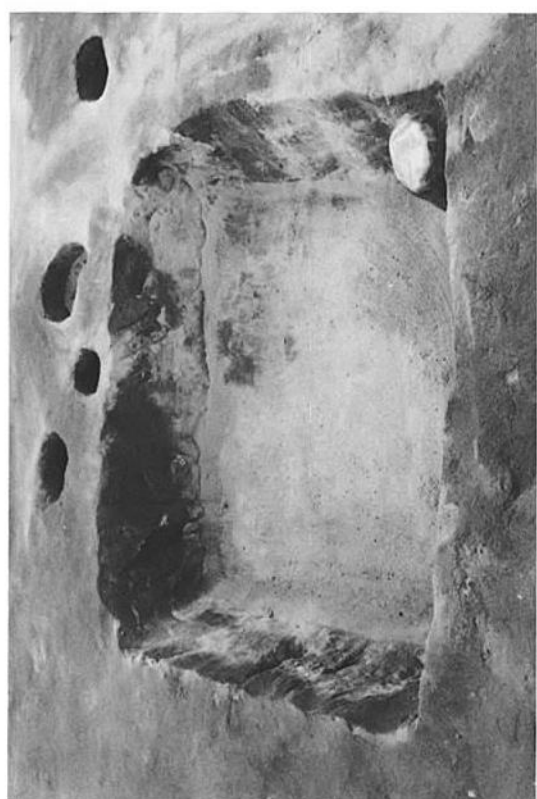
(1) 3号土壇 (西から)



(2) 11・12号土壇 (北から)



(3) 13号土壇 (西から)



(4) 15号土壇 (北から)



(1) 1号粘土板



(2) 4号粘土板



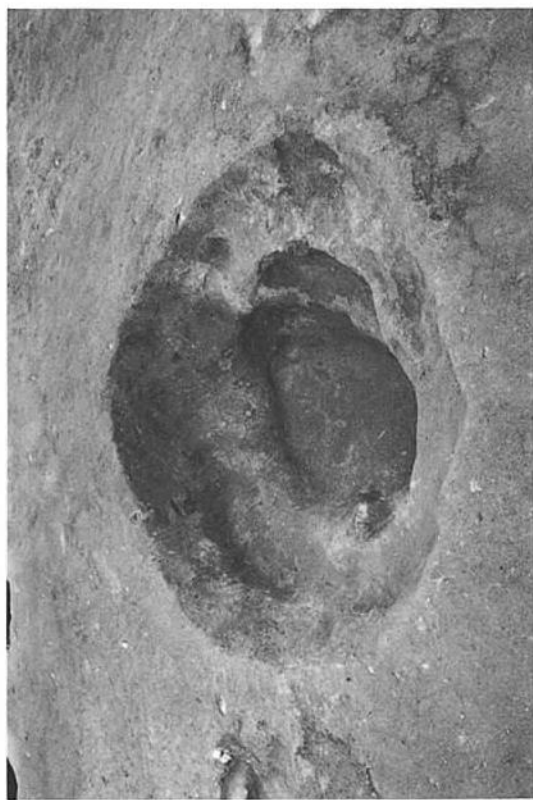
(3) 9号粘土板



(4) 12号粘土板



(1) 溝状遺構 (北から)



(2) 溝状遺構 円形坑部 (西から)



(3) 溝状遺構遺物出土状態 (西から)



(4) 溝状遺構遺物出土状態 (南から)



156



160



158



163



159



166



168



170



167



(1) 溝状遺構出土遺物



238



59

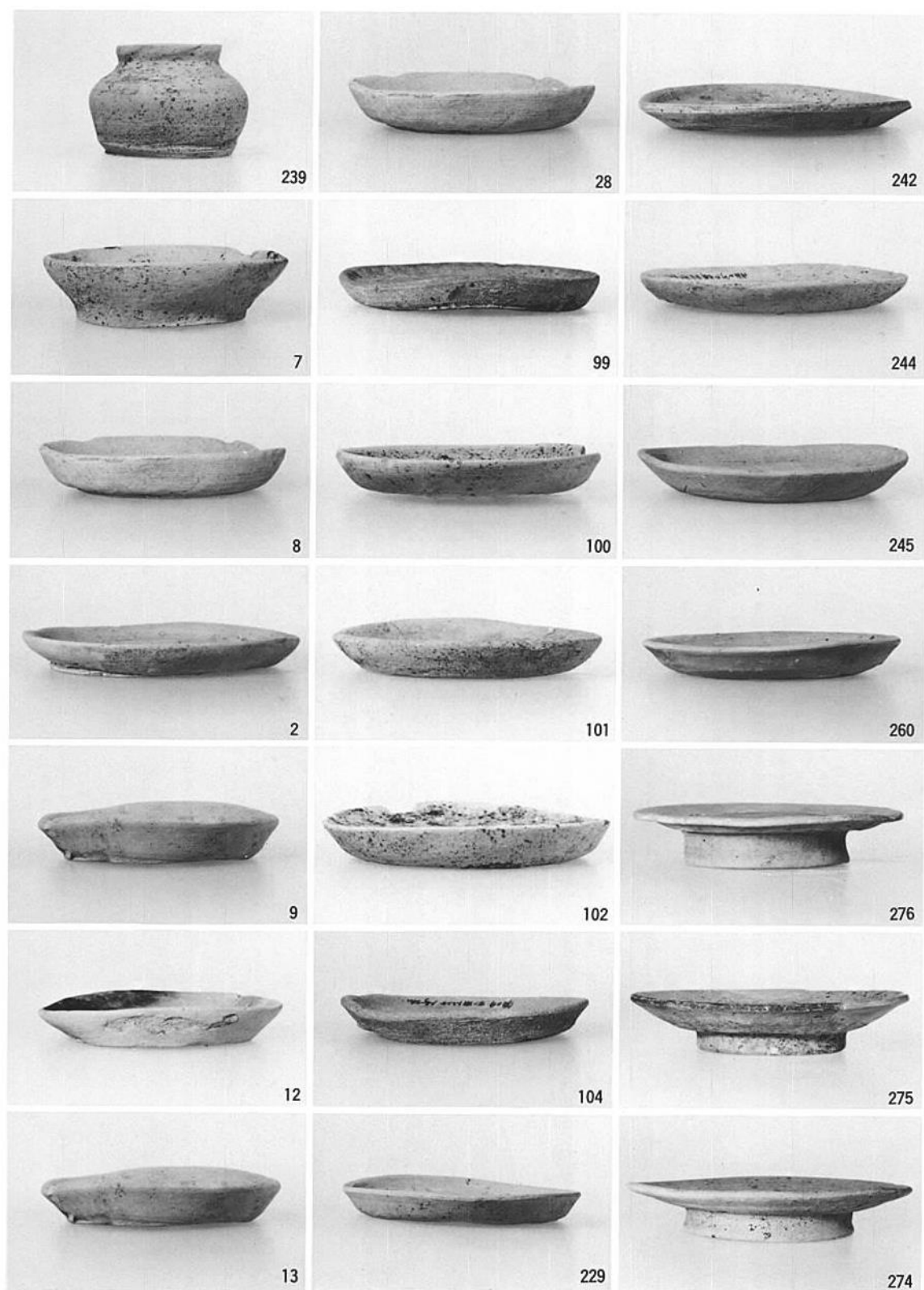


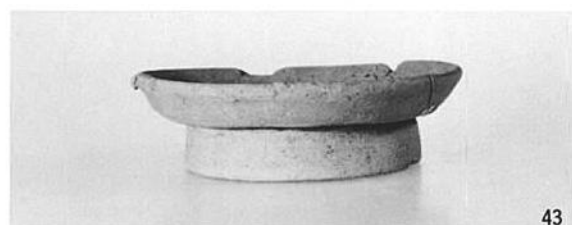
97



60

(2) 土塙、片口、盤





43



117



44



232



45



233



108



250



237



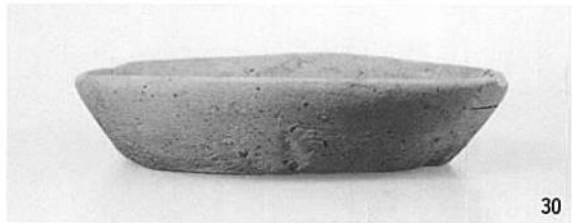
282



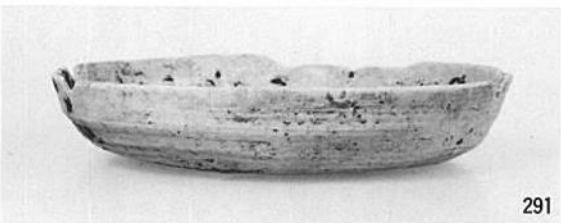
236



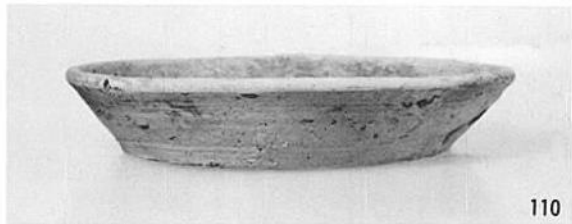
289



30



291



110



292



298



235



290



71



309



306



307



314



313



315



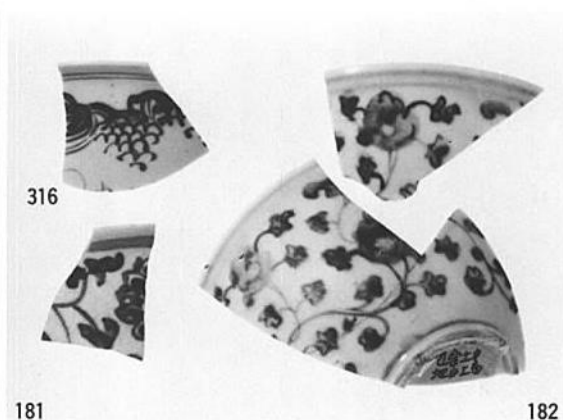
316



311



1. 白磁

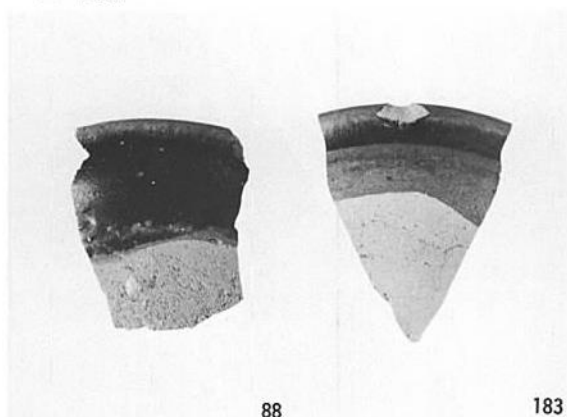


316

181

182

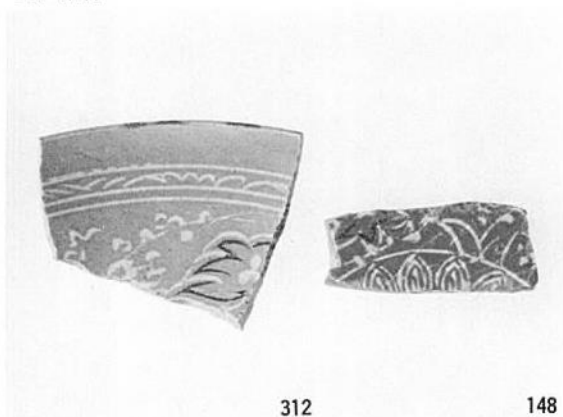
2. 染付



88

183

3. 天目



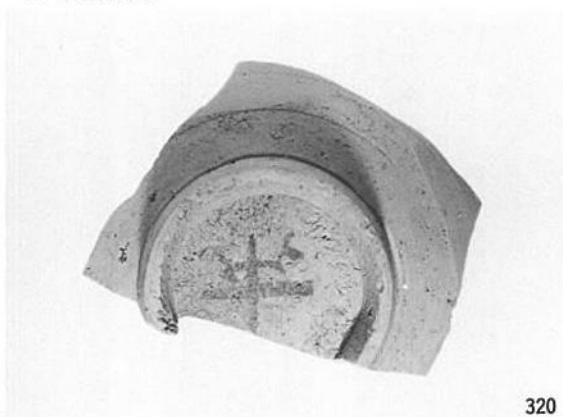
312

148

4. 高麗青磁



317



320

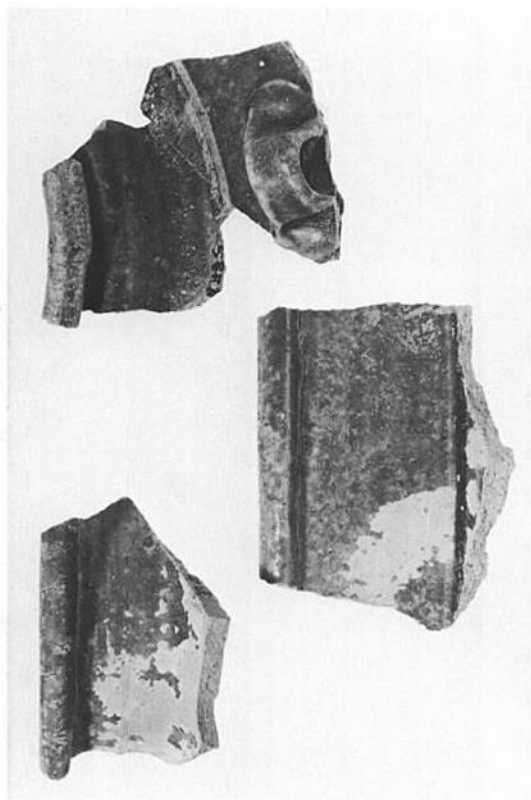


318

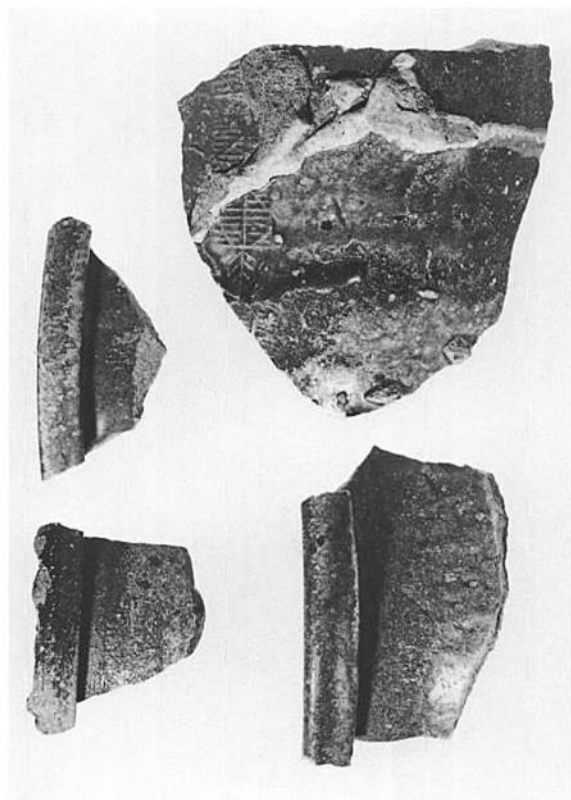


322

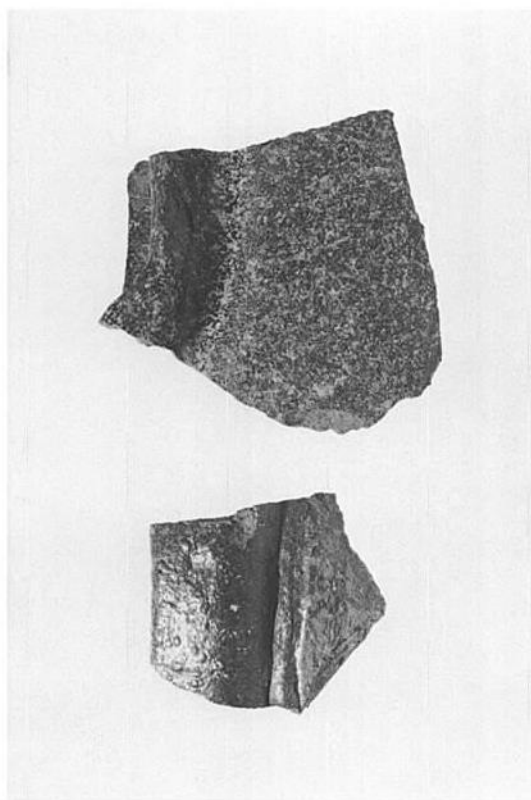
5. 墨書



1. 中国陶器



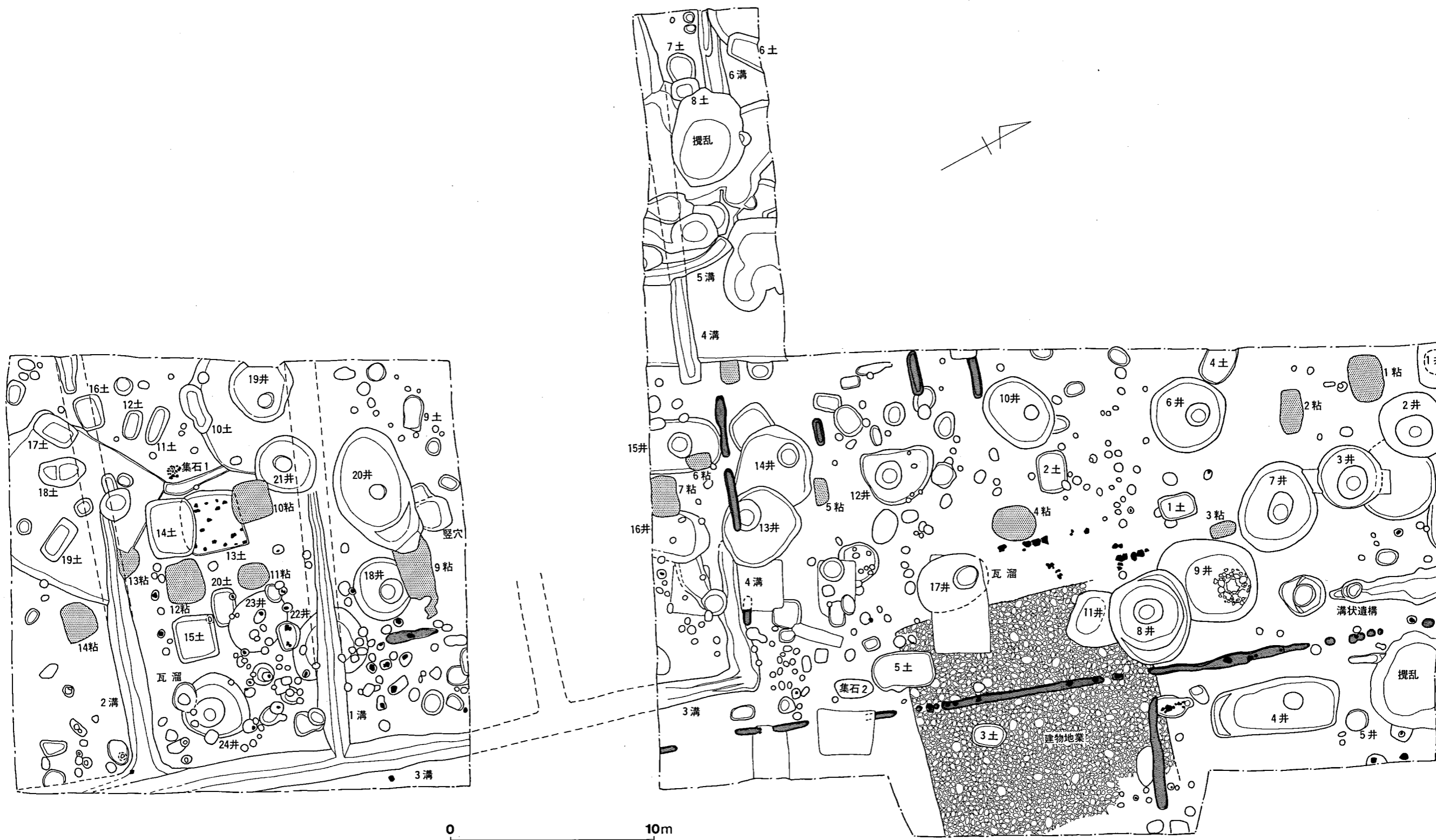
2. 常滑烧



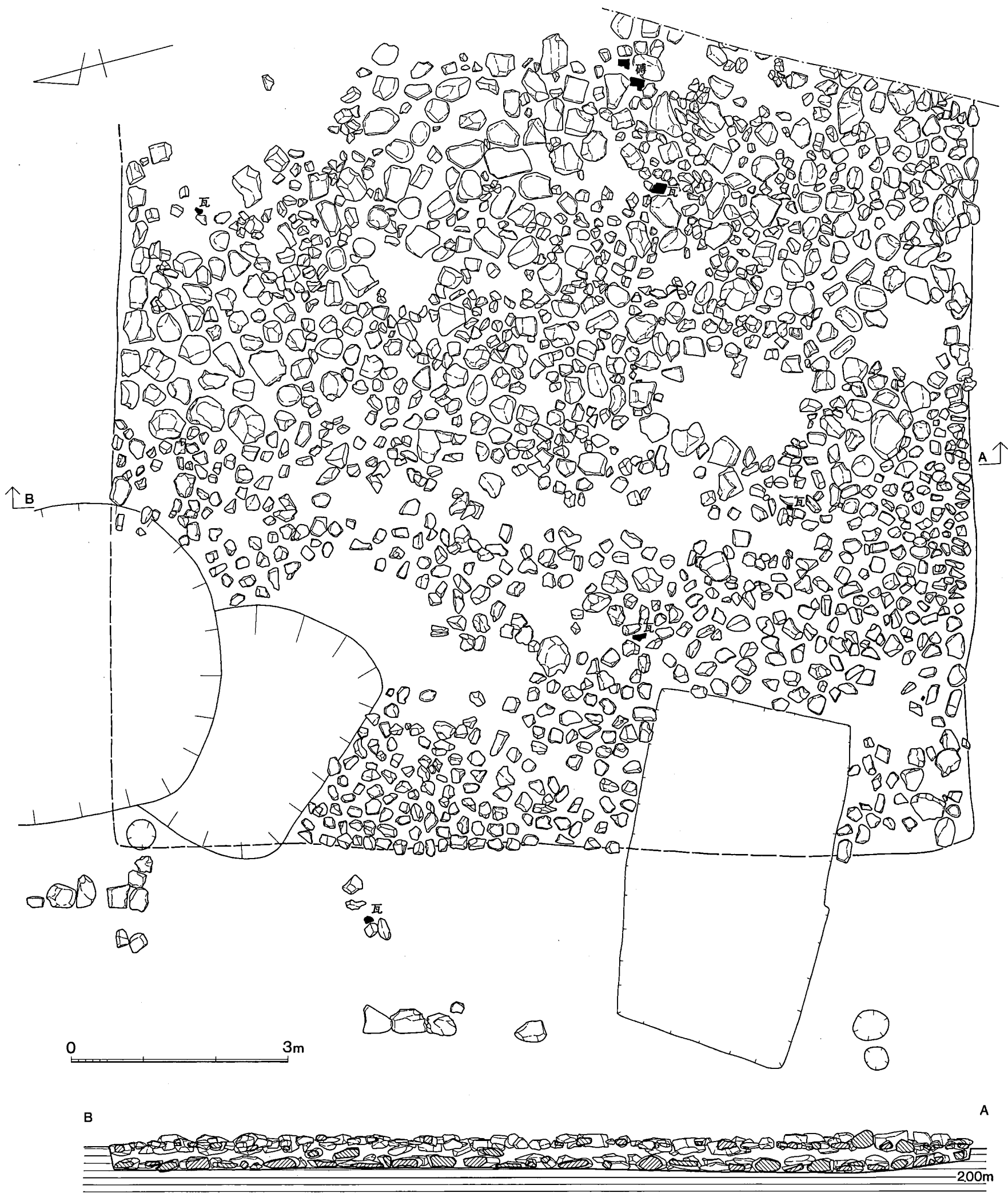
3. 備前烧



4. 信楽烧



付図1 遺構配置図 (1/200)



付図2 箱崎遺跡建物地業実測図 (1/60)

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 6 1	登録番号 1 4

箱 崎 遺 跡
福岡県文化財調査報告書
第79集

昭和62年 3 月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印刷 福岡市西区徳永877-1
正光印刷株式会社